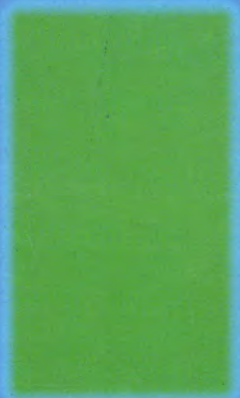


日本への回帰

平成5年 厚木合宿レポート

第29集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰

(第二十九集)

—第三十八回学生青年合宿教室(厚木)の記録より—

は し が き

最近の特派員電は、米露友好のシンボルとしてこのほどロシアが米国に贈呈したコロンプス像（高さ九四・八メートル）が当初の目論見から大きく逸れて、ついにはお蔵入りになりさうだと伝へてゐる。ロシア政府はソ連崩壊後、米国政府から寄せられた物心の支援に応へるべく、「新大陸発見五〇〇年」といふ今の時期をも考慮して、コロンプスの巨像（フランス国民が米国独立一〇〇年祭を祝つて贈つた「自由の女神」像の高さは九二・九メートル）を制作し寄贈することにしたのだつた。しかし、折から米国内で高まりを見せてゐるポリテイカル・コレクトネス（政治的正当性）の思潮に阻まれて、折角の親善のための企ては、コロンプス像の一部分が米国に到着したところで頓挫する破目に陥つたのである。

従来からの西欧キリスト教的価値観に立てば「コロンプス（白人社会）の新大陸発見」となるが、非キリスト教社会の先住民に見れば「西欧文化（キリスト教文化）との遭遇」とな

る。「偉大なる探検家」コロンブスは「略奪と虐殺の征服者」となるわけである。従つて、いまやインディアンといふ呼称は「新大陸」に到達したコロンブスがインドと勘違ひして報告したこと端を發したのだから「ネイティブ・アメリカン」となるのである。ポリテイカル・コレクトネスは現在、*「言葉狩り」*的要素を見せてゐるとのことだが、それによつて大航海時代以降の歴史の真相があらためて焙り出されることとなつた。

謝肉祭において「悪魔」に扮して踊り狂ふドイツ青年は、その悪魔の名を問はれて次のやうに答へるといふ。「我々は悪魔なんかぢやない。我々こそゲルマンの本当の神々なんだ」と。また、古ゲルマンの祭儀に臨んだ者は「形骸化した私たちの信仰と違つて、本当の信仰の喜びと幸福といふものを初めて知りました」とその感激を語つたといふ。外来の価値観（キリスト教）が入つて来たことによつて、ゲルマンの神話是否定され、旧来の神職関係者は頑固な信者とともに死罪もしくは不可触賤民として何代も生きることを強制された、と史家は指摘してゐる。

いま、西欧精神世界に、ギリシア・ローマ以来の、キリスト教ヨーロッパ史そのものを見

直す気運が生れつつあるともいはれてゐる。父祖に連なる本来的生き方を尋ねる「本然の我たらん」とする胎動である。これは何もヨーロッパに限られたことではなく、その表れ方は区々であつても、ここかしこ、地球上の到るところで精神的文化的な自立を図らうとする動きが顕著になつてゐる。米ソ冷戦の終焉、即ち、ソ連の自壊と米国の後退によつて、古今変はることなく続いてゐる「自らを托し得る者は自らの他にはあり得ない」といふ自存自衛自立の底流が否応なしに目立つやうになつて来た。冷戦の終結が世界を再び「戦国時代」の常態に引き戻したといはれる所以である。

翻つて我國の現状はどうであらうか。「本然の我」に目覚めるところか、いよいよ自己喪失の度合ひを深め、はるか低次元のところまで踳踏してゐる。

例へば「普通の国にならねばならぬ」と説く有力政治家は、「日本国が国権の発動として自衛隊を指揮命令するのではなく、自衛隊そのものをすべて国連の指揮下にゆだねる」、「日本政府の指揮権を完全に放棄し、明確に国連事務総長の指揮下に置く」ことで、国連の平和維持活動と憲法との整合性を語つてゐる。徹底した自己不信の表白である。これさへも自衛

隊の海外派遣で行き過ぎであるとの強硬な反対意見がある。所謂「改憲論者」といへども「平和憲法の理念」から一歩たりとも出ることが出来ないのだ。

敗戦後の占領期に強制された武装解除規定は、「日本国民」の名を騙る連合国軍最高司令官によつて、内発的な意思であつたかの如くに偽装され「平和憲法」となつて日本人の心と頭を痺れさせてゐる。いまや外務省幹部は臆面もなく「ハンディキャップ国家」を自称してゐる。ハンディキャップを克服しようといふのではない。「ハンディキャップ国家」が日本の進むべき道ではないかと思ふ」と外務事務次官は公言してゐる。その一方で国連安保理の常任理事国入りを目指すといふのだから支離滅裂である。欧州連合（EC）も、東南アジア諸国連合（ASEAN）も、先づ発足したアジア太平洋経済協力閣僚会議（APEC）も、自立意思に横溢する国同士の協議協力体である。国連もまた然りである。

対露・対韓・対北朝鮮・対中・対米・対「ウルグアイ・ラウンド」等々の交渉で、我国の外交陣が一方的に押しまくられてゐるかに見えるのはハンディキャップ国家に相応しいことかも知れない。戦歿者追悼式における連立内閣首班の「式辞」が自立意思なき現状の全てを

象徴してゐる。

はたして、このままで我国は国際場裡で信頼されるパートナーとして遇され得るのだろうか。「日本と日本人」が国際社会の眞の構成員として自立的に他国に伍す日はいつのことだらうか。その日の近からんことを願ひつつ當んだ研修の記録がこの冊子である。行間にこめた我々の微意をお汲みとりいただければ幸甚である。

最後に当り、村松剛先生、佐伯彰一先生、宇野精一先生には御講義要旨の掲載をお許しいただいたばかりでなく、御懇切なる御加筆を賜ったことに深甚なる感謝を申し上げます。

平成六年二月一日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日（八月七日）

現代青年の課題 —— 知性と感性の恢復を求めて ——

.....熊本県立第二高校教諭

白濱 裕.....3

第二日（八月八日）

この人を見よ —— 若き日の宣長と松陰 ——

.....福岡県立太宰府高校教諭

占部 賢志.....27

明治維新と現代日本評論家・筑波大学名誉教授

村松 剛.....53

第三日（八月九日）

日本文化の深層文芸評論家・東京大学名誉教授

佐伯 彰一.....87

第四日（八月十日）

日本の国がら —— 皇太子殿下をめぐる御歌を中心に ——

.....九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎.....119

講話

伝統について 東京大学名誉教授・文学博士 宇野精一 147

短歌入門

短歌創作導入講義 日商岩井懶ガス・石炭本部副本部長 澤部壽孫 159

短歌全体批評 —— 講話（科学の限界としきしまの道）を添へつつ ——

..... (財)国民文化研究会常務理事兼事務局長 長内俊平 177

青年の言葉

短歌を通して観る生徒の心 福岡県立水産高校教諭 菅原亨二 213

豊かなる人生を求めて (株)日立製作所エネルギー研究所勤務 松井哲也 223

一年の歩み 中央大学文学部四年 草野直樹 231

合宿教室のあらまし 亜細亜大学法学部三年 松田裕幸 241

合宿詠草 267

あとがき



講

義

現代青年の課題

—知性と感性の恢復を求めて—

熊本県立第二高等学校教諭

白濱裕



合宿地から望む鐘ヶ嶽

当世大学事情

知性の崩壊

「まじめ」の崩壊——ヒルネグイスキ人間——

中田厚仁さんの死

生命尊重以上の価値

「魂の世話」

心を鍛へる学問

当世大学事情

はるばると日本全国からこの地にお集まりの皆さんの中には、これからどんな内容の合宿が始まるのだらうかと不安に思つて、この場に臨んでをられる方も多々あらうかと思ひます。学生時代、初めてこの合宿に参加したときの私も同じ思ひでした。そこで、これから、私なりにこの合宿が目指すもの、またこの混沌とした現代において、一学生としてあるいは日本人として、どのやうな志をもつて生きて行けばいいのか、さういふことを、皆さんと一緒に考へてみたいと思ひます。

実は、今度の合宿に関して、私の教へ子の数人に、だいたい次のやうな文面の紹介の手紙を書きました。

「…この合宿は、レジャーランド化したと言はれる現在の大学の中において、本当の学問をしたい、生涯の友人を得たい、日本と世界の現状と行く末を案じ、あるべき姿を考へたいといふ学生・青年の参加を得て、三十数年続けられて来た合宿です。

僕も大学に入学して、『こんなはずじゃなかつた』と悶々としてゐた時期に参加して、単に自分の専門の狭い世界だけではなく、人文社会に関する幅広い勉強をさせてもらひ、また全

国に素晴らしい先生や友達を得ることができました。いはば今日の僕の「核」を作つてくれた合宿です。

あの講演嫌いで有名な批評家の亡き小林秀雄さんが、「ここには本当に自分の話を聴いてくれる学生がゐる」と言はれ、何度も足を運んでくださったやうに、当代一流の講師のお話に触れて、全国の学生と胸襟を開いて付き合へる場といふものは、今の日本ではなかなか得難いのではないかと思ひます。ぜひ万難を排して参加を検討してみして下さい。」

それに対して、ある生徒が次のやうな内容の返事をくれました。

「：お手紙ありがとうございました。返事が遅れて申し訳ありません。僕は大学生をやりながら再び受験勉強をやつてゐる仮面浪人です。それといふのも、僕は新聞記者になりたくて社会学部のある大学を受けたいのです。」

：大学は相変はず面白くないです。教へる人達が下手です。あの人たちは現状に満足してゐて、僕たちに教へるといふよりも、とりあへず授業のノルマを果たすと言つた人が多いです。でも、これが大学の現状かなと思つてしまひます。とにかく勉強頑張ります。また、お手紙書きます。」

私はこの手紙を受け取つて、何か胸が締め付けられるやうな思ひが致しました。高校時代あれだけ一生懸命勉強して、そして自分の希望する大学に入つた。その大学がこのやうな砂

生青年合宿教室



を咬むやうな状態。勿論、本人が学部選択の誤りがあつたと思つてゐるにせよ（私は、新聞記者になるのに必ずしも社会学部に行く必要もないとは思ひますが）、彼にそこまでの決意をなさしめたといふことは、現在の大学の講義に学生の心を揺り動かす何物かが欠けてゐると言はざるを得ないのです。

いずれにせよ、この生徒は何とか現状からの脱却を試みて来年再受検をする。しかし、果たして、めでたく社会学部のある大学に合格したからと言つて、彼の期待に応へてくれる大学が現在幾つ日本にあるでせうか。

そこで、現在の大学の現状を象徴的に語る一つの例として昨年、早稲田の政経学部を産経新聞がレポートした記事を紹介します。

産経の記者がいはゆる潜りの学生として教室で待ち受けると、十五分程遅れて教授が姿を見せた。と

ところが、二百名収容の大教室なのに学生は二十名にも満たない状況である。教授は出席を取ることもなく、ノートを開いて独り言をつぶやくやうに、ほそほそと講義を始めた。毎年同じ箇所を話してゐるので澁みなく話して行く。学生達もノートを採るでもなく質問するでもなく、ぼんやり過ごしてゐる。二百人収容の教室を使つてゐるのだから登録学生はそれに見合ふ数だけゐるはずだが、いつも二十人位しか出てゐない。なぜそんなに沢山登録してゐるのか。それは単位が楽に取れるからだ、と言ふりポートです。

早稲田の政経と言へば、私大文系では最難関学部であります。私の勤務している高校でも、生徒が合格したら、大騒ぎして大変な実績として記録されるやうな所です。しかし、かふう実態を知れば、それは空虚なお祭り騒ぎに過ぎないことがわかります。とは言ふものの、このやうな光景は何も早稲田だけではない。ほぼ、これと近い状況が大方の大学において見られるのではないでせうか。

昨晚、皆さんが書きにまつた今回の合宿のアンケートの一部を拝見させていただいたのですが、中には本当に絶望とも叫びとでも言つてよいやうな大学の荒廃ぶりが書き記してあるものがありました。

知性の崩壊

このやうな大学の状況は今に始まつたことではありません。私の学生時代にも、大なり小なり同じ状況はありました。しかし、やはりたくさんの有為な若者を収容してゐる最高学府である大学といふものがどういふ状況にあり、どういふ教育をやつてゐるのか、これは日本の重大な社会問題の一つであります。

以上述べた大学の荒廃の原因も、大学側、学生側それぞれにさまざま考へられるとは思ひます。例へば、いつたん教授になれば実績がなくても余程のことがない限り、左遷や黜になつることのない大学の無競争主義の弊害、あるひは、よく言はれることですが、欧米に比べると入学時よりはるかに安易な卒業制度に安住した学生の不勉強など。

しかし、ここでは高校段階までの教育の問題と、現代学生の気質や価値観の変化に焦点を合はせその背景を考へてみたいと思ひます。

皆さんも経験なされたやうに、第二次ベビーブームの波がピークを迎へたここ数年間、受験者の増大に伴つて、激しい受験競争が繰り広げられてきました。進学校では、長期休暇や日曜日までつぶして、課外授業や模擬試験と、とにかく、スケジュール的に詰め込むだけ詰

め込むといふ日課が三年間続く訳です。さうしますと、図書館で本を読み社会問題や人生問題に思ひを巡らすとか、数学や理科の定理にしても、なぜさうなるかとかをちつくり考へる余裕など物理的にありません。生徒は、巢でえさを待つ雛鳥のやうに与へられた教材を味はふゆとりもなく、口を開けて丸のみにして行くしかありません。その結果、「問ふ力」といふやうなものがすっかり衰へてしまひました。

例へば、今授業で高校一年生に、自由にテーマを選ばせて調査研究させ、発表や論文にまとめさせるといふ作業をやらせてゐますが、まず、テーマ選びから難航します。つまり、自分たちが日頃から最も関心をもつてゐる社会問題をテーマ設定させる訳ですが、それができない。選んだとしても、日頃関心も持つてゐないのに、マスコミが数多く扱つてゐる問題に安易に飛びつく。

つまり、自分以外のことに關して内発的関心といふか、切実感がない。与へられた問題に對しての「問題解決能力」はまあまあ優れてゐるが、自分の頭でものを考へて問題と切り結んで行くといふ「問題発見能力」に欠ける。もつとも、センターテストといふものは、トレーニングを積めば、ある種の勘が働く生徒にとつては誠に点を取りやすい制度ですから、そのやうな能力は不要なのもかもしれません。与へられた教科内容を疑問をもたず暗記し、スピードと勘を駆使して効率よく發揮できる才能、それが受験に際して生徒に求められる資質で

はないかとさへ思へるやうな現実なのです。

最近の生徒は「受け身」だ、「指示待ち人間」だとか批判しますが、実際は大学入学までの教育がそのやうに作り上げてしまつてゐるのかも知れません。従つて、勉強熱心で真面目な生徒ほど、丁度ゴムが伸び切つたやうな状態で大学に入学して、目標を失つてしまふといふ状況があると思ひます。

また、大学に送り込む側の、我々高校教師側も、とにかく偏差値が一つでも上の大学に合格させたらそれは学校の名誉、あるひは担任の手柄であつて、大学に入学した後の自分の教へ子たちの心の在り方や生き方に関してほとんど関心をもたないところなど、反省させられる所です。

「まじめ」の崩壊「ヒルネダイスキ人間」

他方、私達の学生時代に比べて、若者の気質や人間関係も随分変化して来てゐるやうに思ひます。

博報堂の生活総合研究所は高度成長後の豊かな社会に生まれた若者を指して、「ヒルネダイスキ人間」と表現しました。その意味は、「ヒ」||人並み意識。いはゆるグループ内で浮き上

がることを嫌ふ平均指向。「ル」||その日を楽しく過ごし辛いことは避ける。「ネ」||ネアカブリッ子。多くの若者が長所としてあげるのは「明朗さ」。「ネクラ」とか「暗い」と言はれるのを極端に恐れる。「ダ」||団体行動。何をするにも団体行動、「赤信号みんなで渡れば怖くない」の意識。「イ」||一応。絶対の自信がなければ断定的なことは言はない。何か答へるときはいはゆる逃げ道、自己防衛として「一応」といふ言葉をつける。「君、これどう思ふ」「こうだらう」と聞かれても、「まあ、それもさうですね」とか「それもいいんじゃないんですか」など、とにかく断定を避ける。「ス」||スポーツ好き。それも上下の關係の厳しい体育会系のきついスポーツではなく、格好いい同好会的な軽いスポーツ。「キ」||気配り。グループ内の協調性は抜群で、相手を傷つけないやうに友達に大變気を遣ふ。常に一定の距離を保つて付き合つて行く。といふ意味ださうです。皆さんどうですか。思い当たる節がありますか。

また、日本青少年研究所の千石保氏は、昭和五十二年（一九七七年）前後から日本人の価値観が決定的に変化した、すなはち、青年本来が持つところの、正義感をもつて不正を憎み、純粹で崇高なものにあこがれるといふ氣質が日本の若者社会からは失はれてしまつたと言はれます。（『まじめ』の崩壊 千石保著）

昨年この時間の講義で、八木さんがアラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』

といふ本を紹介されて、価値相対主義からの脱却を訴へられました。この本によると、このやうな現象はアメリカにもみられる。しかし、日本の場合は一才極端のやうです。

総理府が世界の青年と日本の青年の意識を国際的に調査し比較した「世界青少年意識調査」の結果を見ると、「個人生活指向か社会生活指向か」「今の社会に満足しているか」の項目では、日本は個人主義の国アメリカ以上に個人指向が強く、「不満」の割合も高い。国民の殆どが中流意識を持ち、今や世界一とでも言つて良いほど豊かで平和な国民生活を享受してゐながら、青年のこころの内部には鬱没たる不満が渦巻いてゐることが分かります。

さらに、「自国のために役立つと思ふやうなことをしたい。そして、そのためには自分自身の利益を犠牲にしてもよい」といふ項目では、「犠牲にしてもよい。」と答へた数は先進国では日本が最下位です。このことは、自分の国の運命には全く関心がなく、国家に対する献身の意識も極めて薄い、そのやうな世界の青年と比較して特異な日本の若者の実態を如実に示してゐます。

それでは日本の若者といふのは、貝の殻に閉ぢ籠つたやうに、個人的生活に埋没し、自身自身の利害に無関係の事柄に対しては全く行動を起こさないのか、といふと私は必ずしもさうは思ひません。むしろ今日の日本の平和と繁栄の中で、そのやうな機会が与へられてゐないだけではないかと思ひます。国家に一旦緩急あるときには、どこの国にも負けない立派な

志と行動をもつて世界に貢献できる若者がきつと出現すると信じてゐます。

中田厚仁さんの死

その一例として、まだ記憶に新しい所ですがカンボジアの総選挙実施に際して、ボランティアとして二十五歳の若い命を散らした中田厚仁さんの短い一生をたどり、その死の意味を皆さんと一緒に考へてみたいと思ひます。

中田厚仁さんのお父さんの武仁さんが雑誌『文藝春秋』に寄せられた「桜とともに天に召された息子」と題された手記によると、厚仁さんは、商社マンである武仁さんの勤務の都合で小学校時代をポーランドのワルシャワで過ごし、小学校2年生のとき、アウシュビッツの収容所を訪ねます。まだ幼い厚仁さんを悲惨な歴史の現場に連れて行つた思ひを武仁さんは、その手記で「私は、現実には砂糖やクリームでデコレートしたもののばかりではない、事実を知るといふことから目を背けてはいけない。そして、大人の言葉で飾つて伝へるのはよろしくないと考えたのです。ですから、ただ事実だけを受け止めてくれるやうにと何の解説もしませんでした。」と、このときの体験が、国際平和のため身を挺してでも尽くしたいといふ厚仁さんの堅い意志の起点になつたと述べてをられます。

厚仁さんは、帰国後しばらくして大阪の高校を経て阪大に入学します。卒業のとき日銀に入らうとしますが、結局、いろいろ悩んだ末、アメリカ系のマネージメント・コンサルティング会社に就職します。しかし、実際の仕事に就く前に、社長に「仕事もやりたいがカンボジアのことはタイムリミットがある。ここはぜひ入社を待つてもらひたい」と了解を取り付け、国連ボランティアに応募し、カンボジアに赴任します。

カンボジアはご承知のやうに、ポル・ポト派の妨害が予想される中、パリ和平協定に基づいて総選挙を実施することになつてゐました。中田さんの任務は、村村の人々に今回の総選挙の意義を説き、住民の選挙人登録をする事でした。海外生活で身につけた英語の会話を駆使して、精力的にポル・ポト派の出没する危険な地域にも率先して巡回したやうです。そして、運命の四月八日、コンポントム州を自動車で行中、何者かに襲はれ、殉職。「I am dying」と言ふ言葉が最後の交信だつたといふことです。

その後、マスコミを通じて紹介された、遺骨を抱いて帰国された武仁さんの毅然たる態度と言葉は、平和ボケした日本国民に強い衝撃と感銘を与へました。放送局のインタビュアーは、何とかして武仁さんの口から「政府は、あるひはUNTAACはどう責任を取つてくれるんだ」といつた恨みつらみの言葉を、同情するふりをしながら何とか聞き出さうとしますが、それにまつたく動じられる事なく、次のやうなことを述べられました。先程の武仁さんの手

記の一部を読みます。

「厚仁のからだは白い布に包まれ、とどめを刺された一撃である後頭部から左目に貫通した銃弾の痕も、それとわからないやうに包帯で包まれてみました。母親がせめて手だけでも握つてあげたいと申しまして、恐れおののきつつ白い布を解きますと、厚仁の手は胸のうへで合掌するやうに組まれてみました。この姿を見たとき、私には厚仁が私たちの息子であるといふよりも何か崇高なものであるやうな気がしたのです。：息子ではありませんが、気高い人間性の発露、人間の尊厳を見たやうな気がして、もう厚仁は私たちのものなどではなく、たいへん気高いものになつたといふ感動を覚へました。：今になつてみると厚仁は『死に急いだ』といふ気がします。グーッと凝縮した二十五年と三カ月を生きて行くことで、厚仁は何かを見てしまつたんじゃないか、そんな気がしてなりません。：厚仁は常々『世の中には誰かがやらなくてはならないことがある。僕はその誰かになりたい』と言ひ、それをこの地で現実としたのです。厚仁とはいつても『自分たちを安全地帯においてるながら、他のことについて、饒舌にああだかうだといふことはみつともないからやめよう』と話してりました。：日本の報道をご覧になつてみた中には、私が息子を不慮のことで亡くしたにもかかはらず、取り乱さず、落ちつき過ぎてゐる、と不思議に思はれてゐる方がいらつしやると聞きました。しかし、けつしてさうではありません。最初に電話でこのことを聞いたときには、そ

れこそ頭の中は真つ白になりました。：今でも深夜や朝方には耐へきれず、泣き叫ぶことがあるのです。

：厚仁の情熱とその死の意味について、マスコミの方を含めて解説を求められることが多い。実は私も解説がほしいのです。しかし、たつた一つしかない。それも二十五歳の命を捧げたものは一体なんだつたのだらうか。そのことは簡単に、『それはかういふことなんだ』『ああ、さうだつたのか』といったことにはならないと思ひます。少なくとも打算ではない。損得でいつたら命に替へられる得などないからです。：信ずるもののためには命を捧げても行動する、といふ崇高さを持つた人間を示してくれたことが、厚仁の救ひであると思ひます。貴いもの、崇高なものが人間の中にはあるといふことを信じさせてくれたことが。」

大阪大学を卒業した厚仁さんは、普通であればエリートコースを約束されたその後の人生であつたでせう。しかし、彼はカンボジアの現実を見て、先の湾岸戦争のとき、我々があたかもテレビゲームでも見るやうに他人事として受け止め、口先だけの茶の間の平和論をぶつことはできなかつた。自分の青春をかけて悔いないと信じ、利害や打算を打ち捨てて、戦火燻るカンボジアに出掛けて行つたのです。ただ、実際に厚仁さんの人柄を知る人は、彼はいつとも人に接するのに笑みとユーモアを絶やさず、ちつとも気負つた所はなかつたと書いてを

られます。それだけに余計その死が悼まれます。

生命尊重以上の価値

この事件は、人命尊重と経済的繁栄を至高の価値として、国際的な紛争にかかはることを忌避して来た戦後の日本人にとつて衝撃的な事件でした。戦後の日本人の価値観は、「命あつての物種」すなはち何物に対しても人命の犠牲を容認しない生命尊重至上主義と、経済的豊かさを達成することにすべての人力と資力を傾注するといふ経済至上主義、この二つしかないと言つても過言ではないでせう。

実際、昭和五十一年に起つたダッカ事件では、これは連合赤軍によつて日航機がハイジャックされ、バンガラテッシュのダッカ空港に強制着陸させられた事件ですが、時の首相は「人命は地球より重い」といふ言葉を吐いて、犯人の要求を全面的に呑み、いはゆる超法規的措置によつて、持参金をつけて犯人たちの仲間を釈放し、ダッカまで送り届けたのでした。しかし、国際世論は正義と秩序を破壊する処置であるとしてその反応は冷たく、翌年のボンサミットでは、日本はその対応を厳しく非難されたことは皆さんご承知の通りです。

人命は勿論尊く掛け替えのないものです。ましてや子を失つた親の悲しみといふのは、経

験したものでなくては分らない悲痛なものがあると思ひます。武仁さんも、「深夜や朝方には耐へ切れず、泣き叫ぶことがある」と言つてをられるように、きつと今もなほ心中深い悲しみの中でお過ごしのことと推察します。しかし、武仁さんは、その個我の悲しみを越へて、「信ずるもののためには命を捧げても行動する、といふ崇高さを持つた人間を示してくれたことが、厚仁の救ひである」と言はれた。世の中には命に替へても守らねばならない価値があること、そしてそれに殉ずるところに人間の尊厳と崇高さがることをあらためて私たちに指し示して下さつたと思ふのです。

また、息子の死の責任を他に責任転嫁するやうな言葉一つ吐かれず、おつと耐へてをられた、そのお姿に、私はUNTACの明石さんが言つてをられたやうな、「戦後の日本人が失つてしまつた伝統的な武士道の克己の精神や慎み」とでも言ふやうなものを、あらためて思ひ起こされました。武士道と言ひますと古い感じがしますが、西洋で言ふと「ノブレス・オブリージ（高貴なる者の義務）」、言ひ換へると民族としての、あるひは日本人としての矜持、とでも言つてよいかと思ひます。現在の日本人が忘れてしまつたそれを目の前に差し出されて我々自身が戸惑つてゐる、さういふ状況ではなかつたかと思ふのです。

さて、この事件を巡つてさまざまな世論が巻き起りました。その中には、「危ふい父子美談」として揶揄したものもありました。それらを読み私は、すべて目に見えぬ人間の崇高な

行為を認めず、どんな英雄も自分と同じレベルに引き下げずにはすまないといふ現代の病態が典型的に現れてゐると思ひました。しかし、次の文章を読んでみて下さい。

「……中田さんと高田さん（カンボジアで殉職した警察官・引用者注）の死は、方程式のマイナスを一斉にプラスに変へるやうに、私たちが長らくマイナスとしてゐた言葉を明らかに見せてくれた。勇氣、使命感、滅私、献身などといふ美德がこの世にあることを、カンボジアに残つて働く日本人が生きて家族の元に歸つて来るかどうかが運（これを神といつてもいい）にかかつてゐるといふ一種畏敬の念を、日本人の心の最も柔らかい部分においてくれた。

将来のことは分からない。だが私は、この『カンボジア』が戦後日本の精神史の上に、いかなる形をとつてか、必ずや文化的な影響を与へるはずだと思ふ。円高のやうな経済的現象ですら、大きい文化的影響を持つたことが、海外に住む日本人に会ふと分かる。まして今度の出来事は、日本人をして肅然とさせる精神的打撃だつた。これが文化的な意味を持たないはずがない。それはきつと、目に見えない速度で、誰もそれと気付かない形ではあるが、人命尊重一点張りだつた戦後日本の文化と日本人の心を変へていくだらう。」（徳岡孝夫『諸君』）

平成五年七月号より

徳岡さんは、ベトナム戦争のサイゴンが陥落するとき、最後まで現地に踏みとどまつた勇氣あるジャーナリストですが、この文章は今回の事件の意味を余すところなく表してゐると思ひます。

周知のやうに、森鷗外は、明治天皇に殉じた乃木さんの事件に衝撃を受け、即刻、『興津弥五右衛門の遺書』といふ作品を書き上げますが、その中に細川三斎候の言葉として「すべて功利の念をもつて、者を見候はば、世の中に貴きものは無くなるべし」といふ言葉を書き残してゐます。勿論、利害打算、功利の念によつてしか動かないやうな人間がこの世にゐることは事実です。しかし、歴史を繙けば、先の大戦末期、日本を守るために爆弾を抱いて愛機もろとも敵艦に体当たりして散華した特攻隊を初めとして、「功利の念」を超越して祖国に命を捧げた沢山の人々がゐたことを我々に提示してくれてゐます。

中田さんの死後、国連ボランティアへの問ひ合はせは五倍に増え、青年海外協力隊への応募は過去最高を記録したさうです。もしこれが、中田さんの後に続く若者が続々と出てくる兆しであるとするれば、一片の救ひであるやうな気がします。

「魂の世話」

さて、このやうな精神は何も日本だけではありません。衆愚政治と化した古代ギリシャのアテネにおいて、生命尊重以上の価値を人々に悟らせるべく、従容として死の床についたソクラテスも、功利の念を超越した生き方を示した人でした。

哲学者としてのソクラテスの生涯については、皆さんも高校の時にお習ひになつてご存じのことと思ひます。彼は、人類の教師といはれるやうに、人々に「無知の知」を悟らしめべく、激しい情熱を持つた優れた教育家であり、ペロポネソス戦争に二度も従軍して勇敢に戦つた武人でもありました。私たちが、弟子のプラトンが書き残してゐる文章によつて、彼の真摯な生き方と言葉に触れるとき、とても数千年を隔ててゐるとは思へない。現在の自分を顧みて、雷に打たれたやうに凜然とさせられるのはなぜでせうか。それは、洋の東西を問はず、また時代を経ても変はらない人間の真実がそこに示されてゐるからではないか思ひます。

「無知の知」を自覚することが学問の出発点であり、その目的は金儲けや立身出世のためではない。そして、自分が信ずるものを守るためには生命をも捧げる。このやうなソクラテスの生き方は、まさに先に述べたやうな戦後の日本の生命至上主義と経済至上主義に対する

痛烈なアンチテーゼとなつてゐるのに気づかされるのです。

しかし、今日、多くの人に尊敬されてゐるソクラテスがなぜ、当時のアテネの市民によつて断罪され、死刑に処せられたのか。その事情は、現在の日本の状況と比較するとき分かるやうな気がするのです。

ソクラテスが起訴された理由の一つは、「アテネの青年に悪影響を与へた」といふものでした。しかし、永遠に偉大なる教師が青年に悪影響を与へるとはどういふことなのか。彼は友人から聞いた「ソクラテスにまさる知者はゐない」といふデルポイの信託に反証するために、当時の一流といはれてゐる人々を訪ねて、自分の無知の实情を神に示して信託を訂正しようとするのですが、反つて次のやうなことを発見します。すなはち、専門家は、専門の知識ではもとより優れてゐるが、人間として知るべき善や美の重大な問題については、無知であるのにその自覚がない。（なにやらマスコミを賑はしてゐる現代の日本の評論家のことを言つてゐるやうですが）だが自分はせめてその無知を自覚してゐるから、その分だけ僅かに知者かもしれぬ、といふ発見であります。

ここで彼が問題にしてゐる知恵が、専門的な知識を越へてゐることは注意を要します。むしろ彼は専門知識を否定した訳ではありません。しかし、人間にとつて最も大切なのは、いかに生きべきかといふ問題と取り組むことなのだ。皆、一番肝心な「魂の世話」を怠つてゐ

るではないか。この点に関して、みな無知に等しいのに、金儲けや立身出世にうつつを抜かして、何を思ひ上がつてゐるのかと、アテネ市民に警告したのです。しかし、そんなおせっかいを世人が歓迎するはずがありません。ソクラテスは、『ソクラテスの弁明』の中で、「私は恨まれました」と言つてゐます。

彼は一方では、青年達を捕まへては同じことを説きました。しかし、当時の若者も今と同じで、専門の勉強をして無事に卒業し、いい就職ができればそれで万事OKといふ事情は変はらなかつたのでせう。また、親も子供の立身出世を願ひ、良い学歴を得させるための出費も惜しまなかつた。ソフィストと呼ばれる職業教師の一群はそのやうな需要によく応へました。親や子供にすれば、「ただ生きるのではなく、よく生きることが大切なのだ」といふソクラテスの主張は、今日的に言ふと、「受験」に悪影響を及ぼす「余分な勉強」と思はれたでせう。つまり、ソクラテスは、人生において、「受験勉強以外の「余分な勉強」をすることの大切さを若者達に説いた。その結果、処刑されたと言つてよいかもしれませぬ。

心を鍛へる学問

この合宿が目指すものは、一言でいえば、「人間としていかに生きべきか」といふことを、

友達と胸襟を開いて語り合ひ、生涯の友を得ると共に、崇高なもの素晴らしいものをそのまま受けとめることのできる感性を養ふことにあります。皆さんは、そのための各自の専門を越えた「余分な勉強」をしないこの合宿に参加したと受けとめてもらつて結構かと思ひます。

昨日の開会式の折りの、主催者代表挨拶で小田村寅二郎先生は、「この合宿の目的とする所は心を鍛へる学問であります。」とおつしやいました。この「心を鍛へる」、ソクラテス流に言ふと「魂の世話」をする、それこそが学問の最終的な到達目標であり、現代の青年に課せられた最重要課題ではないかと思ふのです。しかし、「心を鍛へる学問」そのことの大切さを今の大学も、家庭も、マスコミも誰もが等閑に付してゐる。皆さん自身が自力で開拓するしかないのです。

曾て、西洋の学問を受け売りして学者面することに我慢ができなかつた夏目漱石は、「洋魂」と格闘の末、「自己本位」という境地に蓬着しました。勿論「自己本位」といふことは、利己主義とは違ひます。「私の個人主義」という講演の中で漱石は、自分の鶴嘴で心の奥底に眠つてゐる鉱脈に、ガチンと突き当たるまで掘れ、と言つてゐます。その鶴嘴に相当するのが、例へば、皆さんが大学の専門の勉強でフルに働かせてゐる知性でせう。しかし、その知性も「鍛えられた心」に裏付けられたものでなければ単なる専門馬鹿に終はつてしまひます。とは言つても、漱石でさえ、「私がここに到着するまでには三十年かかりました」と言つてゐま

す。私自身も未だに皆目検討がつきません。ただ、書を読み、師友との交はりの中で素晴らしい言葉に触れ、このやうに皆さんと一緒に研鑽を積むことが、私にとつて最も大切な鉉脈を掘る一過程だと信じてゐます。

最後に皆さんにお願ひしたいことは、最初に述べたやうな、このレジャーランドと化した現在の大学の中にあつても、時代の風潮に流される事なく、自分の瑞々しい青年らしい知性と感性を信じて、この合宿を終へられても勉学に、またこの合宿で知り合つた友達との交流に努めてもらいたいといふことです。

今日からの研修がそのきつかけになつたらこれ程嬉しいことはありません。ご清聴ありがとうございました。

この人を見よ

——若き日の宣長と松陰——

福岡県立太宰府高等学校教諭

占部賢志



七次の溪流

対人関係不適應の時代

青年の青年たるゆゑん

若き日の本居宣長

一、放蕩生活——母からの手紙——

二、こころの疵——恋愛の行方——

吉田松陰の場合

一、挫折のとき——「方寸錯乱」——

二、決断——「丈夫の一諾忽せにすべからざればなり」——

対人関係不適応の時代

最近の大学ではドーナツ化現象と呼ばれる傾向が広がりつゝあるさうです。どんなことかと申しますと、大勢で聴講する講義の際、以前だつたら前列が空いてゐたさうですが、今は真ん中の席がすつぽりと空いてしまふのだといふのです。つまり人と人の間に自分の身を置くことを何となく避ける傾向が強まつてゐるらしいのです。

ほかにも開いた口が塞がらないやうなことも日常的に発生してゐます。ひとりの大学生が前ぶれもなく担当教授の研究室を訪ねてきた。試験の直前でもあるので、講義に関する質問でもあつて来たのかと迎へると、どうもそんな様子ではない。その学生が言ふには、友人の懇願で講義ノートを貸したのだが、試験日が近づいてゐるのに返してくれない、ついてはどうしたらいいか、その対策を尋ねに来たのだといふのです。これは笑ひ話ではない。今悪名高い偏差値で見れば、全国屈指の国立大学医学部生の事例です。

何もこれは大学生に限りません。青少年白書等のデータによりますと、子供時代に近所の異年齢集団の中でソフトボールなどの遊びに打ち興じる体験を持たずに成長した青少年が六十パーセント程度にものぼるといふことです。

とにかく他人にいかに関はるかすべの術が見出せずに、つかず離れずの人間関係の中でフワフワとした生活に浸つてゐる青年が急増してゐます。これらの現象は何も現代日本に限りません。お隣りの中国でも同様の現象が現れてゐるやうです。

先月上旬に私は北京を訪問しました。海外修学旅行の事前調査といふことで、北京周辺をあちらこちら見て回つてきたのですが、向かふの高校も視察しました。いはゆる一流の高校です。温和な副校長に説明を伺ひながら校内を案内していただきました。廊下を歩いてゐると、休み時間なのでせうか、私服の生徒が廊下に腰を降ろし、脚を伸ばしたまま雑談してゐます。そこで副校長は近づいて目配せをして立つて挨拶するやう指示してゐる風でしたが、生徒たちは副校長を一瞥する程度で、まったく無愛想な態度でした。もちろんさういふ生徒ばかりではないのでせうが、ちよつと驚きました。外に出てキャンパス内を見学してをりますと、掲示板にびつしりと書かれた棒グラフが目に入りました。副校長に失礼ながらと尋ねますと、案の定、遅刻欠席の統計でした。グラフの横には遅刻欠席の生徒名がズラッと挙げられてゐました。その時の副校長の苦笑した顔は忘れられません。

中国人ガイドの話では「一人つ子政策」が徹底してゐて、そのため両親が我が子をちやほやして育てる傾向があるといふのです。徹底して甘やかすものですから思春期になると、我儘になり易い。だから子供は「小皇帝」と呼ばれる程エゴイスティックになつてゐるのださ



うで、大きな教育問題だと嘆いてをりました。
いづれにせよ、日本ばかりでなく周辺の国にも対
人関係の中に生きる感覚と能力を欠如したまま青年
期を迎へてゐる実態が散見される現状であり、いま
や社会現象となつてゐます。

青年の青年たるゆゑん

昨日の導入講義で白濱さんは、今の青年にはチャ
ンスが与へられてゐない。チャンスが与へられれば、
必ず目覚める筈だと切言され、海外ボランティア活
動の途中で非命に倒れた中田厚仁さんの事例を紹介
されました。実は高校生の中にもすごい連中がをり
ますので、紹介させていただきます。

毎年七月になりますと、福岡市を舞台にして柔剣
道の全国大会が開かれます。剣道の方を玉竜旗大会

と言ひまして、勝ち抜き戦の伝統ある勇壮な大会です。ある年の決勝戦のことでした。雌雄を決することになったのは、大阪のPL学園と熊本の阿蘇高校です。その阿蘇高校の中に左手首のない選手がをりました。彼は決勝に進むまで右腕一本で全国の強豪をなぎ倒してきたのです。決勝戦では残念ながらPL学園に惜敗しました。

このときの隻腕選手の健闘を称へてインタビューがなされて新聞に載りましたが、私はこの記事を読んで感動に襲はれたのです。彼は学齢前に誤つて藁の裁断機で手首を落としてしまったといふことでした。小学校に入学すると、兄が始めてみた剣道に興味を覚え、習ひ始めるのです。ところが剣道では左手が使へないといふことは大変なハンディです。しかし持ち前の負けず嫌ひで何とか続け、中学では剣道部に入部し毎日練習に励むことになりました。練習の質も量もレベルアップしますと、倍加して左手首のないハンディが襲ひかかってくる。悔しくて何度辞めようと思つたかわからないほどだつたと言ひます。

かうして続け通して阿蘇高校に入学し、もちろん剣道部に身を投ずるわけです。阿蘇高校剣道部と言へば全国屈指の部ですから、練習の質も量もこれまでとは比較にならないほどです。さまじいわけです。当然これまで以上に苦悩も辛さも深化し、放棄したい気持ちの連続だつただらうと推測されるわけですが、彼は高校時代を振り返つて何と言つたか。彼は「中学のころは何度かやめようと思つた剣道だが、より厳しい高校では全くそんな気持ちは起きな

つた」と答へたのです。私は驚きと同時に本当に感動しました。

つまり青年といふのは、ぎりぎりの苛酷な状況に身を置いたとき、そこから逃避しようとか辞めようとかいふのではなく、むしろ逆にその苛酷な状況に捨て身で挑まうとする本能を示すものだといふことを教はつたやうに思ふのです。たしかに先ほど御紹介したやうな幼稚な行動が青年期に現れてはりますが、一方この隻腕選手のやうなすごさも併せ持つてゐるのが青年といふものではないでせうか。

若き日の本居宣長

ここで皆さんに、青年の生き方を学ぶ上で御紹介したい人物がをります。それは本居宣長といふ人物です。徳川時代のすぐれた国学者で、皆さんも名前ぐらゐは御存じでせう。宣長の各種文学論や『古事記伝』はあまりに有名で、我々が『古事記』を読むことができるのも宣長のおかげなのです。それほど偉い学者であり、また緻密で実証的な研究はあまりに有名です。ことにその生活と学問に対するすぐれて計画的な態度は、到底我々の為し得るところではありません。まさしく学問の神様とも云へる傑物です。

ところがさうした到達点ばかり見て、敬して遠ざけてしまはずに仔細にその青年期の実像

を眺めてみると、私たちと同様の青年期の課題に呻吟して生きてゐるのです。では宣長がどんな青年期を生きたか、少しばかり言及してみたいと思ひます。

本居宣長は、伊勢松阪に生まれてゐます。彼の生家は商家であり、家督を継ぐ必要があつたのですが、青年期になつて彼が抱いたのは、学問で身を立てたいといふ熱望でした。結局宣長は母の承諾を得て京都に遊学します。当時京都には堀景山といふ当代一流の学者が塾を開いてゐました。夫が亡くなり、母親お勝の頼りは息子宣長に家業の継承を期待してゐたのですが、息子の懇願を半ば承諾し、ならば医学をやればよいと折り合ひをつけ、遊学を認めてくれたのです。そこで彼は、勇躍上京し、堀景山の門をたたくのです。

一、放蕩生活——母からの手紙——

宣長は、五年間ほど遊学時代を過ごすのですが、謹厳なる学徒生活を送つたかと言ふと、必ずしもさうではありませんでした。むしろ田舎から出てきた若者にとつて京都の雰囲気は心惑はすものも多かつたやうです。さういふ点で今日とまつたく変はりません。とにかく学問に励むとともに、一方では享樂的な生活にも染まつて行つたやうです。まづ煙草と酒を覚え、また歡樂街でも相当遊んでゐたやうで、放蕩の限りを尽くすのです。

この放蕩まがひの行状は、ほどなく人を通じて郷里の母親に知られることになります。宣長の五年間に及ぶ遊学時代に母親が出した手紙は残存してゐるものだけでも六十五通ほどに及びますが、どんなに我が息子の行状を心配してゐたか、切々として胸に迫るものがあります。例へば、宣長からの金を無心する手紙が母親の許に届きます。これに対してまことに母心を示す手紙を出すのです。

此便に御申越候金子三両登せ申候。受け取申され候。尤此金子の義新町七さへもん殿頼候て、利つきの金子借申候てのほせ申候、さやう御心へ候。(中略)届候はば、さつそく先様へ一日も早く返進申さるべく候。(中略)致しにくき所を方々世話いたし調申候。

文面から察するに我が子が借金で首が回らなくなり、郷里へ三両ばかり無心してきた。ところがそれだけの金子を右から左へ用立てる余裕はなかつた。そこで知り合ひに頭を下げて利子付の金子を借金するわけです。かくまでして工面したお金なわけですから、どうか無闇に放蕩しないで貰ひたい、「さやう心得候」と堅く念を押してゐます。宣長は相当な浪費ぐせがついてゐたやうです。

このやうな母心に接した宣長は、改心したかといふと、さうでもないのです。母親が懸念した無頼な生活は依然続いてゐたやうなのです。こんな母からの書簡が遺つてゐます。

伊兵へ殿御物語にて承候へば、そもじ殿事ことの外大酒被致候様に、其御地にて伊兵へ殿へ御

物語御さ候よし承申候。さてさておどろき入候てあんじ申候。(中略)すへずへの事心もとなく朝夕おやの身にてあんじ申候。(中略)大酒被致候はば、当分身のさわりに成申さずおもしろきことと存られ候ても、何れ身のがひをなし申よし人々常々申事に候まま、おやへかうかう一大事と、そのうへ先祖も跡相続も心がけ申され候御事に候はば、酒のみ申され候毎に、おやへふかうと、われらが事もおもひ出し候て、さかづきに三つよりうへたべ申されまじく候。もし又ふかくしい候人々御さ候はば、遠方ながら母見てる申、かたく申越候故、日々のせい言と存此うへたべ申さぬよし御申、かたくかたくつつしみ申さるべく候。(中略)此文届候より後はさかづきに三つより外うへつつしみ申さるべく候。くれぐれ此義頼入候。

この手紙を読んで皆さんはどうお感じになりますか。遠い歴史の彼方の一母親の手紙に過ぎませんが、私などにとつてはまことに耳が痛い文面です。読んでをりますと、思はず我が母の姿が浮かんできて、自分が懇々と諭されてゐるやうな気分になつてきます。まるで宣長の放蕩生活の様を見てゐるかのやうですが、実は書簡冒頭の伊兵衛なる人物が在京の宣長の様子を見聞し、母親お勝に注進してゐたのです。そこで以上の書簡となつたわけです。医学の修行のために遊学してゐるにもかかはらず、羽目を外して酒に溺れてゐる我が子を思ふと気が気ではなかつたことでせう。さうした親のまめやかな心情があふれてゐます。

そんなに大酒しては「何れ身のがひ(害)」となる故、「さかづき(盃)」に三つよりうへたべ

申されまじく」と語りかけながら、ただちに断酒せよとは言はないところに、却つて母としての知恵と情愛が感じられます。しかしながら一方では「遠方ながら母見てゐ申」しますといふ堅い訓戒ぶりには、さすがの宣長も参つたでありませう。

さて無頼生活に耽つてゐた宣長とそれをたしなめる母親お勝の書簡を読んでもますと、唐突ながら高校退学の処分を受け、少年院で矯正を受けてゐた生徒とその母親の思ひ出が甦つて参ります。

その生徒は高校一年次から問題行動が目立ち、ついにはあるまじき事件を惹起して進級することなく退学処分になると同時に少年院に送致されたのでした。実は私はその彼が通つてゐた学校の教師ではなかつたのですが、或る縁で母親が私を訪ねて来られたのです。親御さんから事の顛末を伺ひましたが、だからと云つて一介の教師にどうすることも出来はしない。一年間は少年院での矯正指導を受ける由で、とにかくそこに任せるしか方法はないのです。しかも私は自分で自分の学校で中学時代に鑑別所体験を持つ生徒などを相手に悪戦苦闘の生徒指導に身体を張つてゐた日々だつたのです。それに殆どの教師が日教組傘下の組合員で、国旗・国歌問題をはじめとする学校の正常化にまさに徒手空拳で挑んでゐた頃でもありました。ですからかういふややこしい問題を持ち込んでこられても此方は正直困惑するばかりでした。

さういふ私が非力をも顧みず、この少年の改善指導に乗り出した理由はたつた一つです。それはこの母親が文字通り生命懸けて我が子の救出を訴へたからにはかなりません。救出と言つても、もちろん少年院からの救出ではありません。家庭内暴力を振ふ一方、外では反社会的行動を繰り返した挙句、決定的事件を惹き起こして奈落の底に落ちてしまった我が子を、もう一度健全な高校生活に戻してやりたいといふ意味での救出でした。まだ結婚したばかりの三十そこそこの若輩教師の自宅で平伏され、全身を小刻みに震はせながら私を見据ゑられた切ないまでの母親の情愛に私は突き動かされたのです。

かくて、少年院に彼を訪ねて決意を促し、高校再受験に向けての挑戦が始まりました。少年院への訪問指導と同時に、手紙の遣り取りで指導を進めていく。送られてくる手紙の文面が次第に具体的で詳細な記述に変貌していく様子を見ながら、言葉をこれほど正確に遣へるやうになつたのなら、もう大丈夫だと判断したのが半年を経過した十一月半ばでした。母親とも相談し、駄目でもともと、私が見立てた某県立高校を受験させることに決断したので。本人は、受験のチャンスを与へていただいただけで有難いです、とまで言ふのです。私にはこの言葉だけで充分でした。彼は教師生活で唯一の学校外で出会つた我が「教へ子」となつたと思つたものです。かうして三月の受験日を迎へたのです。少年院の配慮で在院受験を許可していただき、これまでの成果をいよいよ試す時を迎へたのですが、結果、最も厳しい条件

である過年度二年にもかかはらず最上位で合格したのです。ですから入学直後に学級委員長に任命され、部活動にも入部し二年次には副主将として九州大会にも出場、準優勝までしたのです。

この一人の少年の思春期の暴走を、どん底から甦らせたのは、もちろん私如きの力ではない。紛れもなく「母の存在」なのです。母親の悲しく切ない、しかし覚悟を定めた底力が私を含めた周囲を動かし、当の子供自身の内面をぐらぐらと揺り動かし復原力に生命を吹き込んだのではないかと思ふのです。

遊学中の宣長に情理を尽くした書簡を書き送った母お勝の文面を読んでをりますと、以上の教場における思ひ出が甦つて参ります。青年の生活といふものは、常に順風満帆といふわけではありません。無軌道な生活に傾くこともあるし、酒に溺れて志を忘れることもある。さういふとき、この二人の前には母が立ちふさがつたのです。青年宣長とこの少年を並べて語ること自体、荒唐無稽かも知れませんが、私には本当の自分と対面する秘訣を明かしてくれてゐるやうに思はれてなりません。

二、こころの疵——恋愛の行方——

さて、宣長は以上の危なつかしかつた遊学体験をどうやらかうやら終へて帰郷してきます。その後医者としての生業に携はりながら、京都時代とは打つて変はつて、まるで判で押したやうなタイムスケジュールのもと古典の研究に精励して『古事記伝』をはじめとする畢生の大業を完成した上で、享和元年に七十二歳で没します。京都遊学以降は生臭い浮世のことなど断ち切つて学問一筋に全うして波乱は何もなかつたかのやうですが、実は内部に秘めた狂ほしいほどの愛欲に揺らめき燃えたやうなのです。

宣長は帰郷して三年後の寶曆十年に結婚しました。当時の結婚に関する記録を日記から抜き出して見ると、極めてあつさりとした次のやうに書きとどめてゐます。

寶曆十年四月 八日「納弊村田氏」

同 年九月十四日「晴天、卯の刻美加家に入る」

「納弊」とは結納のことです。宣長は四月八日に村田氏の娘美加と婚約をする。そして半年近くを経て結婚式を挙げ、新妻を迎へたのです。ところが宣長は、それから三ヶ月ばかりで突然、美加さんを離縁してゐるのです。宣長は生活の万般に亘つて克明な記録をつけてゐる

のですが、この離縁の理由だけは何も残してをらず、皆目分かりません。まことに従順な女性で格別不始末があつたわけでもないやうなのです。

寶曆十年十二月十八日「美加里に歸る。離縁す」

同 年十二月二十四日「夜、美加の荷物を返す」

当時は妻が離縁されて里に歸されるといふのは、恥づかしく人目を憚るものです。ですからわざわざ夜を待つて嫁入り荷物を送り出してゐるのです。あまりに短い破局でした。宣長は、美加さんを突然離縁してどうしたか。実は翌年早くも再婚を固め、次の年明け早々再婚してゐるのです。これについても日記に記録がありますので、見てみませう。

寶曆十一年十一月 四日「去る七月より津の岡藤左衛門の媒をもつて草深玄弘の娘を聘す。昨日、藤左衛門、本町まで入来、返事あり。今日藤左衛門入来、母人対面。いよいよ許嫁すべきのむねなり」

寶曆十二年 一月十七日「晴天、風なし。夜更けて風あり。婚禮なり。午の剋、新婦到着……」この記述を見ると、すでに七月の時点で宣長は具体的な女性を再婚相手として意識してゐたことが判明します。そして暫くの間を置いて再婚の目途が立つ。「いよいよ許嫁すべきのむねなり」といふ何気ない表現に宣長の期待感がほのかに感じられます。

かくて慶事の段取りは滞りなく進行し、新年を迎へて興入れとなるわけです。この当日の

日記はご覧の通り事実の記録を淡々と書きつけてゐるに過ぎないのですが、それでも一年余り前の初婚の記録とは、まるで受ける印象が異なります。夜に入り、あたりに吹きつけてくる風の動きを鋭敏に感じ取りながら、新婦を迎へようとする男の弾むやうな歡びが滲み出てゐる一文です。いつたいこの際立つた差はどうして生じたのか。

以上の疑惑に關して國語學者の大野晋氏が詳細な調査をされてゐますので、それを参考に略述してみませう。

宣長が京都遊學時代に机を並べて学び合つた仲間に深草玄周といふ友人がをります。この友人と遊學時代に二度ほど父の法要のため一時帰省したことがあるのです。玄周の実家は津にありましたので、松阪に戻る宣長を歸途、一泊だけ泊めるのです。その後、松阪での父の法要を済ませて再び京都に上るときも宣長は玄周宅に宿泊してゐます。この玄周には民さんといふ妹がをりました。当時十六歳の妹は、宿泊する兄の親友の世話に当たつた筈です。このとき、宣長はどうもこの親友の妹が眼に焼きついて忘れられなくなつたやうなのです。遊學後、母や親類縁者の勧めもあり、帰參後三年目にして妻帯するけれども、彼の心中に息づく民さんの面影は色褪せはしなかつたものと思はれます。

一方民さんの方は、その後すでに結婚してゐました。相手は藤枝九十郎といふのですが、実は宣長が最初の婚約をした寶曆十年四月八日の、その直後四月二十六日に病死してゐるの

です。この事実を宣長は自らの結婚に向けての一連の儀が進行する中で知つたのだらうと思はれます。そして宣長の胸の中にひとりの可憐な親友の妹の面影が抑へがたく立ち現れてくる。これらのことはもちろん推測の域を出ませんが、恐らくさういふことが充分考へられるのです。宣長の突然の離縁は、この事実とけつして無関係ではない筈です。何故なら美加さんを離縁した後、ただちに人を介してこの未亡人となつた妹に求婚の打診を図り、ついには結婚に至るといふ紛れもない事実があるからです。

男といふものは、すでに自分の妻となつた女性を犠牲にしてまでも、我が恋の野望を遂げようとするところがあるのだといふことです。さういふ点を踏まへて次の宣長にまつわる大野晋氏の文章をお読みいただきたい。

「宣長は、恋を失うことがいかに悲しく、行方も知れずわびしいかを知つたでしょう。また人妻となつた女を思い切れず、はらい除け切れない男のさまを、みずから見たでしよう。その上、夢にまで描いた女に現実には接するよろこびが、いかに男の生存の根源にかかわる事実であるかを宣長は理解したに違いない。また、恋のためには、相手以外の女の生涯は壊し捨てても、なお男は機会に恵まれれば自分の恋を遂げようとするものだといふことを自分自身によつて宣長は知つたに相違ありません。

この経験が宣長に『源氏物語』を読み取る目を与えた。『源氏物語』は淫乱の書でもない。不

倫を教え、あるいはそれを訓戒する書でもない。むしろ人生の最大の出来事である恋の実相をあまねく書き分け、その悲しみ、苦しみ、あわれさを描いたのが『源氏物語』である。恋とは文字の上だけのそらごとでなく、実際の人間の生存そのものを左右する大事であり、それが『源氏物語』に詳しく書いてある。そう読むべきだと宣長は主張したかったに相違ないと、私は思ったのです。」

〔大野晋著「語学と文学の間——本居宣長の場合——」〕

「学問とは大きな事実の集積に耐えて、一人の人間がその重圧の中で膨大な事実を貫徹する一つの筋道を見出して行く作業です。それは、細かい事実を洩らさない心づかいと、多くの雑然たる事実を蔽われている論理を見抜く透明な精神の活動とによって成り立つものですが、その事実を集めたり、あるいは推理を働かせたりする作業は、ただ風が吹いてきて木の葉がたまつたというように出来るものではないのです。やっぱり一人の人間がいて、その人間が努力を続けて成すことです。それは人を好きになつたり、嫌いになつた、あるいはお金がなくて困つたり、あるいは国を救いたいと願つたりする一個の人間のすることです。学問とは、そういう人間が、青年期に自分に課したものを運びきろうとして努力を重ねて成し遂げることであり、あるいはまた、青年期に自分の中に傷として受けたことを癒そうとし、あるいは傷を浄化しようとして、さまざまな形を与えて世の中に現して行く制作物であるのです。学問とはただ風が吹いてきてほこりが立ちのほつたとか、木の葉の吹きだまりができたというのではなく、また、やみくもに努力したらできまじかといふものでもない。努力ももちろん入り用なのです

けれども、努力の形づけの基礎になる傷やら基本的な願いやらがある。その傷が何であつたか、願いが何であつたかを理解しないと学問が人間と結びついてこないでしょう。」 (前掲書)

いづれにせよ、あくまで推測に過ぎませんが、大野氏が指摘されてゐるやうに学問とは人生に深く根を張つてゆくものです。「人を好きになつたり、嫌いになつたり、あるいはお金がなくて困つたり、あるいは国を救いたいと願つたりする一個の人間のすることです。学問とは、そういう人間が、青年期に自分に課したものを運びきろうとして努力を重ねて成し遂げること」といふ一文に心を留めていただきたいと思ふのです。いはば青年期に遭遇した願望やら痛手の中から自ずと自分流の「課題」が立ち現れてくるといふのが、本当の姿なのではないでせうか。課題のない人生といふものはない筈なのです。宣長にとつてそれは恋の成就のためなら、人ひとりの人生を残酷に葬つてしまふ恐るべき所業となりました。この所業は同時に、宣長自身にも取り返しのつかない疵を負はせたであります。その癒しやうのない疵を眼を反らさずに見据ゑることが、彼のその後の学問を決定づけたと言つていいのかも知れないのです。

先ほどの高校生にしても同様なのです。表面に現れやうと胸の中に秘められやうと、青年期の強烈な体験は、いづれたしかな課題と使命を、当事者の内面にカタチづくるものです。この課題と使命は学問の世界と無縁ではない、さういふことを私たちはあらためて知つてお

くべきだと思ふのです。以上の若き日の宣長の体験を想ひ描いてをりますと、学問とは本来、奥行きが深い、体験の光と影を交錯させた趣のある人生のカタチのやうにも思はれてくるのです。狭い知的空間として学問を捉へてしまつては、それこそ大野氏が語るやうに「学問と人間が結びついてこない」のではないでせうか。そのことは私たちが歴史に学ぶ際にも心がけておくべきだと思ふのです。

吉田松陰の場合

一、挫折のとき——「方寸錯乱」——

宣長とは時代も環境も異なるけれども、維新前夜の幕末を生きた吉田松陰の若き日の体験と行動に触れながら、これ又若き日の生き方について考へてみたいと思ひます。もちろん宣長とは違つても、安政の大獄の受難に遭ひ三十歳で刑死した松陰も、やはり若き日の苦悩から逃避せず難局に対峙し、見事なほど敢闘してゐます。明治を興す幾多の俊秀を輩出した松陰にも、挫折はあつたし痛手もあつたのです。

現在の山口県萩市に生まれた松陰は、グローバルな視野で見れば列強の西力東漸の時代に成長します。杉家の次男として生まれたのですが、後継ぎのなかつた山鹿流の兵学者である

叔父吉田大助のもとへ養子として入り家督を継ぎます。そして叔父の死後、幼少よりもう一人の叔父玉木文乃進によつて恐ろしく厳しい薫陶と指導を受けながら国防の任に当たる兵学者としての修行に励んでいくのです。その松陰が東アジアの苛酷な国際環境を初めて認識するのは、二十一歳の時の初の九州遊学によつてでした。このとき松陰は兵学稽古を理由に平戸、長崎、熊本など各地を歴訪し、様々な師友を得て勇躍帰参して参ります。この遊学体験は松陰の芯を形成した重要な出来事ですが、ここでは時間の都合上割愛させていただきます。いづれにせよこの体験を通じて彼は日本を取り巻く東アジアの国際緊張の実態に気づきますし、また兵学にとどまらず学問の豊かな世界にも触れるのです。

ですから萩に帰参後も、そのときの衝撃と感奮は冷めることなく益々高まつていきます。そして藩主の江戸出府に随行するチャンスに恵まれて、嘉永四年三月再び遊学の途に上ることになります。江戸滞在中の松陰は堰を切つたやうに猛烈果敢な勉学に夢中になります。現在残されてゐる日記や書簡によれば、江戸学者についての兵学の聴講や輪講をはじめ大学や論語の勉強会、同志とともに行ふ兵書会読、さらに藩主への兵学進講の務めなど驚嘆するほどの熱の入れやうでした。まさに「何分会を減じ候はではさばけ申さず候」(兄杉梅太郎宛書簡)といふほどに肩に力が入つた勉学ぶりでした。ところがかうした過剰なまでの知的衝動と勉学の途次、松陰は悲痛極まりない書簡を兄に宛てて書き送るのです。

武士の一身成立覺束なき譯左の通り。

一、是れ迄學問迎も何一つ出來候事之れなく、僅かに字を識り候迄に御座候。夫れ故方寸錯亂如何ぞや。

先ず歴史は一つも知り申さず、此を以て大家の説を聞き候處、本史を讀まざれば成らず、通鑑や綱目位にては垢ぬけ申さざる由、二十一史亦浩漣なるかな。頃日とほとぼ史記より始め申し候。(中略) 矩方も兵學をば大概に致し置き、全力を經學に注ぎ候はば一手段之れあるべく候へども、兵學は誠に大事業にて經學の比に非ず。且つ代々相傳の業を復興する事を圖らずして顧つて他に求むる段、何とも口惜しき次第申さん方もなし。方寸錯亂如何ぞや。

體中の骨何本之れあるかは存せず候へども、十本許りも折れ候はば、跡はいかをくひ候猫の様に成り申すべくや。是れも一つの懸念。(中略)

僕學ふ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動搖を定めんと欲す。萬祈萬祈。

「方寸」とは自己の心中のことです。勇躍江戸に来て知的欲求の赴くまま手当次第に勉學に夢中になつてきた筈なのに、励めば励むほど學ばねばならない内容が次から次へとあふれてくる。とてもこれ以上できない。しかも家學である兵學すら満足の行く段階に至らないままになつてゐる。「方寸錯亂如何ぞや」といふ言葉を繰り返す文面に松陰の激しい口惜しさと嘆きが伝はつてきます。まさに千々に乱れ動く心の悲痛な叫びであります。

さらにさういふ無残な徒勞を繰り返してゐる自分の姿を、烏賊を喰つてますますぐにやぐにやになつてしまつた猫に譬へて自虐的に見るまでになるのです。この若き松陰を見舞つた危機をどのようにして切り抜けていくのでせうか。

二、決断——「丈夫の一諾忽せにすべからざればなり」——

松陰が江戸滞在中に九州遊学の際、昵懇の間柄となつた肥後の宮部鼎藏が上京して参りまゐす。そしてこれ又江戸にて知己となつた江幡五郎と三人で露艦出沒する東北への遊歴を思ひ立つのです。江戸出立は赤穂義士討ち入りの日である十二月十五日と決めました。何故この日に決めたかと言ふと、同行する一人江幡五郎の目的は南部藩の内紛で非業の死を遂げた兄の敵討ちのためで、そこで途中までの同行を求めてゐたのです。ですから松陰は五郎が首尾よく敵を討てるやう祈念してこの日を出立と定めたのです。

すでに藩から許可は降りてゐたのですが、関所を通る際の証明書交付が遅れ、約束の日までは間に合はなくなるのです。交付を待つか、それとも約束を守るか、松陰は煩悶します。約束を守るとすれば、証明書を得不いままに出立することになるわけですから脱藩の重罪を負ふことになります。にもかかはらず松陰は脱藩を選択してまで友との約定を守るのです。

現代の価値観から見れば思慮分別に欠けた無謀を誇られることでせうが、さういふ世知から一旦離れて、松陰の胸の内に耳を傾けて欲しいのです。

一封書を留めて宮部鼎藏・安藝五藏に與へ、其の由を言ふ。初め本月十五日は赤穂の義士事を遂げし日なるを以て、余二子と東行發勒を約するに、是の日を以てす。前數日、過書の事起る。(中略)而して余は則ち自ら誓ひし所を行ふ。國家に負くを顧みざるには非ず、誠に丈夫の一諾忽せにすべからざればなり。夫れ大丈夫國を出でては、一言にて以て國を榮すべく、又以て國を辱むべし。國家榮辱の係る所、豈に區々たる一身の故ならんや。

松陰にとつて脱藩は「國家に負くを顧みざるに非ず」といふことだつたのです。ここで言ふ「國家」とは長州藩のことですが、藩の規範や体面などよりも人間としての個人の約束の方が大事だから、そちらを選択したといふのではない。友と結んだ男子の一諾(約定)を反故にすることの方が、むしろ己のが藩を辱めることになる。松陰はさう考へ、肚を決めたのです。

当世風の価値観から見れば強引な論理に映るかも知れません。しかし松陰にとつては「國家の榮辱」と「丈夫の一諾」は、どちらか一方を選択しなければならぬ対象とはならなかつたわけです。あくまでも、今ここで、この一諾に我が身を賭けることが國を思ふことであり、さらには「方寸錯亂」から自らを救ひ出すべく千載一遇のチャンスともなり得たのです。

かくて松陰は迷妄から目覚めて、本来の面目躍如たる気迫をとり戻してゆくのです。

○
かうして見てくると、松陰にしても宣長にしても、それぞれが遭遇した若き日の難局や痛手、また願ひや理想は、その後にかたち作られてゆく人生と学問の底流にたしかに息づいてゐることに気づかされます。結局のところ生きる力の源泉がその人のどこにあつたのかを熟知することが歴史に学ぶ意味でもあり、また肖りたいと欲する対象を見出すこともできるのではないか。そして肖りたいと思へる対象にめぐり逢へたとき、苦難をも試練と見て敢闘する勇気が沸々と湧き上がってくるに違ひありません。さう信じて私たちも私たちの人生、すなはち「今を生きる」ことにあらためて肚を据ゑ直して奮闘したいものです。

明治維新と現代日本

評論家・筑波大学名誉教授

村松

剛



キキョウ

昭和天皇と「五箇條の御誓文」

ヘグザン砲に震へ上がった日本人

ペリー来航の背景―マニフェスト・デイスティニー（神から与へられた明日なる天意）―
バルマーの建白書（惆喝外交）

歴史的権威としての天皇

「五箇條の御誓文」の成立事情

「新日本建設に関する詔書」と現行憲法

質疑応答

昭和天皇と「五箇條の御誓文」

明治維新は西暦でいふと一八六八年ですから、今年は丁度百二十五年目に当ります。明治維新といふ日本歴史上の画期的な出来事ほど、事ある毎に日本人によつて思ひ出され、かつこれ程しばしば芝居や映画にいろいろな角度から取り上げられた時代も少ないと思ひます。徳川の十五代將軍・慶喜が大政奉還をしたのが慶応三年十月、そして翌年の明治元年三月十四日に「五箇條の御誓文」が出てゐます。実はこの御誓文は明治維新の終局点でもあると同時に、明治の憲法成立に至るまでの出発点でもありました。この「五箇條の御誓文」を敗戦後の日本の出発点として掲げられたのが、五年前に崩御された昭和天皇です。

日本の敗戦は昭和二十年（一九四五年）ですが、その翌年の一月一日に昭和天皇は詔書を出されます。これがマスコミで「天皇の人間宣言」として扱はれてゐるものです。日本の新聞はこの詔書が発表された時から天皇は人間であることを宣言された、と書き立てました。當時は占領下ですから多分アメリカ軍の指令によるものでせう。それらしい「天皇の人間宣言」といふ言葉は通り文句になつてしまつて、あたかもさういふ詔書が出たかのやうに皆錯覚したのです。ところがそんなものは出てゐないのです。諸君のお手許にお配りした「新日本建

設に關する詔書」の写しを御覽下さい。この中に「茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初國是トシテ五箇條ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。……叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ國運ヲ開カント欲ス。須ラク此ノ御趣旨ニ則リ、舊來ノ陋習ヲ去リ、民意ヲ暢達シ、民間舉ゲテ平和主義ニ徹シ」といふ言葉がありますが、これが先づ前提になつてゐるのです。詔書だから当り前ですが、昭和天皇御自身の意思によつて、日本にもかういふ立派なものがあつたといふ事實を國民に示すためにお載せになつたのです。ところが日本政府は占領軍に遠慮して、これを削つて頂きたいと申し出たさうです。これにたいして昭和天皇は、日本の出発点はこの「五箇條の御誓文」にある、これは大事だから削つてはならぬと言はれてゐるのです。このことは藤田侍從長の回想録に出てゐます。

詔書の続きを読んでみませう。「夫レ家ヲ愛スル心ト國ヲ愛スル心トハ我國ニ於テ特ニ熱烈ナルヲ見ル、今ヤ實ニ此ノ心ヲ擴充シ、人類愛ノ完成ニ向ヒ、獻身的努力ヲ效スベキノ秋ナリ」愛国心は日本人には根つからのものだ、この愛国心を基にして國際的連帶を築いて行かうではないかと仰つてゐる。次いで「惟フニ長キニ互レル戦争ノ敗北ニ終リタル結果、我國民ハ動モスレバ焦躁ニ流レ、失意ノ淵ニ沈淪セントスルノ傾キアリ……然レドモ朕ハ爾等國民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚ヲ分タント欲ス」との御言葉が続く。「休戚」の「休」は喜び、「戚」は悲しみの意味です。つまり喜びも悲しみも國民と分かち合はうと言はれてゐる



るのです。そしてさらに「朕ト爾等國民トノ間ノ紐帯ハ終始相互ノ信賴ト敬愛トニ依リテ結バレ、單ナル神話ト傳説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニ非ズ」と述べられてゐる。「紐帯」とは繋ぎ止める帯、紐のことです。

以上の部分が俗に「人間宣言」と言はれてゐる文章の全てです。西洋人はここで言ふ「神」をゴツドと訳しまして、天皇は神格化されてしまった。つまり天皇はゴツドである、さういふ誤解、錯覚が生じたのです。日本人は天皇が人間であるといふことは初めから分かつた上で物を考へてきてゐますから、人間宣言などをする必要はないわけですし、「單なる神話ト傳説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ」と言はれるのも当然の御指摘です。又日本人を「神州の民」

と呼んだりしますが、神州といふのは「仏地神国」と言ひまして、昔から仏様の土地、神々の国といふのが「神州」といふ言葉の本来の意味です。それが戦争中に多少誇張されまして、日本人は神州の民である、従つて不滅であるといふ宣伝文句に使はれたのです。しかしそれは宣伝であつて、日本人だけが他の民族に優越してゐて世界を支配するなどといふことはあり得ないと言つてをられる。これが「人間宣言」と言はれてゐるものの中身であつて、天皇が私は人間だと改めて仰つた文章はどこにもありません。どこにもないのに当時から「天皇の人間宣言」として宣伝され、今でもこの詔書を読んだことのない人達が錯覚して、この詔書によつて天皇の性格が變はつたといふ風に言ひたがるのです。しかし實際はさうではない。

この詔書の結び近くに「能ク我至高ノ傳統ニ恥チザル眞價ヲ發揮スルニ至ラン。斬ノ如キハ實ニ我國民ガ人類ノ福祉ト向上トノ爲、絶大ナル貢獻ヲ爲ス所以ナルヲ疑ハサルナリ」と書かれてゐます。日本の伝統は世界でも一級のものであり、これに相應しい価値を日本人自身が發揮してゆくことこそが人類の福祉、つまり国際社会に奉仕する道に繋がる、だから自信を持ちなさいと言はれてゐます。しかもこの自信の根源は、わが国の近代化の出発点に当たつて明治天皇が示された「五箇條の御誓文」にあるといふことなのです。

そこで明治維新の精神に学ぶことの大切さを明らかにされたのが、昭和天皇が出された「新日本建設の詔書」の眼目なのです。せつかく明治維新の出発点に戻り、すぐれた伝統に恥ぢ

ない国家をお互ひにつくつてゆかうではないかと言つてをられるのに、この詔書の内容が忘れられてしまつて、人間宣言といふどこにも書いてゐない言葉だけが一人歩きしてきた。その点を私は誠に残念に思ふのです。この機会に諸君には是非この詔書の持つてゐる意味を思ひ出して頂きたいと思ひます。

ペグザン砲に震へ上がった日本人

明治維新が何から始まつたかといふと、申し上げるまでもなくそれはペリーが浦賀に来たからです。ペリーの黒船は嘉永六年（一八五三年）の夏に浦賀にやつてきました。蒸気船は旗艦がサスケハンナ、もう一つがミシシツピ、後は帆船です。実はそれまでにもアメリカの軍艦は来てゐるのですが、その時までには全く怖がらなかつた日本人がペリーが来た時だけ震へ上がったのです。その理由は実に簡単なことなのです。その頃まで海軍の軍艦が持つてゐた大砲の弾は鉄の玉でした。陸軍は目的物にぶつかるとそこで爆発する砲弾を十八世紀末から使ふやうになつてゐましたが、海軍は長い間火薬が入つてゐない鉄の玉を使つてゐたのです。鉄の玉ですから、飛んで来ても穴があくだけなのです。ナポレオン戦争時代のイギリスにネルソンといふ有名な提督がゐます。トラファルガーの戦ひで戦死しますが、彼が戦死したの

は砲弾に当たつたのではなく鉄砲に撃たれたからです。トラファルガーの戦ひでお互ひに撃ち合つて沈んだ船は一隻もありません。だつて当時の船は木造でせう。木造の船に幾ら穴があいたつて、船自体は沈みません。二百発当つたけれども沈まなかつたといふ例があります。それに当時の砲弾といふのは飛ぶ速力が遅いから、飛んで来るのが見える。来たなと思つたらよければいいわけで、だから外国の軍艦が来ても日本人はそれ程怖がらなかつたのです。ところが一八二五年にペグザンといふフランスの将校がどんぐり型の砲弾を開発致しました。これをペグザン砲と言ひ、砲弾の中には火薬を詰める。この砲弾をアメリカで最初に活用したのがペリーです。

さらに彼は蒸気船も採用してゐます。帆船は十九世紀の半ば過ぎには海の女王と言はれるやうに、向ひ風でも風に向つて航行できるまでに技術的に発達してゐたのですが、そこに蒸気船が出現した。当時の蒸気船は外輪船ですから、船の両側に輪みたいなのが付いてゐて、その水掻きで水を掻いて進むのです。初めてこの蒸気船を見た日本の漁師が「何だか知らないけれど船が蓑傘振り回しながら走つてゐた」といふ記録を残してゐます。ところが船体の真ん中に車輪が付いてゐますから、軍艦として利用する場合は困るのです。何故なら大砲は重心となる船の真ん中に乗せるのですが、そこに車輪が付いてゐるから乗せられないのです。しかも絶えず燃料を補給しなければならぬ。ですからアメリカ海軍は大反対したのです。

そこで国会議員をわざわざ蒸気船に乗せて、いかに蒸気船が素晴らしいものを説得して買はせたのがペリーです。その彼が、自分が買はせた蒸気船を使つて、これまた自分がはじめて採用したペグザン砲を備へつけて、日本に来たのです。

日本人は蒸気船の知識は持つてゐませんでした。ペグザン砲のことは知つてゐました。アヘン戦争の時にイギリスに攻め込まれた清帝国の將軍は、林則徐といふなかなか立派な人物でした。彼は手当たり次第に英語の軍事に関する本を漢文訳してゐます。ところが肝心の清国の人間が読まないのです。中華思想が強いから中国以外は全部野蛮国だと思つてゐる。したがつて外国の本が漢訳されても、誰も読まなかつた。一所懸命に読んだのは、日本人でした。

たとへば吉田松陰は平戸へ旅行しますが、その途中で林則徐が漢訳したペグザン砲に関する本を読んだことが『西遊日記』に出てきます。海軍はこれからは蒸気式でなければいけない、大砲はペグザン砲でなければならぬと、ペリーが来る四年前に吉田松陰はその旅行記の中で書いてゐる程です。松陰が知つてゐた位ですから、勿論幕府も知つてゐたのです。

そればかりではない。軍艦サスケハンナに幕府の役人が乗り込んで来た際、ペリーが世界地図を見せたら、日本の役人は、アメリカを見てニュー・ヨークとワシントンと指差したさうです。英語は読めなくてもニュー・ヨークとワシントンがどういふ意味を持つてゐ

るか知つてゐたのです。さらに大砲を見せたら英語風にペキサンスと言つたものだから、ペリーの方がびつくりしてゐます。幕府はペリーが積んで来た大砲がどんな性質のものかを知つてゐたのです。つまりペグザン砲の砲弾が飛んで来たら江戸は火の海になつてしまふ。當時射程距離が三千メートルくらゐですから、軍艦を岸に寄せたら江戸城まで届きます。江戸といふ町は陸にたいしては箱根や碓氷峠等で嚴重に防御を固めてをりましたが、海に対してはまことに弱い。だからペグザン砲を積んだ艦隊が来たといふことで、それまで外国を大して怖れてゐなかつた日本人は幕閣も含めて震へ上がったのです。

ペリー来航の背景

— マニフェスト・ディステイニイ（神から与へられた明白なる天意） —

ところでさういふペグザン砲を備へた蒸気船をペリーが率ゐて何故日本に来たのかといふことですが、実はその背後に、E・H・パルマーといふニュー・ヨークの財界人であり最高裁の顧問、後に国務省の顧問、更に海軍省の囑託を務めた人物がゐたのです。このパルマーの建築通りにペリーは動いてゐます。ペリー来航の背後に、パルマーといふ存在がゐた事実を日本の歴史家で書いてゐる人は殆どゐません。私が知つてゐる範囲では、戦前に大川周明

の『日本二千六百年史』の中にペリー来航の背景にはパルマーがゐた、といふことを約一ページ書いてゐる程度です。文部省編纂の『維新史』には、パルマーの名前だけが載つてゐるに過ぎません。

ではパルマーはどのやうな建策をしたのか。私はアメリカの国会図書館でこのパルマーの建白書を捜し出して調べました。それが諸君にお渡しした英文の資料です。これは多分日本の歴史書にはどこにも引用されてゐない筈で、諸君もはじめて見ると思ひます。パルマーは、ペリーが日本を開国させたその影武者として、非常に重要な役割を果たしたといふので、大分経つてアメリカ国会から表彰されます。その表彰される時にアメリカ國務省がパルマーの功績を称へて報告書を作る。その報告書の一部を資料に載せてゐます。

ところでパルマーは、一八四六年から五一年までの間に四回に亘つて大統領、国会及び國務長官に建白書を出してゐます。特に一八四八年の建白書に最も顯著に彼の言ひたいことが出てゐます。それは諸君にお渡しした資料にはありませんので、ここで一寸紹介しておきます。彼はかういふ内容を建策してゐます。「アメリカは東部から西部へと、インディアンを追放しながら西海岸へと移動してきた。つまりは白人の文明を新大陸に強制する、キリスト教を拡大してゆく。これが神から与へられた明白なる天意（マニフェスト・ディステイニー）である。我々はもうぢき西海岸に到着する。西海岸に到着したら今度は太平洋である。太平洋

を渡つてアジアと直接貿易をやらう。どこと貿易するか。シベリア、満州、カラフト、千島、シナ大陸。更にシナ大陸から開拓の為の労働者をつれて来い。」この頃からアメリカにとつて満州は大きな関心事だつたことも分かります。当時のアメリカの人口は二千万程度ですから人口不足だつたのです。さらに「東アフリカ、エチオピア、アラビア、ペルシア、ビルマ、インド。かういふところをアメリカのマーケットとして開拓してゆくことがマニフェスト・デイスティニー（明白なる天意）の延長として必要なのだ。その為にやらなければならぬ」とは何か。第一は運河を作ること」と言つてゐます。運河を作ると言つてもこの時はパナマではない。パナマより一寸北のニカラグアに作るやう言つてゐます。そして「もう一つは日本に港を作らせること」を建策してゐるのです。

何故かと言ふと、一八四八年の時点では、アメリカは未だ西海岸には到着してゐませんし、鉄道も出来てゐない。だから運河を作つて太平洋へ回るべきだと言ふのです。極東ではイギリス・フランス・オランダが利益を貪つてゐて、アメリカだけが乗遅れてゐる。アメリカは太平洋を渡れば極東に一番近いのだけれども、極東に渡らうとすると、先づハワイに寄港して水と燃料と食料を積み込んで、それから先は日本が鎖国をしてゐるので寄港出来る港がない。従つて極東に出ようとすると、まだスエズ運河がありませんから大西洋を渡つてアメリカ大陸を迂回して、インド洋からマラッカ海峡を抜けて極東まで行かなければならない。

文字通り地球を一周することになる。ところがアメリカには植民地がありませんから、これまた寄港する港をもたない。全部イギリスの港なのです。結局イギリスの世話になつてしまふ。当時はアメリカとイギリスとの仲は独立戦争いらい険悪だつた。そのイギリスの世話にならないで済ますためにはハワイを手に入れて、さらに日本に港を作るしかない。これが先づ大前提なのです。

パルマーの建白書（桐鳴外交）

その大前提に立つてパルマーが國務長官のクレイトンに一八四九年に出した建白書を見てもみませう。この建白書は五箇條ありますが、最初の第一條を概略御紹介します。

シナ海にアメリカの全艦隊を浮かべて、真直ぐに江戸湾に向はせる。そして首府江戸にまで行かせ、將軍との面会を求める。若しくは幕府のしかるべき部門の長に面会を求める。それ以外の従属的な日本の官僚とは、公的なあるいは個人的な關係を持たないやうにする。そして幕府にたいして無条件に次のやうな最後通牒を突き付ける。第一、難破したアメリカの水夫を牢屋にぶち込んで野蛮な扱ひをした事にたいする全面的な補償、賠償金を求める。賠償金を求めるために艦隊を送り維持した費用を日本政府に払はせる。その総額は担

当者の訓令によつて決められる。そして、日本政府が将来アメリカにとつて都合の良い行動を期待し得るやうな誓約、保証若しくは担保を取る。日本の領域内でアメリカの市民を拘留したり投獄したり、悪く扱つたりする事にたいして、我々の政府に嚴重な罰金を日本に課す。さらに日本で被害を受けた市民の法的代表者若しくは遺族にたいして、一人当たり五千ドルを払はせる。必要に応じては、アメリカ艦隊をその為に派遣するのに必要な諸雑費も払はせる。

これはいつたい何のことを言つてゐるかといふと、当時日本近海は鯨の大漁場でした。鯨を何の為に捕つたかと言ふと、肉は食はずにその油をランプに使ふためです。欧米は盛んに日本近海で鯨漁をしてゐて、ボストン近辺から大変な数が日本近海に漁業に来てゐた。その内の一隻が、パルマーの建白書の発表される少し前、択捉島に流れ着いたのです。択捉島の役人は突然ヒトカブ湾にアメリカ人が漂着したので困つてしまつて、どう扱つたらよいか江戸に伺ひの使者を立てた。漂着したのは夏だったので困つてしまつて、使者が帰つて来た時はもう秋も暮れだつた。北の海は冬は波が荒くて航行できません。だから彼等を択捉島に留めて、そして波が穏やかになる春を待つて長崎まで連れて行き、オランダ人を介してアメリカへ戻したのです。

ところがその連中がシンガポールで、今でもあるストレイト・タイムスの記者に聞かれる

ままだに「自分達は冬の間寒い島の中に閉ぢ込められてゐた。食べさせられる物といへば、お米と魚と酒と称するアルコール。こんな物を飲ませて自分達に何かを白状させようとしたらしい。おまけに小さい箱の中に入れて、言ひ難い拷問を受けた」と悪口雑言を言つたのです。これをストレイト・タイムスがそのまま載せたものですから、ワシントン議事に伝つて大騒ぎになりました。しかし事態はさうではないのです。とにかく冬の海で外へ出られないから小屋に留め置いたわけで、しかもお米の御飯にしても北海道に稲作が渡つたのは明治維新以後ですから、当時は役人しか食べられなかつたのです。その上にお酒まで出したのですから、幕府としてはできるだけの接待をしたのです。また狭い箱の中へ閉ぢ込められて拷問を受けたといふのも、どうも駕籠のことらしい。駕籠といふのは揺れる上に狭いものです。そこに凶体の大きなアメリカ人を乗せたものですから「小さい箱の中へ閉ぢ込められ」拷問を受けたと勘違ひしたのです。幕府としてはハイヤーをチャーターしたつもりだつたのです。かうした誤解から日本人は人道的ではない、アメリカ人を虐待したとなつてしまひ、果ては「一人当たり五千ドル支払へ」、そして「そのための艦隊の費用、賠償金も支払へ」となつたわけです。以上第一条に続いて四箇条の建策が書かれたあとに、さらに追加して次のやうなことが書かれてゐます。

以上のやうな最後通牒が將軍から拒否された場合、担当者は江戸湾を封鎖するやうに事

を許され、又訓令されねばならない。同じやうに松前やその他の海に面した港についても同じである。また、彼（海軍指揮官）が適当と思ふ町についても同じである。日本政府がこのやうな最後通牒に同意しない限り、日本のジャンクを引つさらつて、それから税金若しくは貢ぎ物を略奪する措置を取るべきである。……必要な場合には品川を制圧せよ。これは江戸の郊外にある。ここには膨大な江戸市民の食料が集積されてゐる。

要するに日本は金、銀、ダイヤモンドの宝庫だと思はれてゐたのです。これはマルコ・ポーロのせみではありません。日本は昔から銅の輸出国でした。室町の末期から金、銀が加はります。これを独占的に貿易をやつて儲けてゐたのはオランダでした。オランダの儲けは莫大でした。結局パルマーの目的は、日本に港を開かせてアジア全体のマーケットを獲得することだったので。それと同時に当時日本が持つてゐると信じられてゐた金、銀、銅、ダイヤモンドの宝庫の扉を開けば、イギリスがインド収奪によつて得てゐる以上の富が世界のマーケットに出てくるだらうと考へた。これがパルマーのねらいとしたところでした。

当時のアメリカの大統領はテラーといふ軍人出身でしたが、この建白書が出た一八五〇年に事故で亡くなり、副大統領のフィルモアが大統領になる。ペリーはこのフィルモアの指揮下に日本にやつて来ます。パルマーの建白書が出た一八四九年の二月にカリフォルニアはアメリカの州になつたので、ともかくマニフェスト・ドイステイニイは太平洋側まで到着し

た。今度はハワイ、そして日本に港を開かせることによつて、アジアのマーケットが拡大できる。さうすればヨオロッパにくらべてアメリカが一番極東には近いのだから、ここを抑へるべきだといふわけで、ペリーの派遣となるのです。

ただしさすがに第一条の賠償金を求める建策は、アメリカ側が自分で取り止めにしてゐます。といふのは先程申しました捕鯨船難破の直後、もう一隻事件を起こしてゐるのです。ラゴダ号といふ船の船内で叛乱が起こり、この時も択捉島に漂着する。そこで日本側がこれを管理してゐたら水兵同士が殺し合ひをやつた。はじめアメリカ側は日本人が殺したと思つてゐたのですが、よく調べてみると日本人はそんなに残酷なことをしてゐないことが分つた。それで当初パルマーが建策してゐた賠償金や艦隊派遣の費用などの要求は全部取り下げたのです。ペリーが要求した日本を脅し上げるための十三隻の艦隊も十二隻に削られ、さらにぐづぐづしてゐるうちに結局八隻になつてしまひ、沖繩經由で日本に来ることになつたのです。ペリーはパルマーに言はれた通りに恫喝をやつて和親条約を結び、そして下田と函館を開港させました。ところがこの和親条約の第十一条にはごまかしがあつたのです。十一条の日本語原文は「十八か月経つて何か事故が起こつた場合には、日米両国の一方が希望したら、役人を常駐させることができる」といふもので、一方、英語原文は「十八か月経つたら、領事を一方が希望したら派遣することができる」となつてゐるのです。つまり日米双方の原文

の意味が違ふのです。だから十八か月経つたのでハリスが来るのです。日本側は十八か月の間、何も事故がないのにどうしていきなりハリスが来たのか分らない。かういふ場合、力関係で強い方の言ひ分が通りますから、日本語原文がどうであらうとハリスは下田に来てしまつた。そしてそのハリスが通商条約を要求する。かういふ経緯になつてゐるのです。

通商条約といふことになれば、鎖国の禁を解くことになる。ここに至つて国論が二分したことは、御承知の通りです。鎖国の制度は家康が決めたのではない。家康の頃はまだ通商貿易をやつてゐました。鎖国をはじめたのは三代將軍の家光からです。神君家康が決めたことならば、將軍といへども変へにくいのですが、さうではないわけです。さうから変へることは可能だつたのです。ところが時の十三代將軍家定はまつたく將軍としての能力に欠けてゐた。ですから家定の命令といつても誰も信用しない。しかも軍事を預つてゐる幕府が、外国の軍事的圧力に屈して条約を結んだとなれば、幕府の威信は地に墮ちる。そこで気がついたのが、京都の朝廷の存在なのです。

歴史的權威としての天皇

当時の朝廷は衰微の極みでした。しかし論理的にいふと、戦国時代まで外交権は朝廷が持

つてゐました。蒙古襲来の際、實際の対応は鎌倉幕府がやつてゐますが、しかし外交権は朝廷にあるわけで、一々朝廷に報告してゐるのです。その先例から幕府はこの際、朝廷といふ超歴史的な權威の袖に縫ふことによつて、国論を統一させて開国に持つてゆかうとした。つまり朝廷を利用して幕府の温存を図つた。これが公武合体論です。

ところが孝明天皇は、こんな大事なことを自分一人で決めて、もし日本が大変な事態に陥つたら、祖先の靈に対して申し訳ないと思はれる。日本の天皇は祭祀王ですから、国民の運命のために絶えずお祈りされるのが、日本の帝王学です。そこで孝明天皇は公家全部の世論調査まで実施されるのです。公家達は開国には反対ですから、幕府は結局勅許を得られない。一方でアメリカは喧しく迫つてくる。この結果大老の井伊掃部頭が勅許を待たずに通商条約を結んでしまふ。当然大騒動となり、幕府を倒して天皇中心の国民国家をつくれと主張する側と、幕府と朝廷が連合して公武合体で国をつくつて行かうとする側の二派に分かれます。乱世には権力が衰退すると、權威に頼るものです。その權威に頼る方法として、公武合体か、それとも倒幕か、といふ問題が残されたのです。

しかし結局慶応三年十月に大政奉還となり、そして王政復古。明治元年三月には「五箇條の御誓文」が出されて、明治二年には版籍奉還、明治四年には廃藩置県が断行されますが、この間都を京都から東京に遷してゐます。遷都にはどんな意味があつたのか。天皇といふ方

は公家に囲まれてゐたのです。京都の御所は今公園になつてゐますが、あれは全部公家の屋敷でした。公家といふのは室町時代以来、政治にタッチしたことはありませんでした。かういふことは世界史に例がないことです。その公家に天皇が囲まれてゐたのでは、日本の近代化は出来ない、だから公家を潰せとなつたのです。しかし天皇が京都にをられたのでは、それは出来にくい。そこで天皇の東京への引越しとなる。東京遷都の勅令は出てゐません。今でも京都の人が「天皇はん、夜逃げしはつた」と言ふのはさういふことだからです。公家がゐなければ討幕はできなかつたのですが、以上の理由で公家を潰しました。

次に大名の戦闘力がなかつたら幕府は潰せなかつたのですが、その大名も潰しました。武士がゐなかつたら明治維新は出来なかつたわけですが、大名がなくなれば武士は存在理由がなくなりません。かうして国民国家の形成に妨害になるものを、全部潰したのです。これを大政奉還から明治四年までの僅か四年足らずの間に為し遂げた。さらに明治四年の秋には、品川・横浜間に汽車が走つてゐます。明治五年には東京・長崎間に電線が通じました。大変な変革です。さういふ大事業を能ふる限り僅かな犠牲でやつてのけたのです。

こんな革命は世界史に例がありません。フランス革命より素晴らしいと私は思つてゐます。フランス革命は何をやつたかといふと、王様の首を切り、コンコルドの広場だけで二万人の人間を殺してゐます。フランス全土になると、裁判もなしに殺してゐるのは三十万人を越え

ます。その結果どうなつたか。結局もとの木阿弥でナポレオンが出て来て王制に戻る。その後ナポレオンが没落してから、共和制が安定するまでに百数十年がかつてゐます。犠牲ばかり多く、實質的効果はあまりなかつたのがフランス革命です。それにくらべると明治維新は実に素晴らしいことをやつたのです。これはやはり明治維新に働いた人達の偉さもありませんが、歴史的な權威としての天皇、そしてその天皇の周圍に国民が結集するといふ知恵を歴史的背景として持つてゐたからでせう。

「五箇條の御誓文」の成立事情

その明治維新の成果として「五箇條の御誓文」が出されますが、「五箇條の御誓文」には、はじめいろいろな案がありました。福井藩士三岡八郎は参与として朝政に参画した際、「議事之體大意」と名付けて、次のやうな案を出してゐます。

一、庶民志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシムルヲ欲ス

誰もが思ひの通りの仕事が出来るやうにしなさいといふのですから、これは封建制の否定です。さらに、

一、士民心ヲ一ニシ盛ニ經綸ヲ行フヲ要ス

經綸とは經濟に關することです。すなはち經濟活動を盛んにしろといふわけです。

一、知識ヲ世界ニ求メ広く皇基ヲ振起スベシ

これは文明開化の思想です。

一、貢士期限ヲ以テ賢才ニ讓ルベシ

貢士といふのは、諸藩が朝廷に獻納する武士のことです。藩はまだ存在しましたから、藩から人を出して中央政府を運営する。そして期限を付けて優秀な人間が出たら交替しろといふわけです。つまり役人の任用規定です。最後の五箇条は、

一、萬機公論ニ決シ私ニ論ズルナカレ

「公論」といふのは大名が集つて話を決定することですから、今の国会とは違ひます。この三岡八郎の議論は封建制の悪い所は止め、經濟活動は盛んにする。文明開化もやるし、役人の任用規定を決めて諸侯會議でやつてゆかうといふ案です。いかにも公武合体派の福井藩士らしい発想です。つまり幕藩体制と天皇とを両立させようとする考へ方です。彼はのちに由利公正と改名して東京府の知事になつてゐます。

土佐藩の福岡藤次も会盟案を出してゐます。彼は坂本龍馬が殺された時に隣の家にゐながら見舞ひにも行かなかつた男です。彼の案も同じやうなもので、

一、列侯會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

といふものです。当時は明治元年ですからまだ殿様はゐます。だから殿様が集つて皆で決めるよつと言つてゐるのです。このほかの案も、中身は三岡八郎のものと大体同じです。要するに両者とも諸侯の存在を前提とした単なる会盟論です。

これに対して木戸孝允が反対を唱へるのです。

謹みて建言を奉じ候。舊主毛利敬親父子、甲子巳来譴責を蒙り、臣も亦敬親父子の左右にあり、久しく防長に伏在、四境閉塞、朝旨の在る所を窺ひ奉らず。然るところ先般辱じけなくも臣、命を蒙りて朝班に列し、倩、已往の跡を恐察奉り候に、先帝既に叡旨ありて各國へ相達せられ候趣もこれ有り。開鎖の國是問はずして自ら判然たり。

「甲子」といふのは元治元年を指します。要するにもう開国は決まつてゐるではないか。開国が決まつてゐるのだから、中身も変へなければいけないと言つてゐるのです。彼は幕府との戦争の最中から、藩といふものは国民国家を建設するための道具だ、と主張するだけの見識を持つてゐました。そこで天皇以下が神に誓ふことにしなければいけないといふわけで、木戸孝允が筆を入れて出来るのが、以下の「五箇條の御誓文」です。第一條については、

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

と修正され、「列侯」は削られてしまふ。つまり大名制度は止めるといふ前提に立つてゐます。「廣ク會議ヲ興シ」といふのですから、これは国会制度です。

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス
この二箇条は、經濟の振興と封建制度の否定です。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

ここで言ふ「天地ノ公道」といふのは国際法のことです。つまり国際法に基づいて開國を進めようといふわけです。

一、知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

これは文明開化のことです。

そしてこの「五箇條の御誓文」は、天皇以下が神に誓つたものです。だからこの御誓文の方が天皇より上にくるのです。すなはち法が天皇に先立つのです。そして公家、大名が次々に署名します。これが明治維新の終局点であると同時に、明治憲法にいたる原点なのです。これは誰に教はつたのでもない、日本人が創り出したものです。

「新日本建設に関する詔書」と現行憲法

私は明治維新が完全なものだなんて言つてゐるものではありません。フランス革命にくらべ

れば世界に誇るべきものだ、と私は申しただけです。人間がやることに完全なものはない。むしろ人間が理想を完全に行ひ得るといふ傲慢さを持つた時に、人類は限りなく不幸に陥るものです。それはソ連の例を見てもお分かりでせう。人間はさういふ傲慢さは持つてはいけない。ただ明治維新は弱点があつたかも知れないけれども、危機に直面した時に日本人が目前で創り出した大変な傑作であつたと思ふのです。勿論人間が創つたものですから完全なものではありません。しかしすぐれた大事業であつた。そこに戻つて再出発しようといふのが昭和天皇の昭和二十一年元旦の御言葉だつたのです。

ところがその後連合軍によつて憲法が押し付けられてしまひました。この憲法前文の英語原文では「日本はその安全と生き残り（サバイバル）を諸国の公正と信義に頼ることを宣言する」といふ表現になつてゐます。わが国は敗戦国だから、生き延びるためにあなた方のいふ通りにいたしますといふわけです。まるで占領管理法です。これには連合軍側も、あまりに露骨でどうも具合が悪いと思つたらしい。ですから連合軍は「サバイバル（生き残り）」を「イグジステンス（存在）」といふ言葉に変へ、さらに「リライ（頼る）」といふ言葉も「トラスティング・イン（信頼して）」といふ言葉に英語原文を変へてゐます。

今の憲法についてお話する時間はありませんが、要は日本人が自分で考へた憲法ではないといふことです。つまり占領管理法として作られた憲法です。この現行憲法にくらべて、昭

和二十一年の年頭の詔書で、昭和天皇が「五箇條の御誓文」を取り上げられた意味を考へて欲しいのです。明治維新の精神の大事さといふのは、危機に当たつて日本人が自分で考へて自分達の歴史に合ふ国づくりを行なつてきたところにあつたのです。勿論人間のすることです。すから弱点もあつたでせう。しかしそれなりに日本人は努力してきた。その原点に戻つて出発し直さうといふ精神が、この昭和二十一年の詔書に表現されてゐるのです。その精神をその後の日本人が果たして具現してきたかどうか、今の日本人が一番問はれなければならない問題です。

明治維新に学ぶといふことは、昭和天皇が言はれてゐるやうに、現在とは歴史的條件や社会的條件が違ふわけですから、当時と同じことをやらうとしてもそれは無理です。ただし現在の国際情勢の中で、日本人が自力でどういふ国づくりをして行くのかを考へる際、これも昭和天皇の詔書に「能ク至高ノ傳統ニ恥ヂザル眞價ヲ發揮スル……」とあるやうに自分達の歴史的條件に合つた「至高ノ文化」、すなはち自分達の輝かしい文化を表現して、それを守りながら国際社会に貢献できる国をつくつて行くこと。それが冷戦が終はつた今日、私達が問はれてゐる大きな課題でありまして、さういふ意味で私は明治維新の原点に戻ることが必要だと思ひます。つまり日本の文化的體質、伝統に即した国づくりを、もう一度考へ直すことを、歴史からも国際社会からも課せられてゐる、といふ風に考へる次第です。

※ 講義はここでいったん終了したが、村松先生は質疑応答の時間の冒頭で、パルマーの建白書に関して補足された。以下はそのあらましである。

何故パルマーの建白書を紹介したか、といふ点について補足しておきます。アメリカといふ国は、日本と違つていろいろな国から人が集まつて人工的に出来上がった国です。ですから国の真ん中には人々を束ねるイデオロギーが必要です。そのイデオロギーがアメリカン・ドリームです。つまり自分達の理想を世界に押し拡げることこそが、アメリカの夢なのです。その理想がフロンティア・スピリットでして、西海岸まで行き着いた後には、太平洋を越えて此方にまで来ることになつた。簡単に言へばそれが大東亜戦争です。日本はアメリカと戦争する気はなかつたのですが、結局ああいふことになつたのです。

日露戦争後、アメリカにとつて日本は太平洋上の大変なライバルになつてしまひました。だから昭和二十年八月十四日に日本がポツダム宣言を受け入れた時に『ニューヨーク・タイムズ』は何と書いたか。私は今でもバックナンバーを持つてゐますが、「太平洋の覇権を我が手に」といふ見出しで、「我々は初めてペリー以来の願望を達した。もはや太平洋に邪魔者は

るない。これでシナ大陸のマーケットは我々のものになるのだ」と言つてゐるのです。

さらに九月二日の降伏調印式のために来航した戦艦ミズーリが積んで来た星条旗は、実はペリーが掲げてゐた星条旗だつたのです。さういふことを考へると大東亜戦争を含めて、多分ヴェトナム戦争にいたるまで、アメリカン・ドリーム或いはマニフェスト・デイスティニーの表現なのでせう。良くも悪くもそれがアメリカです。だからといつて私はアメリカを毛嫌ひしろ、と言つてゐるのではないのです。日本が生きて行くためには嫌ひな相手とでもつき合はなくてはならないし、感情で政治をやつてはいけません。ソ連とアメリカとどちらがいいかと言ふと、アメリカがいいに決まつてゐる。どちらに自由があるかと言へば、断然アメリカでせう。だからアメリカと喧嘩をしろと言つてゐるのではなく、さういふアメリカの實態を歴史的に認識する必要があるのではないか、といふことを申し上げたかつたがために、パルマーの記録をわざわざ諸君に紹介したのです。

質 疑 応 答

《問》日本の国際化といふ点を含めて、冷戦終結後の国際関係はどのやうに展開していくのか、先生の御見解をお聞かせ下さい。

《答》冷戦といふのは、アメリカとソ連といふ二つの超大国が世界を支配してゐた時代です。中間に立つてゐた国がないわけではなかつたけれども、結局はどちらかの陣営に分れて対立してゐた時代が五十年近く続きました。こんな時代は世界史に例がありません。全く異常な時代でした。それが今崩れてしまつた。異常な時代が崩れれば、尋常な時代に戻ります。では尋常な時代とは何かと言へば、それは戦国時代です。世界史とは常に戦国時代でしたし、これからもさうでせう。日本は島国でしたから、長らく戦国時代とはつき合はないで済んで来ました。本格的につき合つたのは明治維新以後の八十年ぐらゐなものです。そして戦後はアメリカの保護領みたいになつて、軍事力はありませんから実質上アメリカの傘の下で暮らして来た。ところが冷戦構造が崩れたものですから、いきなりまた戦国時代に放り出さ



れたといふのが実情です。戦国時代と言つても世界大戦みたいなことはないだらうと思ひますが、局地戦で核が使はれる可能性は、北朝鮮やイランを見ても充分あります。さういふ意味での戦国時代に日本はどういふ対応をしてゆくのか、迫られてゐます。日本だけではなく世界中の国々がその対応策に困つてゐるのが実態です。この前サミットがありました。現在の世界で国民の支持を得てゐる指導者はゐません。さういふ状況の中で世界をどう再編成してゆくか、それが今の日本に課せられてゐる大きな課題であるからこそ、明治維新にもう一遍学びませう、と私は申し上げたのです。それが今日の講義の主題の一つでした。

ところで国連ですが、あれは第二次大戦の戦勝国連合なのです。チャーチルもルーズベルトも戦争中は自分達連合国を「ユナイテッド・ネイションズ」と呼んでゐました。だから常任理事国で拒否権を持つてゐるのは戦勝五箇国だけでせう。さういふことだから米ソの冷戦が始まると、機能が半分以上麻痺してしまつた。国連憲章にないPKOとかPKFなどを国連軍の代はりにつくらざるを得なかつた理由も、そこにあります。

しかしアメリカが世界の警察官としてやれる範囲が、だんだんその経済力の低下にとともに狭まつて来てゐますから、国連の強化は必要でせう。ただしそれは、第二次世界大戦の戦勝国としての国連の強化ではなく、現在の国際情勢にあつた形での強化であるべきです。ただそれぞれの国の持つてゐる思惑がありますから、国際的機構は勿論作つてゆく必要があ

るけれども、それには自づから限度があるといふことも充分承知する必要があります。一つの組織だけを絶対視するといふのは間違ひで、現にユーゴスラビアの内戦にしてもアフガニスタンの戦争にしても、手のつけようのないやうな状況になつてゐるのが実態なのは、御承知の通りです。ですから国際的な機構を安定維持のために作つていく必要はありますけれども、それが万能ではない以上、それに代はる方策を考へなければいけない。一つには日本の場合、アジアで友好関係を結べるいくつかの国と、できればアメリカも引つ張り込んで同盟関係を作つてゆく。これが日本の安全保障上必要です。そのためには日本の防衛体制をどうするかといふことも考へなければいけません。

それから「国際化」といふ言葉が生まれましたけれども、その使ひ方に注意すべきです。英語の「internationalization」といふ言葉は「internationalize」と動詞化しますと、皆で共同管理して物事をやつてゆくいふ意味になるのです。たとへばスエズ運河はフランス人のレセツプスが作つたのですが、イギリスとしてはフランスに独占されるとインドとの交通路を断たれるから困るのです。ですからスエズ運河は共同管理しようといふ意味で、動詞の「internationalize」が使はれ普及することになつたのです。オリンピックは、いろいろな国が共同で運動会管理をするから勿論「internationalize」で通用します。したがつて日本を「国際化する」と言ふと、日本を世界中の管理下に置く意味になつてしまひます。

さて日本が国際社会の中で生きる道といふことですが、政治的には先程申し上げた通りです。文化的には他人の国の真似をしたところで誰も尊敬してくれませんから、それこそ昭和天皇の詔書にあるやうに、他の国にない日本の高度の文化を守ることによつて国際社会に寄与することです。それが日本の生きる道である。さういふ風に申し上げて宜しいのではないかと思ひます。

日本文化の深層

文芸評論家・東京大学名誉教授

佐伯彰一



コスモス

日本文化は雜種文化か——敗戦後の変化

文明開化——明治開国後の変化

純種文化——不思議な連続性と持ちの良さ

二つのリズム——「開く」と「閉ざす」

『平家物語』——鎮魂の戦記文字

桜への執着——死者と絡む「桜」のモチーフ

回 心——日本人が守るべきもの

質疑応答

日本文化は雑種文化か―敗戦後の変化

この厚木といふのは初めてまゐつたんですが、厚木といふと一番最初に思ひ浮かぶのは、あの敗戦直後のマッカーサー総司令官のコーンパイプですね。あのパイプくゆらせながら、最初に降り立ったのが、厚木でした。その記憶がまざまざと蘇ってきます。私はその頃海軍で九州に居りまして、負けた後通訳代はりに連絡将校―名前は偉さうなんです。本当は雑種係で、そこで英語会話を一生懸命習ひ覚えて身についたといふ世代なんです。

今日のお話の冒頭には「雑種文化」といふ言葉を掲げたんですが、ごく卑近な日常生活、皆さんの衣食住といふことを振り返つていただくと、例へば皆さんの中で畳が全く無い家にお住ひの方、あるいは食事にご飯を全然食べないといふ方はをられますか。ほとんどをられないやうですね。さう考へると日本人の暮しといふのは、戦前、戦後でずいぶん変はつたやうでも変はらないところがある。しかしハンバーガーとかピザとかスパゲティといふのは日常の食べ物になつてゐますし、パーティーといへばローストビーフも出たりする。日常のライフスタイルの面では、敗戦後日本もずいぶん変はつてきた。週末家族で食べに行くといふと、フランス料理かイタリア料理かエスニックかといふわけで、実に雑多なものが我々の生

活の中に入り込んでゐる。これは本当にごつた混ぜの状況で、コズモポリタン・カルチャー、あるいはコズモポリタニズムといふものが我々の生活にほぼ浸透してゐるといふ気がします。私が初めてアメリカにまゐりましたのが昭和二十五年で、これはちよつと屈辱的な思ひ出で未だによく覚えてゐますが、機内でフライト・ランチを渡された。その中にチキンの丸焼きがあつてとても食べ切れない。パツと捨てるのが現代の皆さんの感覚でせうが、その当時の日本人の感覚としてはもつたいたなく捨てられない。だから荷物の中にいれておいたのです。そして関税の役人がそれを開けてみて、「オー」と言つてびつくりした顔をしてゐるんです。負けた国の情けなさと、さらに生活レベルが違ふなといふ感じが身にしみ渡りました。さういふ時期から思ひますと、今の日本の食生活の豊かさ、戦後の変はり方といふものは大変なものだと思ひます。ですから敗戦から五十年たつて、日本人の暮しぶりといふのは急激に変はつて、それを一言で言へば世界のいろんなものを取り込んだ雑種化と言ひますか、雑種文化性といふものがいよいよ強くなつたといふ気がするわけです。

文明開化―明治開国後の変化

それではさういふ日本人の暮しぶりの雑種化といふのは「敗戦ショック」で初めて生れた



のだらうかといふ問題が出てきます。一面では確かにさうだと思ふんですが、本当にさう言ひ切れるのか。もう少し前にさかのぼりますと明治維新がありました、これはまさに「黒船ショック」だったと思ひます。二百何十年江戸体制のもとで長い平和と鎖国状況が続いてきた中で突然黒船にあつて国を開く、あの時の日本人も大変ショックを受けた。その直後の五十年間と敗戦直後の五十年間、これは詳しく比較してみるに値することだと思ひます。ずいぶん似てゐるところもあるのです。開国した直後、やはり似たものの一つが「すき焼き」です。それまで牛の肉は、四つ足だから仏教の教へで食べてはいけなかった。ヘアスタイルもみなちよんまげを結つてゐたのをザンギリにする。「ザンギリ頭を叩いてみれば文明開化の音がする」といふわけで、「文明開化」といふ言葉が当時非常にはやつた。敗戦後の変化を一

言で「アメリカ化」と言ふとすれば、文明開化は「西洋化」と言へます。当時大学を出たばかりの坪内逍遙が『当世書生気質』といふ小説を書いたら、大当りしてベストセラーになった。読んでみると生々しい形で明治の初めの学生の暮しぶりや気分が描かれてゐます。滑稽なのは会話で、半分英語といふ位に生かじりの英語をやたらに使ふ。これが明治初めの学生気質の一つの特徴だつたらしい。現在の日本も片仮名文字が氾濫してゐますが、それに近いことが明治の時代にあつたのです。「鹿鳴館」は明治十年代の世相を表はす言葉ですが、日比谷辺りに立派な西洋館を建て、日本も西洋化したといふ印に大舞踏会を開いて、伊藤首相以下みな仮装で参加した。ある意味ではかなり滑稽な情景です。当時の日本の浅はかな位の近代化、西洋化の努力、その象徴が「鹿鳴館」でした。

最近『鹿鳴館の貴婦人・大山捨松』といふ本が出ました。お書きになつた久野アキコさんは、大山さんのひ孫にあたる方です。この大山捨松といふ人は、大山巖元帥といふ日露戦争の時の総司令官の奥さんですが、この人の一生はずいぶん面白い。旧姓は山川と言ひ、会津の白虎隊の一族です。捨松さんもほんの若い娘で籠城に加はつた、会津戦争の生き残りです。薩摩に攻められた会津藩の娘が、薩摩藩の大山家に嫁ぐことになつた、これも皮肉な運命です。この捨松さんは、後に津田塾大学を始めることになつた津田梅子さんと一緒にアメリカに行かれた。その時両親が、もうアメリカに行くんだから捨てたに等しいといふことで捨松

といふ名前をつけたらしい。明治の初めて、しかも十になるやならないぐらゐの娘がアメリカへ行き、もちろん英語は全然出来ないわけですから、個人教授から始めて小学校に通ふ。そしてバツサー・カレッジといふ、アメリカで最も有名な女子大の一つを最優等に近い成績で卒業されて、卒業の時のスピーチも堂々とおやりになつた。実は大山さんもフランスから帰つてきた軍人で、その留学帰りの二人が結ばれたのですが、その大山さんが西洋館を建てようといふのでフランス風の家を建てられた。ところがやはり物真似ですから、アメリカの友達が出来て、「あなたのお宅はグロテスクでひどい家ね」と言はれた。それなら昔の日本風の家の方がずっといいのに、といふわけです。つまりそれ位に明治の日本は西歐化、文明開化に力を入れた。そして敗戦後は、経済における復興によつて世界一流の経済国家に成り上がった。しかしその結果は両方とも、雑種文化と言はざるを得ないやうなものであつた。さうすると我々の文化は恥づかしながら、明治以来一種のコズモポリタン化、雑種化したことに他ならないと思ふのです。

純種文化―不思議な連続性と持ちの良さ

それでは日本人は明治以後、それから敗戦後、完全に文化的に雑種化してしまつたのかと

いふことになります。ここで面白い、私自身もびつくりした経験があります。私は昭和三十七年に初めてアメリカへ行つて日本文学史を教へました。これは英語で講義をして、テキストは英訳された日本文学を使ふ。初めのうちは一生懸命前の晩に講義録を作つて読みあげてゐたのですが、見ると残りが十五分位あるのに、もう数行しか残つてない。これは弱つた。ノートを離れて英語でしゃべるのは自信がない。冷や汗が流れてビクビクした。そのうち、日本文学に関しては俺はこの中で一番よく知つてゐて誰にも負けないといふ度胸が出てきて楽にできるやうになつた。この際一番びつくりしたのが俳句の授業なんです。敗戦後まもなく京都大学の桑原武夫さんが『俳句第二芸術論』を書かれてずいぶん評判になつた。「日本人は俳句を大事にしてゐるが、こんなものは二流の芸術に過ぎない。かういふものを大事にしてゐるから日本の文化が進まないのだ」といふ主張で俳句を辞めた人も出る位影響力があつた。それが印象に残つてゐましたし、アメリカ人にはもちろん「梅雨」も「こたつ」も分からない、「花見」と言つてもピンとこない。こんなアメリカ人に俳句などとてもだめだ。でも俳句を全くやらないわけにもいかないから一回だけにしようと思ひました。そしてその朝窓際を見たら、何とハラハラと初雪が降り出したんですね。「ええつ、十月半ばにもう初雪が降るの」とびつくりしたんです。しかしそのうちにうれしくなつてきて、俳句をやらうといふ時に初雪とは景気がいい。そこで初雪の句を幾つか並べて、これは学生に必ず受けるぞと思

つて得意満面で教室に行つて、「諸君、今日は初雪だね。窓の外を見てごらん」と言ふと、この日本人は何を言ひ出すんだ、と皆キョトンとしてゐる。一人の学生が「初雪でも二度目でも雪は雪だ。何が面白いのか」と言ふのです。僕はシヨックを受けて、「うーん、さうか、さう言はれば確かに初雪だつて特別の雪が降るわけぢやない。しかし諸君ね、初雪といふことを聞いて感動しないんぢや、もう日本文学なんか辞めた方がいいよ」と思はず言ひかけたんです。だからやはりアメリカの学生に俳句は無理だ、と本当にがつくりした。ところが次の時間、もう俳句は辞めようと思つて行つたら、皆ほとんど手を挙げて、「いや先生、俳句といふのは面白い。僕も作つてみたから見てくれ」といふ学生が何人も出てくる。俳句といつても英語ですから、要するに非常に短い短詩型の詩ですが、「私も作つた」「僕も作つた」とゾロゾロ出てくる。僕は日本語でもろくな俳句が作れないのですが、「うん、これは俳句になつてゐる」とか「これはちよつとをかしいぞ」とコメントをして返したわけです。「なぜそんなに面白いんだ」と聞くと、「自分たちに詩が作れるなんて思つたこともなかつた」とびつくりしてゐる。アメリカ人に言はせると、本当の変はり者か天才、さもなければホモの男でない限り詩など作れない。ところが俳句を見ると「秋に落ち葉が散つて私は寂しい」とか「月が照つて恋人の面影を思ふ」とか、なんだこんなことなら俺でも書けるぞといふので、皆非常にうれしくなつたんですね。さう言はれてみると、日本でも江戸時代に「床屋俳諧」と言

つた。床屋さんでも誰でも俳句を作った。だから本当の大衆芸術で誰でもやれる。それが俳句の大きな魅力だったので、僕はそれを忘れてゐた。日本といふのはさう思つてみると、さういふ面白い国で、俵万智さんの「サラダ記念日」といふ歌集が大ベストセラーになりました。短歌といふ詩型が始まつたのは古事記、万葉の時代ですから、さういふ詩型が今でも生きて使はれてゐるといふのは、どの国を取つても信じられない事態です。また間もなくお盆の季節で、皆さんもお墓参りに行かれる。あるいはお正月には神社参りに行く。さういふ「お盆の民族大移動」などと言はれる習慣が未だに残つてゐる。日本の神社はギリシヤの神殿に負けない位に古い宗教で、向かふは完全に遺跡と化して形だけ残つてゐるのに、こちらには生きてた神社として未だに残つてゐる。さういふ国は他にはまづ見つからないでせう。すると一方では確かに雑種文化ですが、意外な位に古い習俗が身の回りに残つて息づいてゐる。国だといふことに、僕自身改めて気づかされたのです。少し前にイタリアからボスカルローさんといふ、ベネチア大学で日本文学の教授をしてをられる方が来られました。彼女は千鳥ヶ淵に近いフェアモント・ホテルに泊まつてゐて、その近くで灯籠流しがあつたんですね。それを初めて見て、「佐伯さん、あれは本当にすばらしい、感激したわ」と言ふのです。灯籠流しは一種の精霊祭で、死者の霊、先祖の霊を灯籠を流すことで慰めるお祭りです。さういふ習俗が今も生きて行はれてゐる。ボスカルローさんは日本文学の専門家ですから由来も分

かるので、「いやあ佐伯さん、あれは本当にすばらしかった、感激しました」と何度も繰り返してゐました。さういふことで、日本は確かに身の回りを見ますと雑種文化ですが、一方ではほとんど純種文化と言へる位に古い習俗も残つてゐる。特に日本の文学史を考へてみますと、古事記、万葉以来実に長くて、しかもその連続性、持ちの良さは大したものです。イギリスの場合は、日本の古事記、万葉といふ古代日本語の時代には、古代英語、アングロサクソンいはゆるオールド・イングリッシュで書かれてゐます。ところが気の毒なことに、ノルマン・コンクエストといふノルマン人による征服が行はれた。そこでフランス語を話すノルマン人がやつてきて、英国の宮廷も上の方は皆フランス語をしゃべるといふわけで、イギリス的な古くからのアングロサクソンの伝統はそこで一度断ち切られる。相当な断絶があるのです。ですから日本のやうに、アングロサクソンの時の詩型で書く人が今ゐて、それが『サラダ記念日』のやうなベストセラーになるといふことは全然考へられないことなのです。

二つのリズム―「開く」と「閉ざす」

日本は確かにある時期は外国のものを大幅に取り入れた。古代奈良朝では、都の形は長安の都を真似、そしていろいろな制度を一切唐風に変へ、つまり中国化革命のやうなことを行

つてゐます。戦国時代の後にはキリスト教が入つてくる。いはゆる南蛮文化が相当入り込むわけです。それから先ほど言ひましたやうに明治の文明開化、敗戦後のアメリカ化といふふうには、ある意味では徹底的に国を開いてドツとばかりに外国のものが流れ込む時期がある。では日本は中国化してしまつたのか、あるいはヨーロッパ化、アメリカ化してしまつたのかと言ふと全然さうではない。日本の歴史のリズムを振り返つてみますと、「開く」と「閉ざす」といふのが面白いリズムのやうになつてゐて、奈良朝でパーッと開くと次の平安朝では遣唐使さへやめて、いはば和風の文化が栄える。そこで『源氏物語』をはじめ、あの輝かしい女流文学の花が開くわけです。つまり一種の無意識の文化的リズムといふものが、日本の歴史の、また文学史の基本をなしてゐるといふことに気づかざるを得ないわけです。やはりもう一つ面白いことに気がつきまして、私は『日本人の自伝』、『近代日本の自伝』といふ本を書いてゐますが、この自伝的な書き物といふのは日本は実に古いのです。ある意味では西洋より起源が古くて、ずっと一貫してゐる。その自伝伝統、むしろ「私語り」と言つた方がいいかもしれません、平安朝の女流日記、『蜻蛉日記』とか『更級日記』、『和泉式部日記』のやうなものを見ますと、世界文学の中に完全に位置しうる全く見事な自伝になつてゐるわけです。そしてその書き手の生活感情と言ひますか、心の動き、情緒の動きといふものを非常に大事にしてそれを記録する。西洋では自伝は一体文学か、ただの記録かといふ議論は未だに

続いてみるのですが、平安朝の日本人は日記が文学かどうかなどと野暮なことは言はない。もちろん文学でせうと言つて読み伝へ、後々までもこれを保存してくれたのです。ですから日本人はどこかへ行くとすぐ旅行記や随筆を書いたり、短歌や俳句を作つたりする。一種の伝統として、ずつと染みこんで来てゐると思ふのです。

『平家物語』—鎮魂の戦記文学

これからが本論ですが、まづ『平家物語』の例に入りたいと思ひます。西洋文学流の言ひ方では、古代は「叙事詩」といふものが文学の中心で、ギリシャのホメイロスの『オデュッセイ』、『イリアス』のやうなものがいつも文学の出発点として挙げられます。大体において民族の大きな集団的な行動、さうなると戦争ですが、その戦争が中心のテーマになつてゐる。そこで英雄たちの悲壯な最期や行動が描かれる。西洋の場合古代にこれがあり、中世にこれが復興した形でいろいろなものがヨーロッパ各地に生れるわけです。その代表の一つに、フランスの『シャンソン・ドウ・ローラン』、『ローランの歌』といふ叙事詩がありますが、そのテーマは、未だに続いてゐるイスラムとキリスト教の争ひです。イスラム教はスペインまでずつと征服した。それに対して今度はキリスト教が反撃し、結局イスラムを駆逐した。そ

して中世には十字軍といふ大事件がありますが、これはキリスト教側が聖地エルサレムを回復するといふ名目でイスラムに遠征した。そのイスラム教徒との猛烈な戦ひが、この『ローランの歌』に歌はれてゐるのです。ここで面白いのは、敵は異教徒であるから皆殺しにしなければいけない、全部完全な敵です。そこで猛烈果敢に戦つて敵を打ち破り、自分も戦死してしまふ、その英雄ローランを讃へた叙事詩なのです。ここに出てくる敵は、絶対に殲滅されるべき憎むべき異教徒で一貫してゐるわけです。ところが『平家物語』の方は、確かに源氏と平家の争ひなのですが、源氏側から見て平家が全く敵扱ひされてゐるかといふと、さうは言ひ切れない。特に平家の滅亡が近くなつて平家の公達が捕らはれて斬られたり、海へ飛び込んで自殺する。その死者の数が増えていくと調子がだんだん和らいできて、全体がレクイエムといふか、死んでいく人の魂を鎮めようといふ鎮魂歌になる。『平家物語』全体に、滅んでいつた平家の人々の魂を鎮め和らげようといふテーマ、基調がくつきりと現れてくるのです。滅んでいく敵を讃へんばかりにして、その敵の魂を和らげようといふ叙事詩は、やはりどこの国にもほとんどないと思ひます。しかもかういふ戦記文学の伝統は『平家物語』だけではない。例へば私の友人の阿川弘之君が、我々の世代で戦争に出て亡くなつた方を中心にして書いた『暗い波濤』といふ壮大な小説がありますが、これはまさに滅んでいつた人、自分の仲間たちを悼むといふ気持ちがあはつきりと現れてゐます。井伏鱒二さんの『黒い雨』

といふ原爆を書かれた小説でも、「憎い敵、アメリカ」といふモチーフで書かれてゐるよりは、やはり死んでいつた人を静かにいたはり、その魂を鎮めようといふ心情が中心になつてゐます。この鎮魂といふ伝統は万葉集にまで遡り、万葉集の中でも多い歌の一つが、死者を弔ふ鎮魂の歌なのです。だから死者の魂を鎮め和らげたいといふ心情は、古事記、万葉の昔から『平家物語』を通して今に至るまで、我々がお墓参りに行くとか、灯籠流しをするといふ習俗の中にまでずつと生きてゐるのです。この間産経新聞で読者の入選論文を読んでをりましたら、中田さんといふ女の方が、ビルマ戦線で戦死されたお父様を思ひ出しながら靖国神社の問題を取り上げてをられた。この問題は死者の魂を大事にするかしないかといふ人間の魂の問題なのであつて、一片の憲法解釈なんかでは片付かない。するとそれは、大臣が公式の資格で参るのはけしからんといふやうな愚かしいレベルの問題では全くない。これは日本人にとつて魂の問題であり、宗教問題なのです。「死者の魂を和らげ慰めようとする心情は間違つてゐる」、そんなばかな法律といふのは全然意味をなさないわけです。ところが「いや憲法何条にありますから」と言ふやうな人が多い。しかし、魂の問題に全然関心がないといふならさういふ立場から、またキリスト教徒の人は魂について違つた考へ方を持つてゐますからそれならさういふ立場から、宗教の問題として扱ふべきものなのです。

桜への執着―死者と絡む「桜」のモチーフ

ここで現代文学の作品を幾つか振り返ってみませう。最初は梶井基次郎といふ、非常に繊細で詩人的な小説家です。明治三十四年に生れ、三十歳そこそこで惜しい才能が消えました。この人の変はつた作品です。

「櫻の樹の下には」

櫻の樹の下には屍體が埋まつてゐる！

これは信じていいことなんだよ。何故つて、櫻の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことぢやないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だつた。しかしいま、やつとわかるときが來た。櫻の樹の下には屍體が埋まつてゐる。これは信じていいことだ。

ある意味では、奇怪でグロテスクな幻想にも似てみえますが、読んでいくとこれは要するに病人の幻想ではないか、しかも少し気取つて文学青年的な、「どうだ、うまいだらう」といふ感

じがしないでもない。

一體どんな樹の花でも、所謂眞つ盛りといふ状態に達すると、あたりの空気のなかへ一種神秘的な雰囲気を撒き散らすものだ。

桜の眞つ盛りの状態といふのは、本当に何とも言へない神秘的な雰囲気を漂はせてみますね。不思議な生き生きとした美しさだ。ところが、その美しさはどうも自分には信じきれない。反対に不安な気持ちになる。

お前、この爛漫と咲き亂れてゐる櫻の樹の下へ、一つ一つ屍體が埋まつてゐると想像して見るがいい。何が俺をそんなに不安にしてゐたかがお前には納得が行くだらう。

さういふ屍體が実は桜の木を養つて、これほど美しい花を咲かせてゐる。この頃梶井基次郎は結核に侵され、発熱もしてゐた。だからこれは、病める青年の病的な幻想、非常に神経の細やかな表現力の豊かな若者の文学的な幻想といふ氣もしてきます。そして桜の木を見ると、美しいながらも却つて圧迫感を覚える。

—お前は何をさう苦しさうな顔をしてゐるのだ。美しい透視術ぢやないか。俺はいまやうやく瞳を据ゑて櫻の花が見られるやうになつたのだ。昨日、一昨日、俺を不安がらせた神秘から自由になつたのだ。

さう考へてみてやつと平静さを取り戻すことができ、そこで二、三日前のことがフツと思ひ浮かんできた。川の中を散歩して石の上を伝へ歩いてゐると、薄羽かげろふの美しい結婚風景に出あつた。ところが結婚が行なはれるとそのまま次々に死んでいつて、石油を流したやうな光彩が一面に浮いてゐる。何万匹とも知れない薄羽かげろふの死体だつた。産卵が終つた彼らの墓場だつた、といふふうには、死の幻想の上にさらに生きものの死といふ実際の光景が重ねられる。そして最後のところで、

俺はそれを見たとき、胸が衝かれるやうな気がした。墓場を發いて屍體を嗜む變質者のやうな惨忍なよろこびを俺は味はつた。

ほとんど病的な境地にまで踏み込んでいくわけです。自分はこの谷間の療養地、伊豆半島の

湯ヶ島の温泉に泊まつてゐる。かういふ所で病気の療養をしてゐるとどうも気持ちのバランスがとれない。暗い、美しい桜と死のイメージとを重ねあはすことで、やつと心の落ち着きが得られた。

一體どこから浮かんで来た空想かさつぱり見當のつかない屍體が、いまはまるで櫻の樹と一つになつて、どんなに頭を振つても離れてゆかうとはしない。

自分自信の死の予覚―彼はこれを書いてから数年で亡くなつてゐるのですが―さういふものとの幻想が結びついて、それを視覚化することでやつと心の落ち着きが得られた、といふ解釈もできるわけです。ところが面白いことに、この最後にいたると、

今こそ俺は、あの櫻の樹の下で酒宴をひらいてゐる村人たちと同じ権利で、花見の酒が呑めさうな氣がする。

真つ盛りの桜を見てみると圧迫感を覚えて気持ちが悪くなる。そこで桜の下には実は屍體が埋まつてゐて、あれはただ美しいだけではないぞといふ病的幻想を思ひ浮かべることで

やつと心が落ち着く。落ち着きを取り戻してみると、桜の下の花見の宴にも加はることができさうだ。桜とのいはば和解といひますか、平和な安らぎのある交はりといふものが最後に至つて復活してゐるわけです。花見の宴は江戸時代に大に行なはれるやうになつたのですが、お花見といふと酒を飲んで騒がなければ落ち着かないといつた不思議な習慣は、ずつと我々の中に生き続けてゐるわけです。なぜそれほど日本人が桜に執着するのかといふことを考へていきますと、これはやはり民族心理の深層に行き着けるやうな気がします。

梶井基次郎より五つばかり年下ですが、坂口安吾といふ異色の作家がをります。昭和三十一年に『桜の森の満開の下』といふ変はつた面白い小説を書いてをりまして、今昔物語に出てきさうな昔の話です。非常にくれた、梶井基次郎とは対照的な語り口で、

桜の花が咲くと人々は酒をぶらさげたり団子をたべて花の下を歩いて絶景だの春ランマンだのと浮かれて陽気になります。これは嘘です。なぜ嘘かと申しますと……桜の花の下から人間を取り去ると恐ろしい景色になりますので、能にも、さる母親が愛児を人さらいにさらわれて子供を探して発狂して桜の花の満開の林の下へ来かかり見渡す花びらの陰に子供の幻を描いて狂い死にして、花びらに埋まってしまう（このところ小生の蛇足）という話もあり、……

実はかういふ能はありませんが、ただ花盛りの桜の下で狂った母親が舞ひを舞ふといふ能はいくつかありますから、満更でたらめでもないのです。

桜の林の花の下に人の姿がなければ恐ろしいばかりです。

かういふ一種の直感的な幻想といふ点では、あるいは坂口は梶井の作品を読んだのではないかとも思ひますが、読んだにしても、どうやらほぼ忘れた形で眠つてゐて、どこかでつながりながら全く別の展開をしたのではないかといふ気がします。最後は登場する山賊の男も、彼を指図する恐ろしい女性も、一人とも桜の下に引き込まれるやうに死んでいつて姿が消え、残るのは真つ盛りの桜の木だけ。はらはらと桜の花びらが散つてゐるといふところで物語は閉ぢられます。かういふ桜の幻想といふか桜のモチーフといふのは、現代作家の心の中にも深く入り込んでゐるといふことを申し上げたいのです。二人より少し先輩になる芥川龍之介の『神神の微笑』は、日本の宗教史をそのまま小説にしたやうな大変面白い注目すべき作品です。これはキリシタンの時代が舞台で、ここに出てくるパードレ・オルガンティノといふ人は、日本で生涯を終へた実在の宣教師です。

或春の夕、Padre Organino はたった一人、長いアビト（法衣）の裾を引きながら、南蛮寺の庭を歩いてゐた。

キリスト教が日本に入り込んだ時に方々に南蛮寺、つまり教会が建てられた。

庭には松や檜の間に、薔薇だの、橄欖だの、月桂だの、静養の植物が植ゑてあつた。殊に咲き始めた薔薇の花は、木を幽かにする夕明りの中に、薄甘い匂を漂はせてゐた。それはこの庭の静寂に、何か日本とは思はれない、不可思議な魅力を添へるやうだつた。オルガンテイノは寂しさに、

彼はイタリアからはるばるやつて来た宣教師だつたんですが、

砂の赤い小徑を歩きながら、ほんやり追憶に耽つてゐた。羅馬の大本山、リスボアの港、羅面琴の音、巴旦杏の味、「御主、わがアニマ（靈魂）の鏡」の歌—さう云ふ思ひ出は何時のか、この紅毛の沙門の心へ、懐郷の悲しみを運んで来た。彼はその悲しみを拂う為

に、そつと泥烏須（神）の御名を唱へた。が、悲しみは消えないばかりか、前よりも一層彼の胸へ、重苦しい空気を擴げ出した。

「この國の風景は美しい。」

しかしノスタルジイの國に帰りたいといふ思ひは消えない。氣候も温和で何も文句はないが、この國に溶け込み切れない。どうしてもこの國から逃げ出したいといふ氣がする。

オルガンテイノは吐息をした。この時偶然彼の目は、點點と木かげの苔に落ちた、仄白い櫻の花を捉へた。櫻！オルガンテイノは驚いたやうに、薄暗い木立の間を見つめた。其處には四五本の棕櫚の中に、枝を垂らした糸櫻が一本、夢のやうに花を煙らせてゐた。

「御主守らせ給へ！」

とデウスにまた呼び掛けるわけです。

オルガンテイノは一瞬間、降魔の十字を切らうとした。實際その瞬間彼の眼には、この夕闇に咲いた枝垂櫻が、それ程無氣味に見えたのだつた。無氣味に、——と云ふよりも寧ろこ

の櫻が、何故か彼を不安にする、日本そのもののやうに見えたのだつた。が、彼は刹那の後、それが不思議でも何でもない、唯の櫻だつた事を發見すると、恥しきうに苦笑しながら、静かに又もと來た小徑へ、力のない歩みを返して行つた。

この短篇にも櫻が出てきて、やはり同じやうな不安な思ひに取りつかれる。しかし彼の場合、日本といふ異教国では宣教がうまくいかないのではないかといふ不安をかき立てる、その象徴が桜の花といふ形で扱はれてゐます。

現代作家にも櫻を扱つた方は多いのですが、宇野千代さんの『薄墨の桜』といふ小説があります。これは実際に岐阜県の羽島にある古い名木らしいのですが、これが枯れさうになつたのを篤志家が一生懸命頑張り、復活させたといふ話です。そしてその木のそばの村から出てきた頑張り屋の女性の戦後出世物語、「戦後の闇市で靴磨きをし、今は大きな料亭のマダム」といふサクセス・ストーリーでもありますが、いろいろ奇怪な話が展開していきます。そこにもう一人かはいい養女が出てきて、結局この二人が心中——実は殺人を隠すための心中——で亡くなつてしまふといふ面白い話です。それが読んでいくとこの女性たちはどうも桜の精であつたらしい。桜の精が戦後日本を舞台に演じた、一種の夢幻劇のやうな感じさへしてきます。

さういふわけで、この桜のモチーフは実に息長く日本人の心の中に染み込んでゐると言はざるをえないのです。平安朝初期の伊達男の代表、在原業平の歌が「世の中に たえて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし」ですね。桜、桜と氣にばかりして、春は全然氣分が落ち着かない。桜がなければもつとのどかに暮せるのといふ、桜に対する一種物狂ほしいやうな執着をあの色男の業平が歌つてゐる。ところが、彼と全く違ふ中世の行脚僧、歌人で旅人の代表でもある西行の辞世の歌が「願はくば 花の下にて春死なん その如月の望月のころ」です。死ぬのなら望月の頃、満月に桜が照らされてゐる、その下で息を絶えられたらこれ位いい往生はない。出家をした坊さんですからそれほど桜にこだはる必要はないし、むしろお釈迦様でも歌つた方がふさはしいのに、自分の最後にはぜひ桜があつてほしい、と歌つてゐるのです。

そして江戸時代では本居宣長ですね。小林秀雄さんは宣長が大好きでしたので、晩年はもつばら桜に凝られて、毎年名木を探し出しては見に行くのを樂しみにしてをられました。「あそこはいいよ」といふ話を何度か伺つた覚えがあります。宣長さんの歌は「承知のやうに」敷島の 大和心を人間はば 朝日に匂ふ 山桜花」ですね。実際に山桜を自分の墓に植ゑろと言つて、その山桜が未だに咲き続けてゐるらしいです。宣長さんは三百首位桜を恋ひ慕ふ、本当に「桜狂ひ」といふやうな歌を作つていらつしやる。このやうにして、桜のモチーフが

殊に死者と絡む形で、あるいは桜に住み着いた桜の精といふものに対する信仰と絡み合った形で、日本人の想像力の中にずっと生き続けてきたのは明白な事実のやうに思はれてくるのです。

回心—日本人が守るべきもの

この会でも「日本回帰」といふ言葉をお使ひになつてゐます。この会の宮脇昌二さんが『ソ連抑留と日本回帰』といふ非常に感銘を与へるご本をお書きになりましたが、その中で、ソ連抑留といふ苦しい体験を通して、心のよりどころとしての日本発見をする経緯が生き生きと語られてゐます。我々日本人は、雑種文化的な状況の中で生きてゐるわけですが、そこでフツと気がつくとき、やはり古代以来の底流といふやうなものがあり、それが我々のルーツを成し根源を成してゐる。さういふことに気づくきっかけは各人各様だと思ひます。私の場合は、アメリカの大学で講義をして、日本の文学史を振り返るといふことから機縁が生じた。僕の家は立山信仰といふ古神道を守つてきた家なのですが、青年時代には関心がなくて、あんな古臭いことは俺には関係ない。アメリカ文学をやるぞといふ気持ちだつたのです。それがフツと気がついたら、いつかそこへ戻つてゐたわけです。川端康成さんの場合も、初期の

作品は典型的なモダニズムの文学で、さういふことばかりやつてをられた。それがあつた時フツと気がついて帰られたやうで、最後にノーベル賞を貰はれた時のストックホルムでの講演は『美しい日本の私』といふ、非常に印象的な名講演でした。それから谷崎さんにしても、初期のものは西洋流の悪魔主義、テカダンスで、十九世紀末の西洋文学の流行を全面的に吸収したやうな小説を書き続けられた。それがあつた時フツと根にたち返るやうに、『源氏物語』の全訳までなされた。これは漱石の場合と同じで、留学して現実の英国に触れると、やはり英文学をただ一生懸命吸収しようと思つて勉強してゐるだけではだめだ。自分本位の立場で、日本人である自分にたち返つて、そこから考へ直すよりしやうがない。森鷗外にしても全く同じです。するとさういふ立派な作家たちの経歴を振り返つてみても、ルーツに帰るきつかけは各人各様で、やはり体験によるショックが我々凡人には一番よく効くと思ふのです。『平家物語』などは仏教が溢れんばかりに放り込まれてゐますが、その底から日本人の「心の深層」が浮かんでくる。さういふ「共同の無意識」といふものを発見し、それを守ることが、今一番大事な問題ではないかと思ふのです。日本人は古来、桜をはじめ森羅万象に魂があると考へてきました。先程触れた靖国問題も結局魂の問題に行き着くのですが、その魂を日本人がどう考へてきたかといふ問題です。我々の無意識の中にはやはり「祖先の魂を守る」といふことがある。それが我々の生きがひなり生活のもとを築く根源だといふことに自づと気

づかされてきます。守るべきものは自分たち日本人の心の深層、「共同の無意識」の中にある。ある日フツとそのことに気がつき、「回心」するのではないかと思ふのです。

質 疑 応 答

《問》日本人が守るべき「魂の鎮魂」といふことについても少しお聞きしたいと思ひます。

《答》鎮魂といふ言葉を説明抜きで簡単に使つたのですが、これは日本人の死生観につながる大きな問題だと思ひます。古事記で黄泉の国の描写を読みますと、日本人は随分リアリティックに死体の汚さとか、死後の惨めさを見詰めてゐたといふ気がします。ですから死は汚れである、といふことで今でも神社ではお葬式を扱はない。死を汚れとする考へ方は長い間尾を引いて、例へば天皇が亡くなれると、都を汚れた所から新しい所へ移してしまふといふ大掛かりな、いはば清浄化の作業まで行なはれた。死を汚れとする、死者に対する恐れといふ気持ちはかなり根深くあつたと思ふのです。ですから「死者の崇り」といふことは日本人の昔からの信念の一つで、『源氏物語』の中でも「物の怪」といふものが度々現れます。生きてゐる人でさへ嫉妬などによつて物の怪になります。死者の物の怪は取りついて生者を殺しかねない。これが江戸時代の怪談、お岩さん辺りにまでつながつてくるわけです。だ

からさういふ死者の崇りは怖いぞ、といふのでこれをなだめなければいけない。鎮魂の起こりはやはりさういふことだつたと思ひます。死者といふのは放つておくと祟りをする、何をするか分からない、だから何とかしておとなしくしてもらはなければ生きてゐる人間は安らかに生きていけない。さういふ原始的な恐怖感のもとにあつたと思ふのです。ところがその生々しい恐怖感が、死者の魂をなぐさめる方策を構じてゐるうちにだんだん和らいできて、むしろ死者の魂を和らげることで生きてゐる人間が支へられ、力づけられるやうになる。「生者の心の支へとしての死者の存在」といふ考へが生まれてきたと思ふのです。ですから初めは、物の怪、幽霊を怖がるやうな原始的な恐怖感のもとにあり、死者の魂を和らげる作業を通じて、生きてゐる人間もある意味では死者とつながり、そこから安らぎが得られる、先



祖の靈を大事にすることで生きてゐる人間の心の安らぎが得られる、といふことに重点が移つてきたやうに思ひます。

これのいい例はお能です。例へば坊さんが小野小町に縁がある所へ行くとそこに小町の幽霊が現れて、「私は未だに成仏できません。地獄で苦しんでゐます」と訴へる。恋人を受け入れないで振つてしまつたから、その思ひが自分に取りついて未だに安らげない、何とか成仏させて下さいといふのです。そこで坊さんがお祈りをしてやると喜んで消えていく。ほとんどの能では、死者の魂は何か現世に思ひ残すものがある。それを断ち切れないので死者になりきれない。だから祈ることと死者の安心を確保してあげる、これがお能の基本構造になつてゐます。坊さんが出てきてお経を上げたりするので、形としては仏教の回向で死者の心が落ち着くといふことですが、実はインドの本来の仏教では、悟りを開けばさういふことは関係ないわけで、死者の魂に執着して、その怨念が残つてゐるから慰めてあげなければいけないといふ考へ方は、どうも日本人に格別強かつたものだと思ひます。もちろんヨーロッパでもモーツァルトやベルデイがレクイエムを作つてゐますから、「死者よ、安らかに」といふ思ひは万国共通のものだと思ひます。けれども戦死した方の遺骨を収集したり、あるいは飛行機事故の時に、遺体を何とか収容して手厚く葬つてあげたいといふ気持ちだが、日本の場合は格別に強くはつきりしてゐます。それはやはり、死者の魂は放つておくと浮かばれないし成

仏でできない、生きてゐる人間が何とか看取つて大事にして上げなければならぬといふ気持ち強いからだと思ひます。といふことは裏返して見れば、生きてゐる人間の安心感は死者とのつながりを確かめ直すことで得られる、過去をはつきりさせ、これを知ることによつて、むしろ現在生きてゐる我々の力も湧いてくるし、心の安らぎも得られるといふことになるのではないでせうか。

日本の国から

——皇太子殿下をめぐる御歌を中心に——

九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎



山桜

「国がら」といふこと

皇太子殿下御成婚と和歌

成人式（加冠の儀）まで

御母君、美智子妃殿下の長歌

イギリス御留学と立太子札

皇太子殿下のお歌四首

「帝室は独り萬年の春にして」

「国がら」といふこと

題に「日本の国がら」とつけさせていただきました。国がらの「から」といふのは例へば「人がら」といふ使ひ方にも示されてゐるやうにそのものでなければ他に求めることのできないもの、といふ意味です。万葉集で大伴旅人は吉野の山や川をほめたたへて「山からし、貴くあ(る)らし、川からし清けくあ(る)らし」と言つてをりますが、その「山から」「川から」といふのは、吉野以外では求められない、山や川のもつ独自のすがたといふことです。従つて「日本の国がら」といふのは、「日本独自の、他の国には求められない、国のすがた」といふことでせう。それが今日の表題なのですが、皆さまは、これまでこの「日本の国がら」といふことをお考へになつたことがおありでせうか。おそらく、そのやうなことは殆んど考への対象にはならなかつたかと思ふ。国はどの国でも同じなんだ。人間が同じ人間であるやうに。なのに日本の国独自のものといふやうなことを考へたり、そんなことにこだはるのはよくないこと、そんなことに関心をいだいてみると、またぞろ独善的になつて、戦争につながるのではないか。さういふ警戒心が働いて、そんなことははじめから考へようとしらないのではないでせうか。もしさうだとすれば、それはとんでもない飛躍なので、やはり、日本は

日本としてののはつきりした個性をもたなければいけない。それぞれの国がそれぞれの美しい国がらをもち、それを自らの誇りとしながら、しかもお互ひに和みあひ、睦みあふ世界を実現することこそ、本当の世界の平和な姿ではないでせうか。自らに誇るべきものが何一つなく、お互ひの顔が見えないやうな世界に私たちは何の魅力も感じません。さういふ意味で、今日は日本独自の「国がら」を皆さんと一緒に考へて行きたいのです。

もつとも「考へる」と申しましたが、「国がら」といふのは考へてわかるものではないかもしれない。ものごとには勿論考へてわかるものもあるけれども、考へるだけではだめで、感へてはじめてわかるものもある。痛いとか温いといふのは感じなければわからないもの、親の愛情とか友情といふのもやはり、感じて知るものですね。さういふ意味で、私は「国がら」といふのも、勿論或る程度の説明はできるかもしれないけれど、結局は知識で学べるものではない、感じて知るもの、自分が体験してはじめてわかるものだと思います。それは何も日本だけのことではない。イギリスであらうとアメリカであらうとドイツであらうと、どの国でも、その国の国がらといふのは結局は感じて知るものです。では感じるといふが、何を感へるのか。私はそれは煎じつめればその国の歴史だと思ふ。歴史といつても歴史の知識ではありません。歴史にふれた時の感動です。その感動によつて私たちは国がらが何であるかを知るのです。従つて当然のことながら日本の国の国がらも歴史を離れてはあり得ない。で



はその日本の歴史において、他には絶対に求めることの出来ないもの、それは何か、それは矢張り日本の歴史を一貫して存在しつづけてきた天皇のご存在でせう。悠久の歴史の彼方から今日に至るまで変らないもの、その天皇の御存在を別にして、日本の国がらはありません。それは決して日本人の独りよがりで言ふではありません。それはとりわけ、昭和天皇の御大葬、今上陛下の御即位の禮の時、列席した外国の人々すべてが口にしたところでした。この、天皇を中心にして形造られてゐる日本の姿、それはこのやうに、当の日本人よりも、世界の人々が等しく認め、むしろ羨望の目をもつて見てゐる日本の国の国がらなのです。ではその国がらを知るためには、どうすればいいのか。今日はそのてがかりとして、今年の春、御成婚のよろこびの日を迎へられた皇太子浩宮さまをめぐる皇室の方々の御歌を中心にお話

してまいりたいと思ひます。先に述べましたやうに、日本の国の国がらはかくかくしかじか
のものだと、頭で理解するのではなく、皆さまにはそれらのお歌に表現された情感を通して
「感じとつて」いたゞきたいのです。

皇太子殿下御成婚と和歌

皇太子殿下の御成婚の時、いろいろなことが報道されましたが、そのなかで非常に興味深
いことが随分ありました。例へば稚子さまへのお妃教育といふのがあつた。さういふ教育が
行はれるのは当然考へられることですが、そのお妃教育が全部で五十時間行はれた、その中
の実に十時間、15の時間をかけて「和歌」の勉強が行はれたのです。宮中は優雅な場所だ
から、こんなこともあるのだらうといふ考へもあるでせうが、それにしても、その他にいろ
んな学問や芸の御修業もあるだらうに、和歌にかける時間があまりに長い。そこには和歌と
いふのが日本の文化の中に占める位置の大きさ、とりわけ皇室の中での和歌のもつ重要性が
示されてゐるのです。皆さんはこの合宿教育で和歌をよみ、さらに班に別れて、お互ひの歌
を批評しあつて、和歌のもつ深い意味を少しではあつても経験されたと思ひますが、さうい
ふ経験があれば、お妃教育で和歌の占める意味の大きさはきつとおわかりだらうと思ふ。和

歌の指導にあたられた岡野弘彦といふ先生も、和歌についていろいろお話しになつたあと、要するに和歌は日本人の魂のエッセンスであるといふことを仰言つたと聞きましたが、端的にいへばさういふことなのでせう。しかも雅子さまは実に熱心に和歌の勉強をされて、とても楽しかつたとお友達にも話していらつしやる、こんなことが新聞に掲載されてみました。このことはうつつかりしてゐると簡単に読みすごすところですが、後程また申し上げていきたいと思ひますが実は、日本の文化、皇室のあり方の、いはゞ核心に迫る問題だと思ふのです。さらに、御成婚の前日の夜、「贈書の儀」といふのが行はれた。「書」といふのはここでは和歌の意味なのですが、皇太子さまがお詠みになつた歌を薄桃色の紙にお書きになつて、それをお使ひの人が雅子さまにお届けする。そして雅子さまはその返しとして、御自分の歌を陛下におあげになるのです。さういへば日本の和歌のはじめは、『古事記』によれば須佐之男命の

八雲立つ出雲八重垣妻こみに八雲垣つくるその八重垣を

といふ新婚の歌だつた。婚礼の日のよろこびを歌ひかはすといふ伝統が悠久の昔から歌ひつがれて、皇太子さま、雅子さまのお歌の贈答につながつてゆく、思へば日本の伝統の深さ

のいみじき象徴です。

しかも同じ御成婚の前日、皇族方は、「青葉の山」といふ題でお祝ひの歌をおよみになつた。天皇、皇后両陛下は、その数々の歌をおよみになりながら、皇太子のご成婚前の一夜をすごされたと報じられてゐます。和歌、それは創作の体験のある皆さまにはよくおわかりのことと思ひますが、嘘をよんだらすぐにだめになつてしまふ。自分のありのまゝの心を五七五七七の調べの中に溶けこませてゆく、和歌をよむといふことはさういふ人間の真実に迫るころの営みといつていいと思ひます。それは決して単なる趣味の世界とか、風雅に遊ぶ遊びごとではない、心そのものを美しく、洗ひ清めながら鍛へあつてゆくいとなみなのです。さういふまごころの通ひ合ひの中に皇太子殿下と雅子さまは、御成婚の日を迎へられたのです。このやうな皇太子殿下の御成婚の儀式を一つとりあげただけでも、私たちはその中に美しい日本の国がらを垣間見ることが出来るのではないでせうか。

成人式（加冠の儀）まで

では皇太子殿下御誕生の時以来、皇室の方々がおよみになつたお歌を、レジユメに従つて読んでまゐりませう。まず第一首目は、昭和天皇のお歌です。

山百合の花咲く庭にいとし子を車にのせてその母はゆく

本当に絵のやうに美しい世界ですね。いとし子といふのは、勿論お母さま、美智子妃殿下にとつての「いとし子」でせうけれども、そこには天皇御自身の御孫、浩宮さまに対するいとしさがにじみ出てゐます。「その母はゆく」といふ結句から見ても、妃殿下の後姿をご覧になつてのお歌でせうか。遠ざかつてゆくお姿をいとほしみながら見守つていらつしやる天皇の慈しみにあふれたおこころが偲ばれます。当然のことながら、山百合の花も美智子妃殿下と重ね合せて味はふべきでせう。次は妃殿下のお歌

あづかれる室にも似てあるときは吾子わこながらかひな畏れつつ抱いだく

いま妃殿下の腕に抱かれてゐるお子様は、長い長い歴史をうけついで、万世一系、神代の世界を今に生きていらつしやるお方なのです。「あるときは」といふ表現で、はつと我にかへつた時の畏れ、慎しみ、それが生き生きした心の動きそのものとして私達に伝はつてくるのです。それは決してある固定化された思想の表現ではないのです。

かうして宮さまはすくすくとご成長になつて、二十歳、昭和五十五年、加冠の儀をお迎へになりました。加冠といふのは、平安時代の例へば伊勢物語にも出てくる「初冠(うひかうぶり)」、はじめて冠を身におつけになる、成人の儀式なのです。その年、昭和天皇は次のお歌をおよみになりました。

初春におとなとなれる浩宮のたちまさりゆくおひさきいのる

「たちまさりゆく」といふお言葉の中に、若竹のやうにすくすくと成長なさるお孫さまをたのもしく見守つていらつしやるまなざしが偲ばれます。

同じ年の新年、御父さまの皇太子殿下、今の天皇陛下のおよみになつたお歌は次の一首です。

成年に成りたる吾子と共に向かふ宮居の初空晴れ渡りたり

浩宮さまの身長もずつとお伸びになつて、お父さまと肩をならべていらつしやる。「成年に成りたる」「吾子と共に」といふお言葉にそのお姿が偲ばれます。宮居とは恐らく、宮中にお

祀りになつていらつしやる、賢所などの宮中三殿をいふのでせう。その宮居に足を運ばれる、そのかなたに広がる晴れ渡つた元旦の初空、希望にあふれた、生氣漲るお歌と思はれます。そしていよいよ二月二十三日、浩宮さまは成人式をお迎へになる。その時宮様ご自身がおよみになつたお歌が、その翌年、昭和五十六年の歌会始に発表されました。御題は「音」でした。その時の昭和天皇のお歌は

伊豆の海のどかなりけり貝をとる海人の磯笛の音のきこえて

そして皇太子殿下(今上陛下)は

うなりゆく車椅子の音きしる音籠球場は声援に満つ

のどかな伊豆の海の海人の磯笛の音、身障者の籠球大会で熱気あふれる場内を走りまはる車椅子のきしる音、いかにも御二方の御人柄さながらの御表現にまじつて、浩宮さまが成人となつて、はじめて歌会始に臨まれたお歌が披露されました。

それは成人式の情景そのものをお詠みになつた若々しい力あふれるお歌でした。

懸緒かけを断つ音高らかに響きたり二十歳はたちの門出我が前にあり

懸緒とは冠から垂れた白い紐、それが左右の頬を伝つて下におりてくる。そしてその二つの紐が首のところで結ばれて、その紐の余りが鉄でピシッと音を立てて切られるのです。静寂の室内に一瞬ひゞく鉄の音、その音を合図に二十歳の人生が始まる、その人生の転機の刹那を告げる鉄の音、「音」といふ御題にまことにふさはしい、はりつめた空気、はりつめた宮さまの英気が伝はつてくる、見事な御表現だと思ひます。たゞこのお歌は三句目の終りのところで切れてゐる。一首が二文になつてゐる。元来短歌では一首二文といふのは避けるべきで一首一文が原則です。といふことは全体の緊張が少しでもゆるんでくると一首二文になれば必ず腰くだけになつてしまふ。従つてもし一首二文になれば全体に、それを乗りこえるはげしい緊張が要求されます。このお歌の場合はまさにそれで、分裂しさうになる二つの部分を強烈に統一する力が、歌全体に漲つて、見事なお歌になつてゐる。まさに絶唱と呼んでもいい、浩宮さまの代表作だと思ひます。

御母君、美智子妃殿下の長歌

このお歌が発表されたのが先ほど申し上げたやうに昭和五十六年、それから五年経つた昭和六十一年十二月、皇太子殿下(今上陛下)御成婚二十五年を記念して両殿下御共著による御歌集『ともしび』が出版されました。私はその御歌集を手にして頁を繰つてをりましたとき、次のお歌を目にして本当に驚きました。そのお歌は皇太子妃、美智子妃殿下のお詠みになつたもの、壮大な長歌と一首の反歌からなる目のさめるやうなお歌でした。そこには浩宮さまのお歌さながらに、その加冠の儀のありさまがさらに細かに詠まれてゐたのです。

二月二十三日浩宮の加冠の儀とどこほりなく終りて

いのち得てかの如月の夕しもこの世に生れし みどりごの二十年を経て 今ここに初に
冠 浅黄なる童の服に 童かむる空頂黒幘 そのかざし解き放たれて 新たなる黒き冠
頂にしかとし置かれ 白き懸緒かむりを降り 若き頬伝ひつたひて 顎の下堅く結ばれ そ
の白き懸緒の余 音さやにさやに絶たれぬ
はたとせを過ぎし日となし 幼日を過去とは為して 心ただに清らに明かく この日より

たどり歩あゆまむ 御み祖ぢやみな歩み絵ひし 真ま直ちやなる大おほきななる道 成せい年ねんの皇み子ことし生なくる こ
の道に今し立たたす吾わ子こ はや

反歌

音ねさやに懸かけ緒を截きられし子の立てばはろけく遠とほしかの如ごと月は

如月は二月、あの昭和三十五年の二月二十三日の夕方この世に生をうけた幼子が、二十年の年月を経て今ここに、初冠の日を迎へた、浅黄色の童の服をお召しになつて。その次の「空頂黒幘」といふのは、帽子のやうな上の覆ひのない額あてのやうなもの、前の方が三つの山形をしたもので後ろで締める頭巾と考へていたゞいていいと思ひます。それは童児がかぶるものですが、それを解き放つて、新しく黒い冠をかぶる。それが加冠の儀の中心をなすものです。かうして新しい冠が頭の頂きにしつかりと置かれ、白い懸緒、先ほどの宮さまのお歌にあつた白い紐です。その紐が若い宮さまの頬を伝ひながら、顎の下で堅くしつかりと結ばれる。そしてその紐の余つた部分が鉄で音も「さやかに」切られる。まさしく宮さまのお歌と全く重なりあふ情景ですね。「さやか」とはくつきりといふ意味、先程も申し上げました、静寂の室内、はりつめた空気を一瞬破るかのやうに鉄の音が「さやかに」ひびくのです。ここで前段が終ります。後段にうつる間にはシーンとした静寂の、

沈黙の時間が音もなく流れてゆく、そのやうによむべきでせう。その間、妃殿下のお心の中には遠い過去から、今に至るまでのさまざまな思ひ出が浮んだに違ひない。その感慨をうけて後段がはじまるのです。

「はたとせを過ぎし日となし」、その二十年はすでに過去となり幼い時代とははつきり別れを告げて、いま宮さまは一人の男子として心清らかに、そして明るく、新しい一步をふみ出されるのだ。「御祖^{みや}みな歩み給ひし」、歴代の天子さますべてが歩んでこられた「真直なる大なる道」を、成年となつた皇子として生きてゆかれる、その門出にいま吾が子は立つてゐる。最後の「はや」といふのは、それまでのすべてのおもひを、その一語に凝縮した深い詠嘆のことばです。そこに立つてゐるのは吾が子ではあるけれども、すでに吾が子ではない。「立たす」の「す」はいふまでもなく尊敬の助動詞ですが、吾が子に対する尊敬の「す」といふこの一字には決して見すごすことの出来ない、重い意味がある。吾が子の姿に、歴代の天皇さまのお姿がダブって見えてくるのでせう。さういふおもひのこもつた「す」だと思ふのです。

かうして反歌にうつつてゆくのですが、「反歌」とは長歌の全体を集約するか、長歌の中心となる部分をくりかへすか、あるいは、長歌で詠めなかつたところに、別の方から光を当ててよむか、いろいろな形で長歌を補足し完成させてゆくのですが、ここでは長歌全体

の流れを逆に遡って、宮さま御生誕の日にすべてのおもひが集約されてゆくのです。

音さやに懸緒かけをき截られし子の立てばはろけく遠しかの如月は

「はろけく遠しかの如月は」、あの日から二十年、民間から皇太子妃としてお立ちになつた御労苦、その中で幼いのちを守りつゞけてこられた日々、それがいま見事に報いられて、成人の儀式を迎へられるこの日のよろこび、それが実に緊張した調べに歌ひあげられてゐる。本当に稀有なご表現だと思ふのです。ここには凡百のジャーナリズムが報道しつゞける「開かれた皇室」の姿などとは全く次元を異にし、比較を絶した、それこそ、日本の国がらの威厳と呼ぶべき世界がゆるぎなく存在してゐるのです。

なほこの長歌の中に書きとゞめられた「心たゞに清らに明かく」といふお言葉についても一つ皆さんのお耳に入りたいことがあります。それは昭和五十六年、このお歌の翌年ですが、十月八日、妃殿下御誕生の日を前にして行はれた記者会見の折の妃殿下のお言葉です。その時記者団から「今後、皇室のあり方は変つていくとお考へですか」といふ質問が出されましたが、その時妃殿下は次のやうにお答へになられたのです。

「時代の流れとともに、形の上ではいろいろな変化があるでせうが、私は本質的には変ら

ないと思ひます。歴代の天皇方が、まづ御自身のお心の清明といふことを目指されて、また自然の大きな力や祖先の御加護を頼まれて、国民の幸福を願つてゐらしたと思ひます。その伝統を踏まへる限り、どんな時代でも皇室の姿といふものには変わりはないと思ひます。」

このお答へは実に大切な日本の歴史の根幹にかかはるお言葉と思ひますが、その中で妃殿下は歴代天皇のお心のもち方を長歌の中で示された「清らに明かく」といふ言葉をそのまゝ、「清明」といふ言葉で表現してをられるのです。妃殿下のお心の中には歴代の天皇にうけつがれてきた思想、その中核として、この「清明」といふ言葉が鳴りひびいてゐたのでせう。長歌の中の「清らに明かく」といふお言葉の背景を、この記者会見の折のお言葉を通して深く味はつていたゞきたいのです。

イギリス御留学と立太子礼

では次に浩宮さまが、昭和五十八年から六十年にかけてイギリスに留学された時のお歌にうつりませう。昭和五十八年の大晦日、除夜の折に、美智子妃殿下は

外国とくぐにに吾子離れすむこの年の夜のしづけさ長くおもはむ

と詠まれました。御子様とはじめて離れ離れに新年をお迎へになる淋しき、その夜、心の中に噛みしめた深い思ひはいつまでも大切にしたいと詠まれたのです。又昭和天皇には

夏庭くれないのみに紅の花さきたるをイギリスの浩宮も見たるなるべし

といふお歌があります。紅の花といふのは、詞書きでベニセイヨウサンザシといふ花だといふことがわかりますが、その花が皇居に咲いた、それを見てお詠みになつた一首です。飾りけのないお人柄の慈愛あふれるお歌ですね。そして浩宮さま御自身は、テムズ川で行はれたオックスフォードとケンブリッジの二つの大学の伝統的なボート競技を御覧になつておよみになつた次の歌が昭和六十一年、お帰りになつた翌年の歌会始の折に発表されました。御題は「水」でした。

オール手に艇きん競ひ行く若人の影ゆれ映るテムズの水に

影が映つてゐるといふだけでなく、「ゆれ映る」と「ゆれ」の一語が加はつたために全体に生

き生きした情景の躍動する、これもまた実に若々しいお歌だと思ひます。

なほ陛下は、イギリス留学の折の思ひ出を『テムズとともに』といふ一冊の書物にまとめていらつしやいます。その中にお歌はごさいませんが、御文章全体が実に爽やかで、若々しい。感情に流されることなく、物事を実に正確に見ていらつしやる、しかも文章全体に温いものがしみじみと感じられる。曾野綾子さんも書いてをられました。随筆として当代一流の作品だと思はれる文章です。この正確で誇張がないといふこと、それはまた日本の和歌の、とりわけ皇室に伝へられる和歌の大切な伝統なのですが、それに通ふものを、この一冊の書物に拝することができるのは、私も国民にとつて本当に有難いことだと思ふのです。将来天皇のお位におつきになる方、さういふ方が海外で長い月日をお送りになるといふことは日本の歴史はじまつて以来の出来事なのですが、その未曾有の御経験を、このやうにすがすがしい文体で書きとどめ、歴史に残されたといふことは実に重大な、文化史上の画期的な事件ではあるまいか。一般にはそれほど問題にしません。私には西欧文化の衝撃の渦の中にある日本が今後とるべき道筋を照らし出していた、いたといふ点で、極めて重要な文献であると思はれてならないのです。

時間が迫つて参りましたので、次に平成三年の二月二十三日に行はれた立太子禮についてのお歌を御紹介してをきませう。その時の天皇陛下のお歌は「春」と題された次の一首です。

中庭に白くれないの梅咲きてるやわざの日は春の氣満つる

「るやわざ」とは漢字で書けば「禮業」、嚴肅な儀式といふ意味です。新宮殿の中庭は白石が敷きつめられただけのすがすがしいお庭ですが、その西南には白の、東北には紅の梅の木だけが植ゑられてゐる。いまでもその白と紅の花が咲いて春の氣の満つる宮殿に、立太子の儀式が行はれる、実に清楚で、しかも華やかなお歌です。

皇后陛下にも次のお歌があります。

赤玉は緒さへ光りて日嗣みこなる皇子とし立たす春をことほぐ

「赤玉は緒さへ光りて」といふのは『古事記』の中にある、豊玉毘売が日子穗々出見命に献げられたお歌「赤玉は緒さへ光れど」をふまへておよみになつたものです。このお歌については、広瀬誠先生のすばらしい御感想がありますので引用させていたゞきませう。

「赤玉は赤く輝き、その緒までも輝いて、いま徳仁親王なるひとが正式に日嗣の御子とおなりになる春を、神話伝承の語を用ひてお祝ひなされたのである。古来「玉の緒」は「魂の緒」、いの

ちを象徴するものとされて来た。連綿悠久の皇統のいのちの緒を嗣ぎます太子の赤々とした輝きといったイメージが、この御歌に豊かに揺らめいてゐるのである。」

皇太子殿下のお歌四首

以上で皇太子殿下をめぐるお歌についてのお話は終わりますが、最後に殿下ご自身がおよみになつたお歌、それはこれ迄引用した以外にも数多く発表されてゐますが、その中の幾つかを御紹介しておきませう。最初に掲げましたのは殿下が数へ年で十二歳のとき、小学生の時の御歌です。

残雪は安^あだたら山かばんだいか夕やみせまるひばら湖の岸

福島県、会津の東北に聳える磐梯山、安達太良山、そのもう一つ北に桧原湖といふ湖があります。その岸辺にお立ちになつて、遠く南の山々を望みながら、あの雪の残つてゐるのは安達太良だらうか、磐梯だらうかと問ひかけてをられる。まだ小学生の時の幼い粗削りな歌ながら大自然に堂々と呼びかけられた実に力に満ちた、すでにこのお年にして王者の風格

のあるお歌と思はれ、深い感動をおぼえます。

次は昭和六十三年のお歌、伊勢の御遷宮の折、御用材の檜を、お社に運びこむお木曳といふ勇壮な行事があるのですが、殿下は昭和六十二年五月その行事を親しく御覧になつただけでなく、自ら人々の中に交り、威勢のいい木遣音頭に合せて、そのお木曳の綱を手につつて、その儀式に加はられました。その時のお歌、これも歌会始のお歌です。お題は「車」でした。

お木曳の車の音色高らかに響きわたりぬ初夏の伊勢路に

青葉の緑がきらめく、初夏の太陽のまふしさまでがありありと感じられるやうな、いのちあふれるお歌ですね。同じく歌会始で平成三年「森」といふお題のお歌

五箇山をおとづれし日の夕飼時森にひびかふこきりこの唄

五箇山は富山県の、ずっと南の山奥に入ったところ、「こきりこ」とは、よく枯れた竹を七寸五分ほどの長さに切つたもの、その竹を両手にもつてカチカチと打ち鳴らして拍子をとる」素朴な民謡です。民衆の中に溶けこんで民謡を楽しんでいらつしやる、殿下の笑顔が彷彿と

するやうなお歌です。そして最後が今年の歌会始、「空」といふお題でよまれた次の一首です。

大空に舞ひ立つ鶴の群望む幼な日びよりのわが夢かなふ

これは実は平成三年、北海道にいらつしやつた時の印象をお詠みになつたお歌のやうですが、歌会始が行はれたのが一月十五日、その時はすでに皇太子殿下御成婚内定の吉報が全国を馳せめぐつてゐた時だつただけに、このお歌は長い間の夢のかなつた殿下のおよろこびと重ねあはされて、大空に舞ひ上る鶴の優雅な羽ばたきと一緒に国民の胸に強く焼きついた一首でした。

「帝室は独り萬年の春にして」

以上皇太子殿下を中心に皇室の皆さまがたのお歌を一緒に読ませていただきましたが、私は表題にか、げました「日本の国がら」といふのは、この中にすべてこめられてゐる、「すべて」といふのは言ひすぎかもしれませんが少くとも、このことを別にして日本の国がらを考へることは出来ないと思ふのです。昭和天皇を中心として、皇室の皆さまがたはすべて歌

をおよみになる、歌をよむことの意味はくりかへし申し上げてをりますやうに、ありのままの心の動きを、正確に言葉で表現し、それを五七五七七の形にととのへてゆくことです。すなはち歌をよむといふことは、自分の心と直面することです。そして嘘のない、誇張のないところ——まごころを磨いていくことです。折にふれてそのやうな歌をよみかはしてお互ひの心をたしかめあふといふ皇室のお姿、そこに他に類を見ない日本の皇室独自の世界がある。皇太子妃雅子さまのお妃教育に和歌が大変重視された意味はそこにあつたのです。かうして清く明るく生きてゆく、それが皇后陛下のお歌にいまじくも表現されたやうに「御祖みな歩み給ひし、真直なる大きな道」につながつてゆくのです。日本の皇室は、「かくあるべし」といふやうな形で国民を指導しようとはなさらない。さうではなく、自ら清く明るく生きることによつて、おのづからにして国民の心がそこに拠りどころを見出す、さういふところに皇室のあるべき姿を考へてをられるのではないでせうか。

福澤諭吉に『帝室論』といふ一冊の著述があります。この文が世に出たのは明治十五年、その前年国会開設の詔勅が出されたその翌年ですが、福澤諭吉は国会が開かれるのは大切なことではあるが、そこでお互ひが党利党略によつて動けば、国そのものの分裂になりかねないと憂へ、国会開設に際しては、その遠心力に匹敵する求心力を強固にすることが不可欠の条件だ、その求心力の所在、それは日本ではいふまでもなく皇室、それ以外にはないと考

へ、切実なおもひをこめて筆をとつたのが、この『帝室論』といふ一冊の書物でした。

「我帝室は日本人民の精神を収攬しうらんするの中心なり。其功德くどく至大なりと云ふ可し。国会の政府は二様の政党相争ふて火の如く水の如く、盛夏の如く嚴冬の如くならんと雖も、帝室は独り萬年の春にして、人民これを仰げば悠然として和氣を催す可し」

「国会の政府は二様の政党相争ふて火の如く水の如く」今の日本の状況そのまゝ、です。だがお互ひにいかにかに相争ふとも、たゞその中心にある「帝室は独り萬年の春にして」——皇室だけはいかなる党利党略が横行しようとも「萬年の春」なのです。「中庭に白紅の梅咲きて」、中庭は単に宮殿の中庭ではない、日本の国全体の中庭です。そこには常に「白紅の梅」が咲き、そしてのびやかな「春の氣」が満ちてゐる。「和氣」、和やかな空氣が自らにして醸し出されてゐる。この帝室の存在あればこそ、日本といふ国は分裂を免れ、最後の安らぎの場所を得ることが出来るのです。それは諭吉の時代も、現代も全く変らない。今度細川内閣が成立しましたが、首相、閣僚をはじめ、現代の政治家にそのことが本當にわかつてゐる人が一体どれだけゐるだらうか。総理大臣が任命される時には、天皇による親任式が行はれます。それを單なる形式だと思つてゐる人がいかに多いか。だが決してさうではない。天皇から総

理として任命されるされる、その僅かな時間の儀式の中に実は日本の国のあるべき姿のすべてがこめられてゐるのです。その儀式によつて日本は支へられてゐると言つても過言ではない。それはもし親任式ぬきで自分勝手に総理が自分の席についたら――さう考へるだけで充分です。その時は日本は支離滅裂、すでに国家の体をなさない乱脈に陥ることは目に見えてゐます。

この合宿教室にも度々来ていたゞいた、著名な数学者岡潔先生は「日本に天皇制あるは、庭に梅の古木あるがごとし」と仰言つた。またここでも庭と梅ですが、そこに日本の国がらのすべてがある。それがわからなくなれば、日本は大変なことになる、そのことを福澤は本当に憂へたのです。しかしその福澤の憂ひは現実のものになつてきつつある。さう思はれてならないのです。

では最後に岡先生のもう一つの言葉を紹介して終りにいたしませう。

「それぞれの民族には歴史があります。これは変へられませんが、春の野には、すみれもあれば、れんげもある。いろいろな花、すみれならすみれ、れんげなられんげをきれいだなと思はなければいけません。このところが分からなければ、春の野のうららかさとか、のどかさといふものはあり得ない。」

最初の「それぞれの民族には歴史がある」といふ、「歴史」を「国がら」と置きかへていたゞけば、今日、私が申し上げたいと思つたことはきつとおわかりいたゞけると思ひます。



講

話

伝統について

東京大学名誉教授・文学博士

宇野精一



ヤマブキ

「文化」と「文明」の違い

文化としての言語

日本人と和歌

伝統のあるべき姿

今日はお話したいことは沢山ありますけれども、限られた時間でありますので、一つだけ申し上げたいと思ひます。私は自分がやつてゐる学問が古いことを対象としてゐるからかもしれません。が、「伝統」といふものが大変好きであり、大切だと思つてゐます。一口に伝統と言ひましても良い伝統もあれば、例へば「五箇条の御誓文」の中で指摘されてゐるやうな「旧来の陋習」といふものもあるわけです。さういふ悪いものは改めなければいけないのですけれども、では一体何によつて良い、悪いといふことを分けるかといふことはなかなか難しいことだと思ひます。

「文化」と「文明」の違い

伝統といふものは別の言葉で言ふと「文化」です。文化といふことがつまり伝統なのです。文化に似た言葉に「文明」といふのがありますね。よく似た言葉ですが、文化と文明は違ふものです。それは英語で考へてみても文明は“civilization”、文化は“culture”といふわけで違ふのです。それを昔の日本人が「文化」、「文明」といふ風に翻訳したわけです。ですから文化とか文明といふ言葉は外国から来た言葉であり概念であると思ひます。

今更言ふのもおこがましいが、文明といふのは普遍的な人類の産物であります。「科学文明」

などといふのは、その代表的なものです。例へば自動車はアメリカのフォードが發明したし、鉄道はイギリス人が、無線電信はイタリーのマルコーニといふ人が發明したわけですね。ところがアメリカ人が發明しようが、イギリス人が發明しようが、イタリー人が發明しようが、それは一度出来上がったものはこの民族、どこの社会にも素直に抵抗もなしに受け容れられてゐますね。文明といふものは、さういふものです。

これに対して「文化」といふものは伝統に即したものであり、民族の生み出したものだと思ふのです。ですから簡単に文化といふけれども、ある民族の生み出した文化といふものは、他の民族社会には、さう易々とは受け容れられないものなのです。尤も文化といつても色々ありまして、比較的普遍性を持つたものもあるし、非常に特殊な、その民族なり社会なりに特有な性質を持つたものもあるわけですが、いづれにしても文化といふのは、さういふ民族、伝統に結びついたものであり、一方文明の方は普遍的なものであると私は考へてゐます。

文化としての言語

さて今申し上げました通り文化といふのは民族と結びついてゐるのですから、当然伝統的であります。ですから「伝統」と「文化」は、一つのものとして「伝統文化」と言つてもい



いのです。そして、さういふ文化の一番代表的なもの
のは「言葉」、「言語」だと思ひます。この文化の代
表である言葉の正邪を判断する際は、伝統に根差し
てゐるか、それともさうでないかといふところから
見るべきです。正しい言葉は伝統的なものなのであ
り、伝統的でない言葉は間違つてゐると思ふのです。

言葉といふものは文字に表しますと固定しますけ
れども、音声を通じてゐる間は不安定なものですか
ら、長い年月、或いは地域によつて変化致します。
言葉は伝統的なものでありながら、その変化は必然
的なものであつて、時代とともに變つていきます。
場合によつては三百年、五百年の時を経て變つてい
くものもあるでせうし、五十年、百年で變化する場
合もあるでせう。最近のやうにラジオとかテレビな
どによつて始終音や言葉が耳に入つてくる。殊に民
間放送テレビが始まつてからはコマーシャル、広告

が入る。広告といふのは人の耳目をそばだたせる必要がありますので、わざと変つたことを言ふ。それが面白いといふことで皆が真似をする。かういふことで最近言葉が非常に早く動いてゐると思ひます。

そこで、そのやうに言葉が動いてゐるものですから、かつては間違つてゐると言はれても、その後さういふ言葉が定着してしまつて、間違つてゐると言へなくなるのですね。さうした例は幾らでもありますけれども、例へば「とても」といふ言葉がありますね。私どもが子供の頃はちやうど変りつつあつた時代でして、私どもが「とてもいい」などと言ひますと、親から叱られたものです。「とても」といふのは、「とても出来ない」とか「とても行かれない」とか言ふやうに次に否定の言葉がこなければ、「とても」といふ言葉は使つてはいけません。しかし段々と變つてきた。もちろん今でも次に否定を伴ふ言ひ方は生きてゐますけれども、「とてもいい」などといふやうな言ひ方も別に抵抗がなくなつてしまひました。最近ではさういふ風に言葉が變つていくわけです。

芭蕉が言つたのださうですが、「不易流行」といふ言葉があります。「不易」とは変らないといふこと、「流行」とは變化するといふことです。この世の中には變化するものと變化しないものがあるといふのです。ですから變化しないものの中に變化するものがあり、變化するものの中に變らないものがあるといふのが、今お話ししてゐる伝統とか文化とかの中に見ら

れると思ひます。

日本人と和歌

皆さんは和歌を作られてゐるさうですね。それはとてもいいことだと思ふのです。和歌こそは日本の伝統の中心みたいなものです。和歌は須佐之男命の頃から始まつてゐるので二千年ぐらゐの伝統があります。そんなに長い間同じ民族、同じ言語の中にあつても形が変わらず、そのままの形で作られてゐる歌といふものは、世界中に例がないんださうです。さういふ意味で和歌といふのは大変素晴らしいものです。

また日本人といふのはオール歌人と言つてもいいくらゐで、日本人で歌の作れない人はありません。誰でも作れるのです。ただ慣れないうちにはあまり上手ではないといふことはあるかもしれませんが、しかし作らうとして作れないといふことはない。何しろ三十一文字を並べればいいんだから誰でも作れる。かういふものは世界中に例がない。だから私は歌といふものは日本の伝統文化の中心だと思ふのです。

その和歌の伝統を一番保持していらつしやるのは実は皇室であります。今上陛下、皇后陛下は勿論のこと、先帝陛下もさうでした。殊に明治天皇は歌聖と言はれますが、六十年の御

一生の間に十萬首もお作りになつたのです。一寸考へてごらん下さい。五、六歳からと考へても五十五年、五十五年の間に十萬首ですよ。大変な数です。とても真似など出来ませんけれども、さういふお方もいらつしやる。和歌ばかりではありませんで、その他日本の古来の伝統を宮中はきちんとお守りになつていらつしやるのです。伝統を大切になさる宮中の中にも勿論「不易と流行」はあるわけですが、一番變つてはならないものは「お祭り」のことです。

伝統のあるべき姿

私は先日、掌典(宮中のお祭りをつかさどる役人)の或る一人から洩れ伺つたことなのですが、宮中のお祭りといふのは大変なのださうです。さういふ大変なお祭りを天皇様自らなさることもあるし、御代拝と言つて掌典なり侍従なりが代つてお務めする場合もあるやうです。とにかくお祭りを大切にしていraftしやる。さうしたお祭りとか和歌の道の伝統はけつして變つてはだきたくないし、是非これだけは伝へていただきたいと思ふのです。

形式的なことは變つたつていいのです。例へば服装ですね。服装は明治の時に西洋風の服装を明治天皇がお採り入れになつたし、現在でも宮中では洋服をお召しになつてゐる。かう

いふものは変つてもいいのです。何も平安朝みたいに衣冠束帯で笏を持っていらつしやる必要はないと思ひます。お食事だつて同様です。普段は非常に質素なお食事をなさつてゐると承つてゐますが、やはり昔とは変つてゐる筈です。さういふものは変つても構はない。変つてはならぬものと変つていいもの、或は変わるべきもの、さういふものが伝統であり文化であるわけです。

皆さんは、この合宿で和歌を詠んで、伝統を伝えていく体験をしてをられるわけです。もし今回初めて和歌を作る方がいらつしやるとすれば、これを契機に折にふれて和歌を詠むように努めて下さい。これは人間形成の上にも大変重要なことでありますので、どうぞ御努力をいただきたいと思ひます。

■ 短歌入門

短歌創作導入講義

日商岩井(株)ガス・石炭木部副本部長

澤部 壽 孫



シジュウカラ

はじめに（短歌との出会ひ）

短歌の意義

短歌の作り方

連作短歌

短歌相互批評について

むすび

はじめに (短歌との出会い)

皆さん、今日は。只今ご紹介頂きました澤部壽孫でございます。日商岩井に勤務し、主としてインドネシアの液化天然ガスを輸入する業務に携はつてをります。専門歌人でもない一商社マンが、短歌創作導入講義を担当することに、皆さんは変に思はれるかも知れませんが、皆さんに「短歌とはこんなに素晴らしいものなのか」あるいは「よし自分も短歌を創作してみよう」と思つて頂けるやう頑張りますので、しばらくの間我慢してお聞き下さい。

昨日菅原先生が水産高校の高校生達の歌を紹介されましたが、ツッパツた高校生でもよく教へれば短歌は作れる、と皆さん思はれたことと思ひます。日本人であれば誰でも歌を詠める、その意味では半分以上私の講義の目的は達成されてゐると思ひます。

昭和三十五年、大学一年の時に初めて雲仙における合宿教室に参加した時には、講義の内容の殆どを理解出来ないままに四泊五日の合宿教室を終へたと思ひます。ただこの合宿教室に参加して貴重な体験をしました。防人の歌を紹介されたことです。

○防人の歌

父母が頭かしらかき撫なで幸さきくあれて言いひし言葉ことばぜ忘れかねつる

忘らむと野^の行き山行き我来れどわが父母はわすれせぬかも

わが母の袖^{そで}もちなでてわがからになきしこころを忘らえぬかも

唐^{から}衣裾^{ころもすそ}にとりつき泣く子らをおきてぞ来ぬや母なしにして

廬^い垣^{くまど}の隈^{くまど}所にたちて吾^わ妹子^{ぎもこ}が袖^{そで}もしほほに泣きしぞ思はゆ

今日^{けふ}よりは願^{かへり}みなくて大^{おほ}君^{きみ}の醜^{しこ}の御^み盾^{たて}と出で立つわれは

『短歌のすすめ』百九十六頁をご参照下さい。防人とは東国の農家の次男、三男が難破に

集合して筑紫に国の守りに赴いた人達を指します。

父母^{ちち}が頭^{かしら}かき撫^なで幸^{さき}くあれて言^いひし言葉^{ことば}せ忘れかねつる

東国の兵士の歌ですから訛^{まが}があります。「幸^{さき}く」は「幸^{さき}く」、「言^い葉^はぜ」は「言^い葉^はぞ」です。

一読してこの歌の作者は若い防人すなはち少年兵であることが分かります。父母が自分の頭

を撫^なでながら万感の思^しひを込めて「幸^{さき}せであつて欲しい」と思つた言葉が忘れられない、と

いふ歌です。この歌は自分の気持ちをありのままによんでゐます。自分は少しも悲しくない

んだ、喜び勇んでいくのだといふ歌が本当の人間性の表現なのでせうか。防人の歌には「自

分は大君に召されて行くのだから悲しくない、喜び勇んでいく」といふやうな歌はありません。

忘らむと野^の行き山行き我来れどわが父母はわすれせぬかも

十日十月十日



何日もあるいは何十日もかけて野を越え山を越えて来た、国の護りにつく以上雄々しく任地に赴きたいと思ふけれどもどうしても自分の父、母のことを忘れられないと言ふ歌です。

わが母の袖もちなでてわがからになきしころを忘らえぬかも

自分の袖にとりすがつて自分を抱き締めて泣いたお母さんの心が忘れられない。

唐衣裾からころもすそにとりつき泣く子らをおきてぞ来ぬや母なしにして

この歌は父親の歌です。自分の裾にとりすがつて泣き叫んだ子供たちを家に残して来た。その子供たちには母親がいない。胸がつまります。

廬垣いぼがきの隈所くまどにたちて吾妹子わがもこが袖そでもしほほに泣きししぞ思はゆ

恐らく新婚の夫の歌であると思はれます。生ひ茂

つた廬の端に立つて袖もぬれるほど泣いて見送つてゐた奥さんの姿が思ひ出される。ありのままの気持ちをもそのまま三十一文字に託してゐます。四首ともに、涙なしにはよめない、痛切の体験が歌はれてゐます。防人達のお陰で現在の日本があることも忘れてはいけないことせう。「万葉集」の歌は天皇が作らせた歌である、権力が編纂した歌集であるとか言ふ人達がりますが、これらの防人の歌にふれるとそのやうな説が如何にでたらめであるかがお分かりになると思ひます。何も教育を受けていない防人達がこのやうに私達の胸を打つ歌を遺してゐる。短歌のことを「しきしまの道」とも言ひますが短歌とは日本に脈々として続いてきてゐるかけがへのない文化であると思ひます。

今日よりは顧みなく大君の醜おおきみの御盾みたてと出で立つわれは「短歌のすすめ」(一九九頁)

「醜」とは醜いではなく勇猛であるといふ意味です。断ち難い私の心に背いて陛下の勇猛な守護兵として出で立つのだといふ決意の雄叫びのやうな表現です。聖徳太子は「背私向公」といふ言葉を遺されてゐます。この言葉は私情を滅して公だけに尽くす人間になれと要求してゐる言葉ではありません。自分を滅ぼして公に尽くすことは不可能なことです。私情は誰にもあります。私情があることを認めた上で、その私情を乗り越えて公に尽くすことを聖徳太子は言はれたのです。防人はまさに「背私向公」の人生を生きたのであり、だからこそ胸を打つのです。戦争中に使はれた「滅私奉公」といふ言葉は「背私向公」と全く相反するも

のです。

○松吉正資さんの歌（学徒出陣の学生の歌と友情の歌）

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな

数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらめや

うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

松吉正資さんは瀬戸内海の柳井の南にある大島のご出身です。ふるさとの人達が自分にかけてくれる情けが出征する自分にはひとしほ身に沁みる。自分は取るにと足らない人間であるが自分を見送ってくれる人達の思ひに何とかしてこたへたい。「常世ゆくまで」はあの世に行つてもといふ意味です。自分が戦死したとしても、島の人達、身内の人達、友達から頂いたみ情けは忘れないといふ歌です。防人と同じ心が歌ははれてゐます。旧制山口高校から東京帝国大学を通じての松吉正資さんの親友であられた寶邊正久さん（本会副理事長で現在下関で建設業を営んでをられる）が昭和三十七年に靖国神社に参拝された時にこの最後の歌が奇遇にも鳥居の前に掲示してあつたさうです。その時に寶邊さんがお詠みになられた歌が次の歌です。

○靖国神社にて松吉正資さんの歌をみて（昭和三十七年） 寶邊正久

わが友と再びここに会へるかとただよみかへすその名そのうた

忘れじときみはらからによせにける思ひはいまもわがむねにいく
むらがりてまた急ぎゆく人のなかにうたかきうつす人もありけり
まみすずしくわれにはほゑみ立つ友をおきて別るる心地するなり

車はせて道急げども去りがての思ひつきざり靖国神社

意味の分からない言葉は一つもありません。松吉正資さんの遺歌をたまたま靖国神社で御覧になりお惚びになられた寶邊さんの友情のお歌には胸内の底からの感動を覚えます。

短歌の意義

○自分自身の体験を表現して、もう一度その感動を味あふことが出来る。

痛切な体験をしてゐても時がたてば感動は薄れて来ます。自分が得た感動を正確に表現することは意外に難しいものです。自分の気持ちを正確に見つめ表現する修練にもなります。

○人生を豊かにし、逆境に強くなる

防人の歌をよむと感動するといふことは自分の人生が豊かになるといふことですし、このやうな防人を偲ぶことにより困難な状況に立ち向かふ勇気が湧いてきます。私の拙い体験ですが、折々の困難な状況の中に自分自身を励ましてくれたのが次の三首の歌でした。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさね守る大和島根を（三井甲之）

極まればまたよみがへる道ありて生命果てなし何かなげかむ（川出麻須美）

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ（明治天皇）

このやうな良い歌を折りに触れて詠むと心の底から喜びが湧き上り、逆境に立ち向かふ勇氣が出て来るのです。皆さんも好きな歌を覚えられたら良いと思ひます。

○歴史に連なる喜び

防人の歌、歴代天皇の御歌、源実朝の歌、戦国武将の歌、幕末志士の歌、大東亜戦争戦没学徒の歌等、日本の歴史上私たちの祖先が遺した歌は数多くあります。それらの歌に触れるとは自然に歴史上の人物との「共感共鳴の世界」が現出し、そのことは祖先の心、歴史を知ることにつながります。歴代の天皇の御歌は時間の都合でご紹介出来ませんが、天皇制がただかうだといふ前に是非歴代の天皇の御歌にふれて頂きたい。明治天皇は九万三千余りの御歌をご生涯にお詠みなつていますが、明治三十七年の御歌に「歌」と題する次の御歌がございます。

ひとりつむ言の葉ぐさのなかりせばなにに心をなぐさめてまし（明治三十七年）

歌がこの世になければ何で自分の心を慰めることが出来るのだらうかとの意味ですが、一日平均三十七首もの御歌をお詠みになられた明治天皇が歌をどれだけ大切になさつていらし

たかがよくわかります。この明治天皇の歌を葉にして大東亜戦争に学徒出陣した多くの学生がらりましたが、その中で、加藤敏治さんが昭和十九年（当時二十五才）に次の歌があります。

歌（十首より抜粋）

加藤敏治（昭和十九年）

語るべき友もあらねば胸内の思ひをとどむしきしまの道に

胸内にひそみし思ひしきしまの道にあらはし一人なぐさむ

一人つむ言の葉ぐさのなかりせばとよみたまひけり明治のみかどは

かしこくも明治のみかどの大御うたかしこみまつり我もうたよむ

まごころをこめてうたへばそのうたにこもりてありけり人の生命は

月花のもてあそびならず我がうたはこの世に生きし生の記念ぞ

歌についての加藤さんの思ひがよく表れてゐて、まさにここには歴史を知り祖先の思ひに

連なりつつ雄々しく生きた人生が歌はれてゐます。

○共感共鳴の世界

レジュメに載せた『澤部通信』の養田誠一さん（三十二歳）、竹内孝彦さん（三十歳）の歌に対する北島道治先生（七十九歳）の歌は歌を通じて共感共鳴の世界が現出することをお分かり頂ければと思ひます。割愛いたしますが後でお読みいただければと思ひます。

○歌に人柄が表れる

汝もまた草の枕や夕雲雀すそ野の原におちて鳴くなり (上杉謙信)

のぼるとも雲に宿らじ夕ひばりつひには草の枕もやせむ (徳川家康)

裾野の原におちて鳴く夕雲雀を見て「お前も草を枕にして寝るのだなあ」と呼びかける謙信の歌はまさに自然と一体になつてゐます。家康の歌は「夕ひばりは雲の上までのぼつたとしても最後には下りてきて草を枕にせざるを得ない」と理窟を詠んでゐて何の感動もありません。同じ夕雲雀を詠んでも上杉謙信と徳川家康の人柄が如実に表れてゐます。

短歌の作り方

○一首一文：「忘らむと野行き山行き我来れどわが父母は忘れせぬかも」を一首二文にすると「忘らむと野行き山行き我来たり、わが父母は忘れせぬかも」となりますがこれでは思ひが分断されます。歌はあくまで一首一文が原則です。

○題材は何でも良いが、自分が体験あるいは自分の心が動いたものを素直に詠む

正岡子規は「歌よみに与ふる書」に先づ「感情が歌の基本である」と述べてゐます。即ち「自分が直接経験した感情を素直に詠め」、更に「理屈をよむな、誇張するな、嘘をよむな」と述べてゐます。嘘を詠んだりオーバな表現は慎んで下さい。

昨年合宿教室での歌を例に挙げて説明します。アルバイトの高校生の歌に「情熱を強めたぎらせはるばると出現したる若者二百」がありました。みなさんと同じ合宿教室への参加者を作者が期待と驚きの眼でみてゐる、素直な気持ち表れてゐます。「思うこと包み隠さずありのまま話せることの何とうれしき」この歌には常日頃自分の思つてゐる事を包み隠さず話すことが難しいのに合宿教室でありのままを話す事が出来たといふ作者の喜びが伝わってきます。「思う」は「思ふ」です。

○正確に詠む：「高原の風に吹かれてゆつたりと寝ころぶわれは空っぽの心」

「空っぽの心」のをそのまま解釈すれば「空しい心」となります。ところがこの歌を何回もよんでみると作者の安らいだ気持ちが表れてゐる歌のやうに思へます。「高原の風に吹かれてゆつたりと寝ころびおれば心安らく」と直しましたら後で作者にその通りであると感謝されました。歌に表現された思ひを皆が心を澄まして読み取らうとするのが歌ですから自分の気持ちを正確に表現してください。

○用語と仮名づかひ：用語は浅薄な言葉や卑俗な言葉以外であれば日常語も使つて結構です。仮名づかひは今回は間に合はないと思ひますが、日本の文化伝統を正しく保持する意味においても歴史的仮名づかひを覚えるやうにして下さい。

○リズム：リズムがごつごつしてゐるか、なだらかであるかは気になさる必要はございません。

せん。正岡子規も「どちらかが良いとは言へない、むしろごつごつしたりズムに良い歌がある」と述べてゐます。

○「字余り」と「字足らず」：思ひが三十一文字に納まらないことがありますので「字余り」は良いのですが「字足らず」は駄目です。昭和天皇の終戦直後の御製はまさに万感の思ひあふるる涙なしにはよめない字余りです。

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといはら道すすみゆくともいくさとめけり

一首目は五、八、六、七、九と字余りですが、御聖断なさつた時の御心がこもつてゐて字余りを感じさせません。「爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも」昭和天皇の御心をこの御製で初めて知つた時の身が震へるやうな感激を私は忘れることが出来ません。

連作短歌

いろいろな思ひを一首に歌ひ込むことは不可能です。自分の思ひを順を追つて歌にする場

合に連作短歌をお薦めします。『澤部通信』の小田村理事長の歌を紹介します。

○国武忠彦さん宛の歌（平成五年三月三十一日） 小田村寅二郎（八十歳）

朝早く電話たまはり明日よりは高校長とて赴任さるると

その土地は川崎市の北端にて通ふには遠く二時間要すと

さはあれど「問題校」と言はれ来しその校こそはわが「理想校」なりと

「僕はいま喜びにあふれ勇躍し明日の赴任が待ち遠し」とも

力あふれ喜びに満てるそのみ声聞くだにわが身にしみ通りけり

神奈川県立柿生西高校の校長先生として赴任される国武忠彦さんが小田村先生に電話されてゐる国武さんの勇躍勇んだ喜びの声とそれを御自分のことのやうに喜んで聞いていらつしやるのが目に浮かぶやうです。難しい言葉は一語もありません。問題校に赴任される国武さんが述べられる言葉をそのまま正確に順を追つて連作の短歌にお詠みになつてゐるのが私たちの胸を打つことに注目して下さい。

短歌相互批評について

短歌相互批評の手順の具体的な方法は「短歌相互批評のしをり」をお読み下さい。相互批

評の際に注意すべきは先づ作者の言葉を正確に理解するやうに全身を傾けて努力して下さい。高飛車な態度で歌を修正してあげるやうなことは慎んで下さい。分からない言葉があれば何を言ひたいのか作者に良く聞いて下さい。その言葉が作者の思ひを正確に表現してゐない場合正しい言葉を皆さんで探してみして下さい。自分の思ひを他人が正確に分らうと努力してくれて正確に表現された時の喜び、歌を通じてお互ひが心を通はせ合へた時の喜び等短歌相互批評は実に楽しいものです。

む す び

短歌は、私たちの祖先が遺してくれたかけがへのない尊い文化遺産であることをご理解頂けたことと思ひます。皆さんの素直なおおらかな歌を期待してゐます。自信を持つて作つてみてください。

「歌」と題する明治天皇の御製を五首ご紹介して私の拙い短歌創作導入講義を終わらせて頂きます。ご静聴有難うございました。

世の中にことあるときはみな人もまともの歌をよみいでにけり (明治三十七年)

思ふことありのまにまにつらぬるがいとまなき世のなぐさめにして (明治三十七年)

ひとりつむ言の葉ぐさのなかりせばなにに心をなくさめてまし（明治三十七年）
まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり（明治四十一年）
思ふことおもふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも（明治四十五年）

（資料）澤部通信・第六十三号／六十四号より転載

○船橋市立法典小学校の卒業式にて（平成五年三月十九日）千葉・竹内孝彦（三十歳）
子らみなは指揮に合せて歌ひゆくあふるる涙ぬぐふともせで
過ぎし日々歌ひ重ねて来し歌もつひにはむせび泣く声となる
一介の小学教師と生くる幸しみて思ほゆ今日にありしも

○丸米まるよぬ小学校から佐敷小学校への転勤の内示を聞きて 熊本・養田誠一（三十二歳）
丸米の人に教はり育まれ来し日々なりしこれの四年は
あたたかき先輩・同僚らのみ情けのひとしほしみて我は涙す
教へ子とそご家族の皆様の一入ひとりまるよぬの面輪浮かび来

○澤部通信・第六十三号をよみて（平成五年五月二十日）熊本・北島道治（七十九歳）
師弟ともに涙を流し歌うたふ別離の姿美しきかな（竹内孝彦さんの歌を詠みて）

かねてより師弟同行一筋に教育の道ゆき給ひけむ（同）
丸米を涙を流し去り給ふよき師良き友ここに見しかな（養田誠一さんの歌を詠みて）

創作短歌全体批評

——講話(科学の限界と

しきしまの道)を添へつつ——

(社)国民文化研究会

常務理事兼事務局長

長 内 俊 平



キアゲハ

はじめに

お国を思ふとは

科学の限界

再び歌を詠む「コツ」について

短歌全体批評

物を知るといふこと

科学のいまひとつの特徴

再び短歌批評に戻つて

は　じ　め　に

ただ今、宇野精一先生が、歌を折々創作つくりなさいとおつしやつて下さいましたので、その「折々」といふことから話を始めませう。

皆さんは、いつも故郷くにのお父様お母様を思つてをられませう。その時、「私は常に父母を思ふ」と書くと同違ひです。「常に」とは間断の一つもないことです。夜いびき寝をかいてぐつすり寝てゐながらお父さん、お母さんを思つてゐるつて言ふことはありませんから、常にと書くのは間違つてゐるのです。

お父様お母様は「折にふれて」思ふものなのです。

それでは、「折にふれて」とは、どう言ふことかと申しますと、皆さんは美しい景色を觀みたり、美味おいしい御馳走を頂いたりすると、「ああこの景色をお父さんお母さんにも觀みせたいなあ、ああこの馳走をお父さんお母さんにも食べさせたいなあ」と思ふでせう。それが「折にふれて」といふことであります。

この葉書は（葉書を取り出しながら）、うちの一番小さい孫が、去年日光へ修学旅行に行つた

折くれたものです。

下の方には男体山に雲がかかつてゐる絵が描いてあり、「山がとても綺麗でした。おぢいちゃん、おばあちやんにも見せたいなあ」と書いてあります。

これが折にふれていふことであります。

ですから、夕陽が赤々と沈んでゆく西空を眺めながら、その彼方に住んでゐる友を思ふことがあつた。さういふときに

夕空を赤々染めて沈みゆく夕陽をみつつ西の友を思ふ

とか、思ふことをそのまま綴れば自づ歌になつてゐるでせう。

さういふ風に、物に觸れて感慨が湧き起つたときに、御両親や友達に便りを出さうとすれば、直ちに歌が生まれて来ます。それが歌を詠むコツの一つであります。

そしてそれが唐突な様でありますがお國を思ふといふことにつらなるのです。



お国を思ふとは

皆さんに、「国とは何ですか」と質問しますと、「それは、一定の領土に居住する多数人からなる団体であつて統治権を有するもの」といふ答へが返つて来ます。

しかしそんなものは、私達が直接経験してゐるお国でもなんでもありません。それは、国を外からみた概念でせう。「ああさうか」と言ふ様なものです。しかし私達は、小学校で習つた「戦友」といふ唱歌、ここはお国を何百里

離れて遠き満州の

赤い夕日に照らされて

友は野末のすゑの石したの下

と唱ひ出しますと「お国」と聞いただけで、直ちに、

懐かしい父母の姿、竹馬の友、恋人や、友と一緒に遊んだ故郷の山や川や海や、友と語り合つたお国なまり、産土様の祭り囃子、お袋の味などが、どつと胸にあふれてくるのを禁ずることは出来ません。たつた「お」といふことは一つがたっただけで、いのちがみちてくるのです。これが「国」といふものの実体であります。それは、それと切りはなしては我たり得ない、「我」そのものと言つてい、我々が実際につき合つてゐるまことにある「国」の全一的な姿なのであります。

私にとつて、さういふ懐しさ、尊さの一杯詰つた「日本」のみが実際につき合つてゐるまことにあるお国であります。

科学の限界

ただ今申し上げました様に「国」といふのは、科学的概念です。科学と言ひますと皆さんはすぐ「自然科学」を思ふでせう。奥田克巳先生も、「学問の性格から見ると、科学はすべて自然科学なのである」（「科学の限界と日本の教学」八一頁）とおつしやつてをられますので間違ひはありませんが、一般には、「科学」は、自然科学、社会科学、人文科学などに分類されてをります。しかし要するに科学といふものは、外界のすべての現象を一切主観を交じへるこ

となく冷静に客観的に観察する学問であると言つていゝのです。

明治天皇の御製に

かれがれになりぬる庭の蟲のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり（「蟲聲」・明治四十四年）

といふ御歌がございます。

この御製を心静かに拝誦してをりますと、秋が深まり冷たい霜が降り始めた庭に、最後の生命をふりしほりながら力なく鳴いてゐる虫の音に、ひたすらみ心をお寄せになつてをられる明治天皇様の御姿が眼に浮んで参りますと共に、生きとし生けるものにみ心をお寄せになり、小さな虫の生命も我が生命の如く感じてをられる陛下の大御心が伝はつて来る様な気が致すのであります。と同時に物音一つしない夜よりも力なく鳴く虫の音が聞こえてくる方が一層淋しいとおほせられるみ思ひが伝つて来る様な気がするのであります。

科学的に言へば一番静かなのは、物音一つしないといふことでありませう。しかし私達が実際につき合つてゐる世界はかれがれに鳴く虫の音が枕元にきこえて来る方が、なほ淋しく思はれる、さういふ世界ではありませんか。

科学では、観てゐる自分は観察する対象のこちら側に居ります。それに反し明治天皇様と

観照してをられるものとは自他を分たぬ一如の關係にあります。言葉を変へて申しますと、外をみてゐる様で、実は自分の内面を併せ観てゐる、さういふ關係であります。

我々が實際につき合つてゐる全一的世界と、科学で観る世界との違ひについて幾らかお分りいただけたでせうか。

再び歌を詠む「コツ」について

先程歌を詠む「コツ」は「折にふれて」、父母や友人に便りを書きそれに歌を添へることだと申しあげましたが、いま一つの「コツ」は素晴らしい歌を声に出して朗誦することであり
ます。

私は曾つて宝石商のご主人から次の様な話を聞いたことがあります。その方は新入社員には、徹底して本物の宝石を見せるといふのです。贗物を見せて「これは贗物だよ、ここがかうだから贗物なんだ」などといくら教へても、眞贗を見分ける力はつかない。本物だけを見せると自づから贗物を見分ける力が身につく、といふ話であります。

それと同じで歌を創作する第二の「コツ」は、素晴らしい歌を声に出して読むことであります。

私達の学生時代には朴^ほ菌^ぼの足駄^{あしだ}を履いて、ガラツ、ガラツと音を立てながら街や野原を防^{さき}人の歌や寮歌などをよく唱つて歩いたものでした。

どうか諸君も、素晴らしい歌を、例へば、志^し貴^き皇子^{のみこ}の「石^い激^{はげ}る垂^{たる}水^みの上^ののさ^わ蕨^{らび}の萌^もえ出^でづる春^{はる}になりけるかも」（万葉集卷第八）とか、澤部^{さわべ}さんが導入講義で教へてくれた防^{さき}人の歌などを、声朗々と唱つて下さい。それがよい歌をつくる第二の「コツ」であります。

短歌全体批評

それではこれから、短歌の全体批評に入りますが、皆さんは、既に班別相互批評を終つてをりますので、私は、ただいま申し上げた「コツ」に従つていいなあと感じた歌を中心に読んでゆきたいと思ひます。

先づ第一班の中央大学文四、草野直樹君の歌です。草野君は開会式のととき、参加者代表として「どうか心を通はせあふ友を求めて帰つて下さい」と挨拶されたあの草野君です。草野君はこの合宿の準備のため大変努力され、この合宿地にも皆さんより二日早く入つてをります。

開会を間近に控へて昼食の一杯のカレーのどを通らず（連作ですが一首だけとします。）

何か草野君の緊張した気持が伝はつて来る気がするでせう。誰だつて、この壇上に立つときはドキドキしますよ。まして草野君は、開会式で、皆さんを代表して挨拶をしなければならぬのですから、立つても座つてもゐられない程の緊張です。その緊張がよく伝はつてくる歌だと思ひます。

なほ時間の関係で「仮名遣ひ」の間違ひにつきましては、特別の場合を除き、指摘いたしませんので、班でやつて頂く様にお願ひします。

次は同じく第一班の早稲田大学社会三年の高橋秀和君の歌です。「短歌創作導入講義の中で、小田村寅二郎先生のお歌を拝して」といふ詞書のついた歌です。

同志が幸吾がことのごと受け止めしその喜びをうたひ給へり

喜びに生き生きとせし御姿ぞ目に浮かぶこと俤ばるるかも（連作ですが二首だけとします。）

この歌は詞書にもある通り、今年の春、高校の校長に新任された国武忠彦さんが、赴任の前日早朝、「問題校と言はれるこの学校こそは私の理想校である。赴任が待ち遠しい」旨の電

話をくれたことに感動して詠まれた理事長のお歌に感応して詠んだ歌です。素晴らしい歌だと思ひます。

次は第二班の関西学院大学文二、竹岡淳君の歌です。

久しぶり声出し歌ふ君が代の清き響きに心洗はる

恐らく開会式のこととせう。君が代を皆で声を合せて唱ふと何とも言へない清澄な気持ちがあります。そのよろこびを詠んだのでせう。「清き」といふ表現が竹岡君の人柄をよく現はしてゐる様で、とても好きです。「心洗はる」といふのもいいですね。

次は同じく第二班の九州大学工・聴講生・松岡篤志君の歌です。「菅原亨二先生の所感発表をききて」と題する歌ですが、菅原さんのお話には私も深く胸をうたれました。

ことにも「生徒達が本来持つてゐる素直で豊かな心は、ほんの小さなきつかけで呼びおこされて、生き生きとした姿に変わつてゆく」と言はれた言葉が心に残つてをります。

物を知るといふこと

実は、物を知る仕方には、三つの型があると言はれてゐます。

一つは、「頭で解る」即ち「はい分りました」といふ知識による知り方です。「知解」と言はれてゐるものです。いま学校で教へてゐるものは殆んどこれに属します。その特徴は、理論が中心であること、暗記が出来ること、他人から借りてこれること、などです。皆さん「カニング」をしたことはありませんか。あれは「知解」だから出来るのです。このあとお話する「体解」と「信解」は決してカニングは出来ません。

いま一つは「体解」と言はれてゐるものです。

皆さんはスキーが大好きでせうが、教室で滑り方を教へてもらつて「ああよく解つたよ(知解)」と思つてゐても、いざスキーを履いてみると、本当は何も知つてゐなかつたことに、いやでも身に沁みて知らされますね。あれは身体が覚えるのです。頭で覚えるものではないのです。これが「体解」であります。

私の家では、月に一度、黒上正一郎先生の御著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読会を行つてをりますが、初めの一時間は正座を守ることにしてをります。それは聖徳太

子様がお勉強なさつたお姿をせめて身体でお偲びしようといふ思ひからしてゐるのでありますが、なかなかきちんと出来ないものです。意では「俺も日本人だ、一時間位の正座はいざとなつたら出来るよ」と思つてゐても身体は言ふことをききません。あれも身体で覺えるのです。職人さんの技や芸事などの修得は皆この「体解」の世界であります。

もう一つは「信解」と言はれてゐる知り方です。これは直感力を以つて物事の本質を瞬時にして知るといふ知り方であります。即ちあることを契機にして、たちまちに「心のふるさと」即ち「まごころ」の世界に立返る、さう言ふ知り方であります。

良寛和尚様に由之といふ弟がをられました、その息子の馬之助といふ人は大変な放蕩者でした。—私も放蕩者ですから他人様のことは申せませんが、本にその様に書いてありましたのでその通り申し上げたのです。∴

さて良寛さんの弟さんは、何とかして息子の放蕩が止む様に、良寛さんに説教してくれる様に頼みますが、良寛さんは「分つた」「分つた」と言ふだけで、いつまで経つても何も喋つてくれません。

ある時、弟の家へしばらくぶりに泊つて帰る朝、良寛さんは馬之助に草鞋の紐を結んでくれる様に頼みます。馬之助が紐を結へてゐると、何か冷たいものが襟に落ちてくる。何だらうと思つて顔をあげて見ると、良寛さんの両眼に涙が溢れてゐた、といふのです。それから

といふもの馬之助の放蕩はヒタリと止んだと言ふことであります。(上田三三生著『新編人物講話集』所載)

その様な、ある一つの事を契機にして瞬時にして「まごころ」の世界に立ち返る、これを「心で知る」(信解)と言ふのです。

菅原さんの話された生徒の話は、この「信解」の世界について語つてくれたのです。ですから私達も感動したのです。

「科学」のいま一つの特徴

ついでに科学のいま一つの特徴について申し上げませう。科学では、生きてゐる全体を、花を例にとりますと、はなびら花卉は何枚、その色素は何だ、とかと言ふ様に、皆部分に分断してその性質を調べます。

いま私のこの腕だの足だのを切断すれば、これは、私とは関係のない一つの「物」にしすぎなくなるでせう。その切断されてしまった「物」をいくら集めて来て、世界一の接着剤でくっ付けてみても元の生きた人間にはかへ還りません。

科学といふものは、さういふ風に分断した部分に関する眞理を追求します。ですからその

部分部分の眞理をいくら継ぎ足しても、生きてる全体とはなり得ないので。

私達は自然科学をやれば自然が分ると思ひ込んでをりますが、部分部分の眞理はいくら分つても、自然といふ全一的な靈妙不可思議な存在は、到底人智の及ぶところのものではないのです。

再び短歌批評に戻つて

それでは再び短歌に戻りませう。先程途中まで話をしました菅原先生の所感発表をきいて詠んだ松岡篤志君の歌です。

世の人は近づきがたしとふ生徒らも幼子のごと短歌詠みにけり
生徒らを思ひ浮べて一首一首を詠みます師の声心にしみるも

一首略

ひたむきに船にて勵む生徒らの姿しのばれ涙こみ上ぐ
二月の実習を終へ故郷の母の声聞く生徒の心は

最後の歌は、乗船実習を終へて帰つた時、電話ボックスに飛び込んで「お母さん!!」と言つたといふあの生徒の歌のことを詠んだのですね。この歌はまことに素晴らしい歌だと思ひます。

次は第四班鈴木康之君（福井工大経営工・四）の歌です。「受け付けにて昨年の班長と出合ひて」と言ふ詞書があります。

再会に笑顔をそへての「ひさしぶり」着いてそうそう最初の喜び

「そうそう」といふのは「早々」といふことでせうが、鈴木君を僕は好きだなあ。去年の班長さんが「久しぶり」と言つてにこにこしながら寄つて来てくれたんですね。その最初に会つたよろこびが伝はつて来る様な気がします。

次は亜大法三年の松井章君の歌です。

あぜ道で見知らぬ人にあいさつをされて喜び言ふこんにちは

私達は最近「こんにちは」を言ひ合ふことが少くなりました。朝起きて「お父様、お母様

お早うございます」「行つて参ります」「祐子ちゃんお豆腐買つて来てくれない」「はい」つてなかなかその通りには行かないものです。

明治天皇の御製に

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして（「行」明治四十年）

とございますが、誰でもすぐ出来る「お早うございます」「今日は」こんにちがなかなか容易に出来ないものなのです。前の日に面白くないことがあると、つい、あつちを向いてしまふことはありがちです。そんな日常生活を繰り返してゐるのに、この合宿へ来ると「心のふるさと」へ帰るのでせうか。心がとても素直になります。

松井君もきつと、ころろがひろびろと豊かになつたのだらうと思ひます。「こんにちは」と言つたときの何とも言へぬよい気分が伝はつて来ます。

次は第六班、田中裕一君（早稲田大・政経三）の歌「病軀を押され登壇された村松先生を拝して」といふ詞書がついてをりますが、村松先生のことを詠んだ歌はほかにもたくさんあります。田中君の歌は語呂を少し直さなくてはなりません、とてもよい歌です。

去年今年障り拂ひて来給ひぬ師の御言葉を聞かざらめやは
師の君の眞心仰げば話聞く我等が務めゆめ軽からず

「障り拂ひ」「来給ひぬ」「ゆめ軽からず」などといふ表現は班でまた検討して欲しいですが、氣持がよく伝はる歌です。

今度は第八班、小野恭史君（早稲田大学・第一文三年）の歌です。

いづこにか川の流るる音ききて耳をすませばせみも鳴きたり
道の辺に時折まします地蔵さまいにしへびとも拌みぬるかな

いい歌だと思ひましたね。ただ初めの歌は「いづくにか川の流るる音のして」と直したらどうでせうか。

二首目の「道の辺に時折まします」といふ表現は一寸変です。ね。「時折鳥が飛んでくる」とは言ひますが、「地蔵様が時折まします」とは言ひません。これは「道の辺のをちこちにます」とした方がいいでせう。

しかし恭史君といふ人を僕は大好きです。「ま・し・ま・す」「地・蔵・さ・ま」といふ表現に恭史君の

尊いものに対する敬虔な人柄がよく出てをるからであります。

また「いにしへびとも拝みぬるかな」といふ表現には、宇野先生がおつしやつて下さった「伝統」といふ思ひをこのなかに込めてゐるんですね。「ああ昔の人達も皆んな拜んで来たんだな、どんな方達が拜んだのだらう。この地藏様のお顔にさういふことがみな刻まれてゐるんだなあ」といふ気持でせう。

次は第九班、浜田咲智君（早稲田大学・法一年）の

仲間らと地図を片手に持ちながら小川のせせらぎ聞きつつ歩く

といふ歌です。これも非常に素直な歌だと思ひます。そのすぐあとの別府正寛君（福岡大学・経済三年）の

開会式にて

皆さんの爲に施設を増やせりと足立原市長は宣ひけるも
遠慮なく我が家と思ひてと満面に笑みをうかべて更に述べらる

厚木市では、この集会棟を作るために、大変な出費をされ、この合宿に間に合せて下さいました。本当に有難いことです。そのことをよく読んでくれました。これは参加者一同の思ひです。

次は同じ班の根岸宏之君（拓殖大学・外国語学部三年）の歌

友達と話が長く楽しさに時を忘れて睡眠不足

これは一寸直さなくてはいけないでせうが、好きな歌です。しかしいま寝てゐないでせうね。（笑ひ）宏之君！！

次は第十班、松田裕幸君（ひろゆき亜細亜大学・法三年）

この方は、朝の集ひの司会をしてきてゐる人です。今朝は一寸緊張しちやつて「国旗掲揚！！」といふべきところを「体操！！」と言つちやいましたが、（笑ひ）実によくこの合宿のため力をつくしてくれてをります。ですから歌にもよくそのことが表れてゐます。

はるばると集ひ来たりしみ友らと顔を合はせば奮ひたちたる
すなおなる心もちて語りくる友の言葉ことば聞くも楽しき

と歌つてをります。一首目は「はるばると集ひ来たりし友見ればおのづ心の奮ひ立ちくる」と直し、二首目の「言葉」のあとに「は」を入れた方がいいと思ひますが、松田君の朝の司会をしてゐる姿が分るでせう。合宿をこれからちやんとやつてゆかなければいけないと言ふ緊張感と喜びが伝はつて来ます。

次は十一班、田代吉弘君（日本大学・文理二年）の歌

巡礼の親子二人のつれだちて登りし道を我も登りゆく
村人の優しき心今もなほ伝へられけり巡礼峠に

この巡礼親子の物語りは私は存じませんが、きつと心をうつ言ひ伝へがあるのでせう。これでもいい歌と思ひました。

次は十三班、谷章君（金沢工業大学工三）の

合宿で見つけた事は一回の出会いで変わる自分の人生

といふ歌です。科学には、「偶然」といふものを捨て去るといふ特徴があります。

例へば僕と宝辺君と、「今日午後三時厚木駅の改札口で会はう」と約束して会へば、それは必然でせう。しかし「わあ!!びつくりした。どうしてここにゐるの」なんて、誰だつて思ひがけない人に思ひがけないところで会ふことがあるでせう。それを理論で説明出来ないと「それは偶然さ」と言つて逃げてしまふのです。ところがさう言ふ科学で「偶然さ」と言つてしまつてゐるものの中にこそ世の中の眞実が潜んでゐるのではありませんか。

世界中に何百といふ国があるのに、日本人として生れて来たこと、お父様・お母様の子として生れて来たこと、皆不思議なことだらけでせう。さういふ尊い縁といふものは、科学では説明出来ないのです。

この合宿で皆さんと一緒になれたのも、ただ不思議な縁としか言へ様のないものでせう。そしてあなた達はそのため^{すなはちあきらの}に生涯の友を得たではありませんか。谷君はそのことを詠んでゐるのです。

同様な思ひを同じ班の末崎彰則君（長野大学産業社会四）が次の様に詠んでをります。

いく気なくやる気ないのにここにゐるもうあきらめてひとつ學ぶか

といふ歌です。（笑ひ）僕はこの「ひとつ学ぶか」つて言ふのが好きです。（笑ひ）

次は十四班の倉本聖也君（徳島大・総合科学四年）の

道沿ひに流るる沢のせせらぎのさはやかな音に心洗はる

「今日は」「お疲れさま」と山道を言ひかはしつゝ登るは楽し

これもいゝ歌だなあと思ひました。

次は大木聡君（拓殖大外国語三年）の歌です。

山歩き友と眺める畑仕事亡き祖父思い歩くあぜ道

僕はこの歌を何故いいと思つたかと申しますと、畑仕事をしてゐる方達をみて、おぢいやんを思つたつていふのがとても好きなのです。

あなた方のなかには、おぢいやん、おばあちゃん達は五十年前に、とんでもない戦争をしやがつて、と思つてゐる人もをられるでせうが、終戦のときに、西ドイツ・ボン大学のオットーカロン教授は「敗戦によつて日本を見直した」として次の様なことを言つてをるので

す。「第一、敗戦の混乱の中で国論をまとめ、一定の方向に導くことは不可能に近い、それが世界の歴史が教へる悲劇である。所が日本の場合はどうであつたか。全国民の思想は玉碎から降伏へ一瞬にして纏つた。この様な不思議は世界史に例がないが、これは國民が、天皇陛下の放送を整然と聞きわけた結果で、これは嚴然たる歴史の事実である。この陛下と國民とはただ偉大といふよりほかはない。これは日本の誇りであるとともに人類の誇りである。

第二に、私が見直したのは、敗戦直後の元首と國民との間柄である。敗戦国の元首は、その地位に留り得ないのが通例である。國民の絶望感と戦死者遺族の怨嗟あんなさ（うらみなげ）のことにまつまれて亡命するか、それ以上の悲劇に遭ふのが普通である。所が日本の場合亡命どころか陛下が自ら國民を慰めるために全国巡幸を決定された。しかも本当の丸腰で、四国・九州・北海道と草深い田舎や山奥の炭鉱まで；誰一人危害を加へる者もなく、肅然とお迎へして日の丸の旗を振つて陛下をお慰め申し上げた。陛下と國民と互に慰め合ふ姿、こんな美しい情景が他の敗戦国のどこで見られたか。どこにもない。この様な貴いものを生み出したものは、永い日本歴史の中に培つちかはれた精神の豊かさ偉大さにほかならない」と言つてをられます。

よしんば、さういふ情報が一つもなくとも、諸君は「自分は少しは賢い」と思つてをられるならば、それは、貴方達のお父さん、お母さんが賢いからであり、ご両親が偉いのは、お

ちいちゃんおばあちゃんか賢い方だつたからではありませんか。駄馬から駿馬は決して生れませんか。

そのおちいちゃんおばあちゃん達が、あれだけの戦争をしたのには、何か深い仔細があつたのぢやないか、と思ふだけの健全な魂は持つてをらなければいけないのではありませんか。いろんな情報をいくら集めて来たつて、この健全な魂がなかつたら本物は見えて来ません。今の私達は、さうした祖父母達のこと、あなたかも「自分は別なんだ」といふ冷酷な目で見てをりませぬか。大木君の歌に感動した所以であります。

次は同じ班の津田峰君(たがし)(九州産業大・工四)の

友共に語る瞳を向けあひてああ本物に会へた喜び

ここに來て今日の喜び胸にする感謝の心決して忘れぬ

本当にいい歌だと思ひました。ただ「友共に」といふより「もろともに」とした方がいいのではないですか。

次は第十五班の杉浦信正君(福井工業大学工二)

風呂上り浮ばぬ短歌ひねりつつまだまだ遠い三十一文字に

かういふ歌は、必ずこの合宿では二、三首あるのです。(笑ひ) 皆さん生れて初めて歌を詠むのですから、こんなに真剣に苦勞してゐる姿には共感を禁じえないでせう。私は好感を以つてこの歌を読みました。

次は少し飛ばさせて頂き、第二十一班の中谷映子さん(尚綱大文三年)の「村松先生のご講義」との詞書で詠まれた

師のお姿が尊きものに感じられまばたきの間も惜しく思はる

の歌もよかつたし、第二十二班の白石由美子さん(長崎大学教育一年)の

班員と語らひあへばおのづから故郷の話になりにけるかな

と詠んだ歌が心に残りました。ただ歌のなかの「語らひあへば」といふ表現は一考を要します。「班員との楽しき語らひおのづから故郷ふるさとの話になりにけるかな」とでもしてみてもいい

せうか。

先程も申し上げました様に「お国を思ふ」といふことは具体的には、お袋さんや故郷を深く念ふおもと言ふことでせう。それがまた「心のふるさと」へ帰る道でもあるのです。楽しい語らひのさまが眼に浮びます。

次は第二十四班 中川つぐみさん（高知女子大・文三）の

友どちの一つ一つの言葉にただされてゆく我の心も

の歌も心に残りました。我を忘れて友の言葉にきき入るとき、そこに恵まれる心の糧こそ生みなもときる力の源みなもととなるといふことでありませう。

次は第二十五班の松岡恵美めぐみさん（熊本大・教育二）の

道の辺の畑になりし作物を見ればふる里なつかしく思ほゆ

も故郷のことを詠んだ歌で好きですけれども、「道の辺の畑になれる作物を見るにも思ふわが故郷を」とでもしたらと思ひました。

次は同じ班の新谷幸恵さん（京都外大・聴講四）の歌ですが、この方は班別討論の意義について、B4五枚程にまとめ会の方へ送ってくれた方です。自分では「心を開け、心を開け!!」と班員に言つてゐながら、本当に心を開いてゐなかつたのは自分であつたといふことを班員に告白したとき、班員は心を開いてくれたといふ体験を基にまとめられたもので、感佩いたしました。その方の歌です。

「小田村理事長の御挨拶の中で村松・佐伯両講師がご入院中にも拘らず御講義をして下さるといふことをききて」といふ長い詞書がついてゐます。

かくまでもして我々に伝へんとされたる二師の御心しのばゆ

よい歌です。が、しかし「かくまでもして」といふ表現は、自分だけが分つて、他人にはよく分らぬ表現ですから、もつと具体的に詠む様工夫してみてください。

次は第二十六班の山口祐佳里さん（尚絅大職員）

今気付く何を覺えて来てたのか我が身我が国何も知らずに（「講義・班別研修」）

この歌には胸を打たれました。何も知らないのは山口さんだけではありません。私だつて何一つ知らぬ身です。そのことに真に気付くことは尊いことです。ソクラテス様でさへ友人に「われみづからを知るといふことがいまだに出来ないでゐる」（『バイドロス』）と言はれて、ひたすら、「自分自身」を知ること考察を向けられたとききます。祐佳里さんの嘆きは私達皆の嘆きでなくてはならないでせう。そこに学びの道への勇猛心が恵まれてくるのですから。次は第二十七班の田添由紀さん（茨城大・人文一）の歌です。

神々が宿る山々にかこまれ我のおろかさを知る

この歌は佐伯彰一先生が「森羅万象に魂がある」と言はれた通り、由紀さんは、山にも魂がある、山はそのまま神様なのだと感じたのでせう。ただ「我のおろかさを知る」といふのは、唐突にきこえます。少し直しすぎかも知りませんが、「神々の宿りますとふ山々に向へば自づ掌おのての合はさるる」とでもしたらどうでせうか。

次は同じ班の宮本瑞穂さん（玉川大学一年）の

心から感じることを言い合える友を見つけたこのよろこびよ

この歌は友を見つけた喜びを詠んでゐます。人生で一番大事なのは、本当に惚れ込む様な師を見出すこと、そして命をも分け合ふ様なよい友にめぐり合ふことです。聖徳太子様は「篤く三宝を敬へ」（憲法十七条）と仰せられました。道元様は「佛は是れ大師なるが故に歸依す。法は良薬なるが故に歸依す。僧は勝友なるが故に歸依す」（修證議）と言つてをられます。人生の大事は、この師と法と勝友すぐれたともに出合ふと言ふことに尽きると言つていゝのではありませんか。友を得たよろこびを「このよろこびよ」と歌つた瑞穂さんの歌が好きなのであります。

今度は社会人班（第三十一班）小馬谷秀吉さんの歌です。小馬谷さんははるばる札幌から三度もこの合宿に来てくれてゐる六十六歳の方です。

丹沢の山懐やまかてしころに若きらと老を忘れて學ぶがうれし

ああ、素晴らしい歌だなあと思ひました。齡としをとつた私達は、諸君は気が付いてをられないでせうが、君達の素直な「ひと言」飾らない「一投足」に、どれ程生きる力を与へてもらつてゐるか分からぬのです。小馬谷さんと共に、諸君に厚くお礼を申し上げます。

最後に国民文化研究会員の歌をいくつか紹介致します。初めに合宿運営委員長をしてく

れてゐる小柳志乃夫さんの歌です。

友らみな出でし静けき教室の窓辺に虫の声の聞こゆる

あひまみえ間なき友らのうちとけてウオーケラリーに興じますか

今日の日のコース下見に幾度も通ひし後輩のいたつきを思ふ

委員長として、合宿の成功を祈りつつづけてゐる気持がよく表れてゐると思ひます。
次は青山直幸さんの歌です。

七月二日亡くなりし岳父（島田好衛）を偲びて

夕暮の迫る深山に鳴きしきるひぐらしの声聞けば悲しも

流れゆく霧の中にわが岳父のみ姿かすかに見ゆる心地す

夕霧にけふる山々仰ぎつつ岳父の名呼べば面浮びく

み病のいゆれば共に合宿に参加したしと願ひしものを

み病の床にありても友の上を思ひたまへる岳父のやさしさ

天がける岳父のみ魂よ友ら皆勵む姿を見守りたまへ

岳父とは奥様の父上のことです。岳父ちちうへをひたすら思ふ心が伝はつてくる素晴らしい歌だと思ひます。

最後に理事長のお歌を読んで終りたいと思ひます。

村松剛・佐伯彰一両講師、ともに御入院先の病院から、それぞれ御出講いただくといふ幸慶に恵まれて

お二人の講師の方々合宿を間近かにされて共に病みたまふそれぞれに入院せられ二、三ヶ月は治療の必要と医師くすしは言ふ由三十七年の過ぎし歳月かつてなき意想外の事態の到来に戸惑ふ設営に当れる友らもそを知りて共に憂ひつ過ぎし日々かもそのさなか天の恵みか思はざる有難きお知らせそれぞれゆ賜ふ医師よりの許可下りたれば病院より合宿地に伺はんとのお知らせなりきかたじけなき両先生の御出講のみこころ尊く謝す言こともなし全国ゆ集ひ来たらん参加者もいかに喜びくるかと偲びぬ

このあとに両講師の労をねぎらはれる歌もありますが、どうぞ班に帰つて読んで下さい。以上で終わりますが、なほ紹介したい素晴らしい歌、またアルバイトの高校生の歌など割愛するに忍びない数多くの歌がございますが、時間の関係で省略させて頂きましたことを謝します。ご静聴まことに有難うございました。

■ 青年の言葉

短歌を通して観る生徒の心

福岡県立水産高等学校教諭

菅原 亨 二



皆さん、水産高校についてどれだけご存知ですか。全国で五十一校設置されてをり、福岡県では唯一の存在です。ところで、現在水産高校に入ってきたきます大部分の生徒の意識としては自分たちが将来進む水産業は、いはば三Kと呼ばれ嫌はれる職場であり魅力がないと思つていきますし、また一方水産業界へ進むのが目的ではなく不本意に入学してくる者が割と多く目的意識がないといふ実態がかなり見受けられます。従つて問題行動も非常に多くなります。ですからなかなか学校に慣れ親しんでくれないうし、さらには教師に対して不信任を持つてゐる生徒も多くあります。さうしたむづかしい状況の中で、何とか生徒達の気持ち、本音を探つてみたいと思ひまして色々取り組みは行ひますけれども、なかなか効果を上げられずになりました。そんな中で占部先生が本校に赴任され、福岡県では「規律と友情の体験学習」といふ新一年生を対象とした二泊三日の宿泊研修をしてゐるのですが、その際に占部先生が初めて短歌創作の指導を実践して下さいました。その時、私は占部先生のご指導を拝見いたし、そして生徒が創つた短歌を見せて戴きました。数多くの素直な歌が詠まれてゐて、このやうな生徒達でもあれだけの歌が創れるのだといふことを教へられました。私もさういふ機縁でこの合宿教室に参り短歌創作についてのご指導を受け、私の受けたものを少しでも生徒にと思ひ、これまで短歌創作の指導を続けてきました。その一端をご紹介したいと思ひます。

本校では、海洋漁業科と機関科の生徒を対象に実習船「玄洋丸」に乗り組んで行ふ「乗船

「実習」といふ科目があり、一年間に約二百十日の航海で、鮪延縄漁業実習を二回とトロール漁業実習を三回行ひます。先づ鮪延縄漁業実習ですが、航海日数が約六十五日間で二年生の機関科の三カ月コースと三年生の海洋漁業科の遠洋コースの生徒が乗り組み、ハワイ北西から南東海域で実習をします。次にトロール漁業実習は航海日数が約二十日ばかりの短い航海ですが、二年生の海洋漁業科の沿岸コースの生徒と二年生の機関科の一カ月コースの生徒が乗り組み、東支那海で実習をします。このやうな実習を生徒達は船員と一緒になつてするのですが、厳しいながらも結構和やかなにやつて居るやうに見受けられます。その生徒達がこの実習に対してどんな思ひを抱いているか折々に短歌に詠んでゐます。先づは出港の時からです。生徒達にとり初めて長期実習は、親元を離れて何もかも自分達でせねばならず、それぞれの胸中は期待と不安で一杯であらうと思はれます。

前の晩あまり眠れず夜が明けた神棚向かい安全を祈る

この生徒の家は沿岸漁業をしてをり、時々、本人も父親と一緒に漁に出て行きます。ですから、海の恐さを充分承知してゐるのだと思ひます。

乗船に不安と期待つものらせてハワイに向けてさあ出発だ

さあ乗船実習が始まる。そしてハワイにもいける。「よし、頑張るぞ」といふ気持ちです。岸壁と船の間が広くなり見送るみんなに大きく手を振る



出港には親が見送りに来ています。その姿を生徒達は船から見ながら出港して行きます。航海に出まして最初に経験するが船酔いで、ほとんどの生徒が経験します。日本近海は天気が良くても海上は時化ていることが多いので、船は大きく動揺するのです。

左手にいつも持つてる反吐袋船酔いしてもこれなら安心

そして船酔いにも慣れ、本当に実習のために船に乗つたなどということがだんだん感じられるやうになる生徒が多くなつてきます。船はその頃には太平洋を航海していますので真夏のやうな青空が広がって、自分の気持ちも清々しく、船酔いも直りホッとした気分になります。

デッキ立ち見渡す限り海と空こころ奪われ潮風あびる

ところで、船内ではいろいろな班に分かれて仕事を

していますが、次はその時の体験の歌です。

当直（機関室、船橋）にて

時化の海ブリッジ立ちて驚いた次々寄せ来る山のような波

午前四時寝ぼけ眼をこすりつつ安全靴履きいざ当直へ

一首目の歌は海洋漁業科の生徒が時化の際中に船橋当直に立つた時のことです。「山のような波」とありますが、うねりの高い波がくるとやはり恐いものです。二首目は機関科の生徒が詠んだ歌です。船では二十四時間常に誰かが当直を執つてゐます。もちろん生徒も担当するわけで四時間づつ六直に分けて執つてゐます。そして約十一日ほど航走して漁場に着き、いよいよ鮪延縄漁業実習が始まります。

海の中魚の鱗がきらきらと何が釣れたとみんなが集まる

作業班以外の生徒も、どんな魚が釣れたか見たくて集まってきます。

釣り上げたマグロはとても大きな魚が釣れたか見たくて集まってきます。

「たくさん取るこの操業で」の表現に、この実習で皆が一生懸命に頑張つてゐるの見て自分も手伝つて一杯取りたいと思ふ気持ちを感じられます。また、別の生徒は船員の働く姿を間近で見てこのやうな歌を詠みました。

船員の顔がいきいき操業で疲れも見せずに仕事に励む

船員は毎日十数時間もデッキで作業をしてゐて、頻繁に交替して仕事に当たる生徒から見ると、「凄いな」と感動してゐるのです。

さて、トロール漁業実習の方は冬に行ひます。この時期の東支那海は北西の季節風が吹き出し寒さと時化の中での実習が続きます。

夜明け前ブザーの音して「スタンバイ」顔も洗わずデッキに急ぐ

トロール漁業の場合は三時間網を引き、一時間かけて網を揚げる。次いで漁獲物を処理し、また網を入れるといふ作業を昼も夜も続けて行ひます。生徒は十二時間交替で作業に当たりますが、実際の作業時間は四時間程度です。ただ、深夜でも作業に出て行かなければなりませんので、生徒にとつては作業より待ち時間の方が辛いやうです。

眠たいが夜の作業も楽しいな父とおんなじ仕事をするから

この歌を詠んだ生徒の父親もやはり同じ東支那海でトロール漁船の船員をしてゐます。今まで陸に居てわからなかつた父の苦勞が少しわかつて改めて見直し、その父と同じやうな仕事をする事が、誇らしいやうな嬉しいやうなそんな気持ちを詠んだ歌だと思ひます。

そのやうにして操業実習も終へて、いよいよ生徒が心待ちにしてゐた外地への入港となります。

鮪延縄漁業実習の場合はハワイに入ります。トロール漁業実習の場合は上海です。ではハワ

イ入港時の歌からご紹介いたします。

初めてのハワイの夜景美しくしばらく見とれてデッキに佇む

この時は入港時間の都合で沖で仮泊をしました。夜になると夜景がとても美しく見えました。その感動を詠んだ歌です。そして入港して生徒達にとり初めての外地上陸となります。

ハワイでは楽しく買い物するけれど日本語通じずあわててしまふ

ハワイでは結構日本語でも通じるのですが、この生徒はたまたま英語で話しかけられて全くわからずに困ったと後で話してくれました。

次は上海入港時の歌です。

上海の夜の景色は美しく川ゆく船の汽笛が聞こえる

宿泊したホテルの窓からの異国情緒を詠んだ歌です。

上海の街を歩けば人ばかり珍しそうに名札覗かれる

上海市の南京路といふ繁華街を制服で見学しますので、どうしても目立ちますし立ち止まるとすぐに人だかりが出来て物珍しさうに見られるのです。このやうにして、外地寄港は生徒達にとり本当に楽しい思ひ出となります。ここまで来ますと実習も僅かに帰国を残すのみとなります。鮪延縄漁業実習の場合、漁獲物を神奈川県三崎港で水揚げします。生徒達は水揚げ作業以外は自由時間となりますので、実習中はハワイで手紙を書いたきりで約二カ月間

は親と一切の連絡をとれません。ですから、すぐに公衆電話に走り皆で行列して電話をかけるのです。

三崎着き電話の前で行列し久しぶりにて母の声聞く

懐かしい母の声聞きほつとするこれで着いたと初めて思う

水揚げも終はり三崎港を出港し、いよいよ博多へ向けて最後の航海となります。生徒達にこの乗船実習を振り返りどのやうに思ふか詠ませました。

乗船で色々学び叱られて一つ大人になれたと思う

色々学び、叱られもした。が、しかし何か一つ大人になれたやうな気がするといふ体験は大切なものだと思ひます。

最後に印象深く残るある生徒のお話をいたします。この生徒は中学校時代、いはゆる「悪さ坊主」で有名な子として本校に入った一年生の時など、このままでは本当に続くのか危ぶまれてみました。しかし何とか二年生に進級でき、第二次鮪延縄漁業実習に乗船してききました。担任より「気をつけて観てみて下さい」と念押しされましたが、当初は船酔などで実習になりませんので静観してみました。ところが、ほとんどの生徒が船内生活にも慣れてそれぞれ責任を持って取り組みはじめたにも拘らず、この生徒だけは、相変わらずふてくされたやうな態度でやる気を見せず、遂に当直をさぼってベッドで寝てゐるといふ事態が起こりま

した。私はその時非常に厳しく叱り、その後の実習の取り組み方をじつと観てをりました。さうして実習最後に出してきた答へが次の文章と短歌だったので。

「二カ月間といふ短い期間だったが普通の人にはできない体験ができて本当に良かった。精神的にも人間的にも自分が強くなれたと思う。」

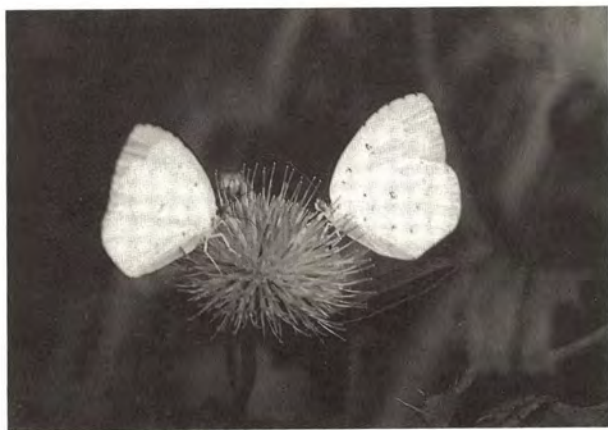
二カ月もあつという間に過ぎたけど思い出深い船の生活

この生徒は下船後、もう本当に生まれ変わったやうになり、両親も担任もびつくりする程、学校生活にも意欲を持つて頑張り始めました。現在三年生の就職や進学を決める大事な時期ですが、この生徒は乗船実習前には絶対に船など乗りたくないと言っていたのが、最近では「将来は船乗りになりたい。でき得れば専攻科まで行きたい」と言ひだしました。それを本人から聞き本当に嬉しい思いがしました。本気で頑張れば何事でもこの子どもたちは出来るのだと教へられた気がします。生徒達が本来持つてゐる素直で豊かな「こころ」は、ほんの小さなきっかけで呼び起こされて、生き生きとした姿に変はつていく。その「こころ」が短歌を通して手に取るように判るようになりました。そして、この乗船実習がそのひとつのきっかけになればと願う次第です。

豊かなる人生を求めて

株式会社製作所エネルギー研究所勤務

松井哲也



キチョウ

私は現在日立製作所エネルギー研究所で、原子力の研究開発に携つてをります。原子力が今の日本のエネルギーを支へる現実的な解決策の一つとして大事であるといふ思ひを抱き、日々実験を積み重ねてゐるといふ生活でありまして、その中で特にこの場でお話して下さるうなことはござりませんが、私が現在に至るまでに、この合宿を通して学ばせて頂いたところをお話して、所感発表とさせて頂きたいと思ひます。

さて、皆さんは大学生になつてをられますから、大学進学といふ一つの時期を経られてゐる訳ですが、その過程の中でどのやうな判断で選択をされてきたでせうか。私の場合、高校三年のとき、やはり同じやうな選択を迫られたときに、迷つたといふよりも、はたと当惑して了ひました。何をどう選択すれば良いのか、その拠り所とでもいふべきものが見当たらない、さういふものが自分の中にないといふことに否応なしに気付かされたのです。己の人生は決して繰返しが利かないといふ厳然たる事實は目の前に迫ってくるのですが、それを乗り切るに足る拠り所がない。そのやうな中で、あるときふ原子力があるなと思ひ、その学科に進学致しました。が、心底強い拠り所であつた訳ではありませんでしたので、大学に入つてからも、迷ひ続けてをりました。

この合宿教室に先輩に誘はれたのは、さういふ思ひを抱いてゐた大学一年のときでした。その合宿は、昭和五十三年に阿蘇せで開かれた合宿で、文芸評論家の小林秀雄さんの御講演

があるからといって誘はれたのでした。小林秀雄さんはこの合宿に五度御登壇されてをられまして、この合宿がその最後の五回目の時でした。御講演は『感想——本居宣長をめぐる——』といふ題で、その御講演後の質疑応答で、ある学生が次のやうな質問をしました。

学生 宣長に倦まず怠らず励みつとめるのが肝要だという言葉がありますが、その励みつとめる力はどこからきたのでしょうか。それをお聞きして、ばくも何とかやって行きたいと思ひますが。

真面目な質問ですが、その学生の声はか細い声でした。小林さんはそれを聞かれてかう答へられます。

小林 理想を持っていたんだよね、宣長は。そうでしょう。その理想のために怠らず励もうと思つたんでしょう。貴方は何が聞きたいんですか。あなた理想を持っているの。

学生 はい。

小林 どういう理想ですか。

学生 僕が生まれて、そうして死ぬまでの間に、何か良かったんだというものをつかみたいと思ふんですよ。

小林 そりゃあ空想かい、理想かい。でもねえ、大体人間するのは空想と理想とを区別できないもんですよ、特に若いうちは。それじゃ、こういう話をしましょう。



『君の理想は何か』と問はれた学生の返答に対し、小林さんは間髪を容れずに、『それは空想であって、理想とは言えない』と言はれるのです。そして、御自身の体験から次のやうに話されます。

小林 僕はねえ、理想なんかいだいたことはないです。僕は貧乏でしたからね。ぼくは大学の時から自活していたんです。それは女を養うためです。ぼくは匿名の原稿を書いて、埋め草原稿ですが、それを売って、その金で女を養っていたんです。で、学校に通っていたんです。(中略) ぼくは理想なんかいいですよ。ぼくらは原稿を売らなきゃ暮らして行けなかったんです。そのころは左翼が大変盛んなときでした。そのとき左翼はどうしてあんなに金持ってたんだかわかんなかったです。彼らはみんな金持ってたんです。というのは、彼らは空想してたんです。日本を

共産化しようという空想に燃えてたんです。だけど生活には困らなかつた。その金はどうつからもつてきた、みんな親父から出して貰つてたでしょう。稼いでるのは一人もいなかつたですよ。ああ、左翼というのは金があるんだなつと思つたよ。ぼくは理想はなかつたよ。それがきみへの答だね。ぼくはそうしているうちにだね、だんだんとぼくの中から理想が育つてきた。そうして書いているうちにもう少しうまく書くこうと思つてきた。そういうふうにはくはやつてきたんですよ。だからね、君みたいに、どうしたらうまく自分を励ましてくれるようなことになるだろうなんていうようなことをぼくに質問しちゃあ困る。

理想と空想とは何が違ふのか。小林さんの語られた言葉から思ひますに、小林さんは、生活をするために原稿を書いてをられた中で、だんだん良く書きたいと思はれ、それが理想となつて育つてきた。すなはち、日々の生活の中から、自分の身の丈にしつくりと合つた願ひが生まれ、やがて、はつきりと意識されるやうになつたもの、それが理想であると言はれてゐると思ひます。一方、空想は、小林さんの周囲の左翼の人達がさうであつたやうに、自身の生活から遊離してゐるもので、遊離してゐるからこそ抱き得るものといつてもよい。空想も理想もどちらも現実には実現は不可能な点では同じですが、空想は実生活からその虚妄さが見抜かれるのに対し、理想は実生活によつて育まれ、磨かれていくといふ所に違ひが

あると言はれてゐるやうに思ひます。その意味において、先ほどの学生の『死ぬまでの間に何か良かったと言えるものをつかみたい』といふ返答は、具体性もなく、ただ漠然たる願ひであつて、やはり、理想ではなく、空想の城をでていなのでせう。が、ここで更に思はれるのは、この学生が何かしら『良く生きたい』といふ願ひを持つてゐながら、生活に根付いた理想を見い出すために不可欠な生き生きとした力、生命力を失つてゐる点です。『励まして欲しい』といふのは、その生命力を取り戻したいといふ願望の弱々しい表明であるとも言へます。小林さんはそこを即座に見抜かれ、御自分の若い頃の話をされたのだと思ひます。

さて、この質疑応答を聞いたときに私を感じましたのは、この学生の抱へてゐる問題は決して他人事ではないといふことでした。大学の選択に迷ひ、職業の選択に迷ふ中で、何かしら強い拠り所を求めていたつもりでしたが、しかしながら、生き生きとした生命力、活力といふものを喪失していたがために、拠り所を見い出す力も失つてゐたといふのが実状であつたと思ひます。この生き生きとした生命力の喪失といふ問題は、実は現代の問題といへるのではないかと思ひます。では、次にくる問題はその生命力、活力を如何にして取り戻すかといふことにあります。

そのことを考へる上で重要と思ふ小林さんの文章を二つ紹介します。
豊かな心は経験を豊かにし、貧しい心は経験を貧しくする。

美しいと思ふことは、物の美しい姿を感じる事です。美を求める心とは、物の美しい姿を求める心です。(中略)さういふ姿を感じる能力は誰にでも備はり、さういふ姿を求める心は誰にでもあるのです。たゞ、この能力が私たちにとつて、どんなに貴重な能力であるか、又、この能力は、養ひ育てようとしなければ衰弱して了ふことを、知つてゐる人は、少いのです。

(『美を求める心』より)

豊かな心が、経験を、そして人生を豊かにするのならば、その豊かな心を取り戻し、育てていくことが私達の生命力、活力といふものを取り戻す道ではないかと思ひます。そして、その豊かな心を育てるとは、次の文章で言はれてゐる美しいと感ずる心を育てるといふことと同義であり、それは、現在の学問では軽視、或いは無視されてゐることであります。そのことは、現代の学問の問題でもあると思ひますが、たゞ現代の問題だと指摘しておけば済むことではなく、やはり、私達自身がその心を取り戻すことのない限り、私達の心に開いた空虚な穴を埋めることは出来ないと思ひます。そして、それを埋めることができれば、そこから、生き生きと生きる力が沸き上がり、そして、さうした心で実人生を生きていけば、その中から自分なりの理想が育つてくるのではないか、私はさう思つてをります。

一年の歩み

中央大学文学部四年

草野直樹



日向薬師

平成四年夏、第三十七回全国学生青年合宿教室（以下、夏季全国合宿）が熊本県の阿蘇において開催され、全国から集まった学生達は寝食を共にして学び、語り合った。合宿を終へ、再会を約して各地区に戻った私達は新たに後期の活動を展開していった。

北陸地区では十二月に中田一義先輩（（株）BBS金明代表取締役）のご協力を得て金沢において地区学生の会合が催された。東京地区からも三人の学生が参加し、初日は夏季全国合宿に対する率直な感想や意見を述べ合った。二日目は金沢の名所旧跡をめぐるつつ普段の学生生活について語りひ親睦を深めた。

東京では地区の活動の拠点である正大寮に各大学の学生と社団法人国民文化研究会（以下、国文研）会員が集ひ、前期と同様に輪読会や地区合宿が行はれた。また、亜細亜大学では東中野修道先生（亜細亜大学助教授）の御指導のもと勉強会が毎週開かれ、小林秀雄の輪読や短歌創作・相互批評等を行った。同大学の有志学生は合宿も度々主催し、その中で福沢諭吉の『文明論之概略』や『短歌のすすめ』を読み進めていった。これ以降の合宿の記録は冊子『翌檜（あすなろ）』としてまとめられてゐる。

関西地区では大阪府吹田市の公民館を借りて月例の読書会が行はれた。各大学の学生と若手国文研究会員が集まり、主に『日本への回帰』のバックナンバーに取り組んでいた。特に第二十四集に掲載されてゐる小柳陽太先生の御講義録『喜びも悲しみも民とともにして……』

の輪読に力が入れられた。

九州・中国地区では十一月に地区合宿セミナーが開催された。合宿は「学問の喜びと人生観を『論語』に学ぶこと」をテーマに、現存する日本最古の孔子廟の残る佐賀県多久市の東原摩舎において行はれた。初日の興島誠央先輩（福岡県立春日高校教諭）の導入発表に始まり、二日目の久保田真先輩（熊本県立天草高校教諭）、小柳陽太先生の御講義、三日目の白濱裕先輩の御講義を受けつつ『論語』を輪読していったが、単に『論語』の文章のみに留まらず伊藤仁斎、小林秀雄にまで及ぶ充実した合宿になったといふ。参加した学生からは『論語』を身近に感じた。孔子が唱へてゐた学問とは学校に在学してゐるときだけでに行ふのではなく、一生を通じて自分が貫き通す何かを追及することだと思ふ」といふ感想が聞かれた。

○ 夏季全国合宿以降、このやうに全国各地様々な活動がなされ私達は研鑽を積んでいった。それぞれについて詳しく書きたいところだが、以下、私が参加させていただいた東京地区信和会の活動と全国学生春季合宿を取り上げ、詳細に記してゆくこととしたい。

○ 前述の通り東京地区での会合は主に正大寮にて行はれる。長年続けてきた寮での月例の集ひに『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の通読会がある。長内俊平先生と星野貢先生（藤

		3月18日(木)	3月19日(金)	3月20日(土)	3月21日(日)
平成4年度 全国学生春季合宿 日程表	7:00		起床 朝の集ひ	起床 朝の集ひ	起床 朝の集ひ
	8:00		朝食	朝食	朝食
	8:30				長内先生 御講話
	9:30		レクリエーション	輪読・『聖徳 大子の信仰 思想と日本 文化創業』	感想発表
	10:30		短歌創作		
	11:30				
	12:00		昼食	昼食	昼食
	13:00				
	13:30			小田村先生 御講義	感想文執筆
	14:00	入所			清掃等
	14:30	開会式 自己紹介 所懐表明	短歌相互批評	質疑応答	閉会式 (解散)
	15:00			輪読・『聖徳 大子の信仰 思想と日本 文化創業』	
	16:00	自習			
	17:00		夕食・入浴	夕食・入浴	夕食・入浴
	19:00	学生体験発表			
	19:30		輪読導入講義 八木先生	輪読・『聖徳 大子の信仰 思想と日本 文化創業』	
	20:30	輪読・『短歌 のすすめ』	輪読・『聖徳 大子の信仰 思想と日本 文化創業』		夜の集ひ
	22:00		就寝	就寝	就寝

中央塩ビ製作所代表取締役会長 国文研監事)に御指導していただきながら通読を進めてゆく。

その他にも輪読会が毎月四回程行はれ、その内三回は小林秀雄の『考へるヒント』を、一回は吉田松陰の『講孟箚記』を読んでいった。『考へるヒント』の輪読は夏期全国合宿以前から行はれてゐたが、『講孟箚記』の輪読は、合宿で松陰についての講義を聞いて興味を持った学生の希望により新たに始まつたものである。

十二月に開催された冬季地区合宿では、さらに多くの時間をかけて松陰の言葉に迫るべく『講孟箚記』と、同じく幕末の動乱の時代に生きた人物である橋本左内の『啓発録』が輪読書として選ばれた。

年明けて平成五年三月十八日からの四日間、東京都渋谷区にある国立オリンピック記念青少年総合センターにて、全国学生春季合宿が開催された。開会式、自己紹介・所懐表明の後、「しきしまの道を歩みて―日本人としての日々の中で―」と題して原一文学兄(鹿児島大学農学部六年)の発表が行はれた。原学兄は短歌を通じて体験したことを生き生きと語った。原学兄の「昭和天皇の御製を拝すことによつて自分は日本人としてどう生きればよいのかがわかつた」との言葉に改めて短歌の持つ力といふものを感じさせられた。その後引き続き『短歌のすすめ』の輪読、短歌創作・相互批評に移つた。

合宿後半は『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読を中心に行つた。輪読に先立つ

て八木秀次先輩（東京理科大学非常勤講師）に導入講義をしていただいた。八木先輩は数多くの資料を紹介しつつ、聖徳太子の生きてをられた時代の状況や、著者の黒上正一郎先生の学問に対する姿勢や人となりについて話をされた。

御講義の後さつそく輪読にとりかかったが、文章が難しく感じられてなかなか内容に踏み込んでゆけない。長内俊平先生の「まづは声をだして正確に読めるやうになることから始めなさい。そして少しでも気になる部分がでてきたらそこを繰り返し読む。そのやうにして私もこの御本に取り組んできた」とのお言葉に従ひ、輪読箇所を何度も朗読した。始めは文字を追っただけで精一杯の学生もゐたが、やがて全員で声を揃えて読めるやうになつてきた。すると輪読書の中で引用されてゐる古事記の一節や万葉集の短歌に対しての感想が次々にでてきた。私達はそこから輪読書の理解を少しづつでも深めようと努力を重ねていった。

三日目には小田村寅二郎先生より「松陰先生↓黒上先生↓聖徳太子」と題して御講義を賜つた。小田村先生は輪読書について難解な語句を中心に丁寧に解説して下さり、そのお話は合宿中の輪読はもとより、その後この本を読むにあつて大いに参考になつた。小田村先生の解説は単なる語句の意味や字義の説明ではないやうに思はれた。黒上先生は太子のお言葉からそのお心をそのまま感じとりつつ研究を積み重ね、小田村先生は黒上先生の御本を通じて太子と黒上先生に心をかよはせてをられる。小田村先生は頭で理解した理屈ではなく先生ご

自身の心で受けとめられたものを私達に語つて下さつたのだと感じられた。

最終日には長内先生の御講話の時間が設けられた。長内先生は三浦貞藏先生の遺文・遺歌集『ふるさと』の中の文章や短歌に触れられつつ、人間の親を思ふ心、子を思ふ心、ふるさとを思ふ心、そして国を思ふ心は同じなのだと言られた。御講話の後、感想発表が行はれ次いで閉会式となつた。

かうして全国学生春季合宿は終はつた。参加した学生達は感動を胸に刻みつけて、新たな活動が始まる新学期を迎へたのであつた。

四月からは各大学で新入生勧誘が展開された。私達の呼び掛けに應へてくれた新しい友等と共にさらに研鑽を積み、合宿の勧誘活動を続けるうちに夏を迎へた。第三十八回全国学生青年合宿教室は目前に迫つてゐたのである。

△地方合宿▽

主催	年月日	場所	参加大学
亜細亜大学 日本文化研究会	平成4年 9月5日～6日	神奈川 津久井 「相模湖ユースホテル」	亜大
九州・中国地区有志	平成4年 11月21日～23日	佐賀 多久 「東原庫舎」	北九州大、九大、九州国際大、 熊本商大、尚綱大、第一薬科大
東京地区信和會	平成4年 12月4日～6日	東京 中野 「正大寮」	亜大、中大、帝京大、東大
北陸地区 有志	平成4年 12月12日～13日	石川 金沢 「レスポワール北陸」	金沢大、金沢経大、金沢工大、富山大、 福井大、福井工大、亜大、中大、帝京大
亜細亜大学 日本文化研究会	平成5年 2月20日～21日	埼玉 秩父 「両神荘」	亜大
亜細亜大学 日本文化研究会	平成5年 5月22日～23日	神奈川 津久井 「相模湖ユースホテル」	亜大

合宿教室のあらまし

亜細亜大学法学部三年

松田裕幸



合宿教室全参加者

第三十八回全国学生青年合宿教室は、平成五年八月七日から十一日までの四泊五日、神奈川県厚木市にある市立七沢自然教室にて行はれた。合宿の会場は静かで自然が豊かな山の中にあり、まはりには雄々しい丹沢の山々が立ち並んでゐた。今年の夏は例年にはない肌寒い天候が続いてゐたが、合宿開催二日前から国民文化研究会会員数名と学生数名が会場に赴き、合宿の最後の準備を行つた。作業は着々と進められ、会場の管理棟には「もろともに助け交はして睦び合ふ友ぞ世に立つ力なるべき」との明治天皇の御製を大きく記した幟が掲げられ、参加者を待つのみとなつた。

参加者の内訳は以下の通りである。

(学生班 六十一大学) 東北大1、筑波大1、茨城大1、東京大2、千葉大1、横浜国立大2、防衛大学校2、新潟大1、富山大5、福井大2、静岡大1、愛知教育大1、奈良県立商科大1、徳島大1、高知女子大1、九州大3、福岡教育大1、大分大1、長崎大3、熊本大4、熊本女子大1、拓殖大28、早稲田大9、亜細亜大7、中央大2、明治大2、淑徳大1、千葉情報経理専門学校1、玉川大1、関東学院女子短大1、青山学院大1、創価大1、桜美林大1、北里大1、立正大1、国学院大1、日本大3、金沢工業大10、福井工業大9、金沢経済大6、長野大2、上田女子短大1、愛知文教女子短大1、京都外国語大4、神戸女子大1、大阪電気通信大1、京都女子大1、関西学院大1、大阪樟蔭女子大1、福岡大3、

九州女子短大1、九州産業大1、九州国際大1、日本デザイナー学院1、九州造形短大1、九州女子大1、宮崎産業経営大5、尚綱大1、熊本商科大1、日本文理大1、米国国際大1

計 一五二名（うち女子五二名）

（社会人班） 会社員・公務員・教員など

計 二十一名

（招聘講師） 二名

（来賓） 六名

8月10日(火) (第四日)	8月11日(水) (第五日)
(起床) 朝の集ひ 朝食	(起床) 朝の集ひ・朝食
(講義) 小柳陽太郎先生	(合宿を顧みて) 小柳志乃夫氏 参加者感想自由発表
班別研修	感想文執筆及び 第2回短歌創作 班別懇談
(地区別懇談会) 昼食	閉会式
(講話)宇野精一先生	昼食・解散
(短歌全体批評と講話) 長内俊平先生	
第2回班別 短歌相互批評	
夕食 入浴・休憩	
(慰霊祭説明)	
慰霊祭	
班別懇談	
夜の集ひ	
就床	

合宿教室のあらまし (松田)

第三十八回合宿教室日程表		8月7日(土) (第一日)	8月8日(日) (第二日)	8月9日(月) (第三日)
	6:30		(起床) 朝の集ひ 朝食	(起床) 朝の集ひ 朝食
	8:00			
	8:30		(講義) 占部賢志氏	(講義) 佐伯彰一先生
	10:00		班別研修	質疑応答 記念写真撮影
	12:00			班別研修
	1:30		昼食	昼食
	2:00		(講義) 村松剛先生 〔質疑応答〕	(短歌創作導入講義) 澤部壽孫氏
	3:00	開会式 オリエンテーション		レクレーション 〔七沢周辺〕 短歌創作
	3:30	班別研修 自己紹介	班別研修	
5:00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	
7:30		(所感発表) 菅原亨二氏・松井哲也氏	第1回班別 短歌相互批評	
8:30	(合宿導入講義) 白濱裕氏	班別研修		
10:00	班別研修			
	就床	就床	就床	

(国民文化研究会) 八五名

(事務局) 四名

(写真) 一名

総計 二七一名

参加者は、合宿申し込み書のアンケートに基づいて六名から八名を単位とする班に編成され、過去の合宿に参加した学生や国民文化研究会の会員が班長となつた。男子学生班は一六箇班、女子学生班は九箇班、社会人班は四箇班に分けられた。

第一日目(八月七日)

△開会式▽

午後二時、全国各地から集つてきた参加者が緊張した雰囲気の中、二日前に竣工したばかりの大講義室に整列した。そして、九州国際大学法経学部三年佐藤公治君が開会宣言をし、第三十八回全国学生青年合宿教室が始つた。続いて、国歌を二度斉唱した後、戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられたすべての御霊に対し、一分間の黙禱を捧げた。

そして、主催者を代表して、国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授、小田村寅二郎先



生が登壇され、「社会・世界が本当の平和な時代を迎えるためには、頭を働かせるだけでなくて心を働かせる力をつけなければ達成できません」「自分のつき合ふ相手が、今何を喜び、悲しんでゐるかが分かる。それを自分の喜び悲しみとできるやうに心を鍛へていつて欲しい」と挨拶された。続いて、来賓を代表して厚木市長、足立原茂徳氏が祝辞として、「いつしか厚木で皆さんをお迎へしたいと思つて参りました。四泊五日、我が家と思つて遠慮なく使つて下さい」と挨拶された。次に参加者を代表して中央大学文学部四年草野直樹先輩が「何か一つでも皆で共感できるものを見つきたいと思ひます」「本当に来て良かったと思へるやうなすばらしい合宿にしませう」と参加者に呼びかけた。

続くオリエンテーションでは、日本興業銀行勤務、小柳志乃夫合宿運営委員長より、合宿の趣旨、運営

体制、諸注意等について説明がなされた。そして、合宿に臨む心構へとして「感動のある人
生に向けて一つのかぎをこの合宿でつかんで下さい」「自分は成長してこの合宿から帰つてく
るのだといふつもりで過ごして下さい」と言はれた。最後に神奈川県立津久井高校教諭、大
日方学指揮班長より合宿中の細かな注意事項について連絡がなされた。

この後、参加者は各自、班室に戻って合宿に参加した動機や理由などを普段の生活を交へ
てお互ひに自己紹介をし、昨年の合宿教室の記録である『日本への回帰―第二十七集』の輪
読を行った。

△講義▽

合宿導入講義として、熊本県立第二高校教諭、白濱裕先生が「現代青年の課題―知性と感
性の恢復を求めて―」と題して話された。

先生はまづ、教え子からの手紙を示され「高校時代に目を輝かせて勉強をしてゐた教え子
が、大学に失望して気力を失つてゐる姿を見ると胸が締め付けられる思ひがする。大学は知
性の場としては荒廃しつつあり、また学生自身も個人の世界に埋没し、いかに生きるかを自
分の感性を働かせて真剣に問ふことがなくなつてゐるのではないか」と言はれ、今の日本の
大学の知性と感性の荒廃ぶりについて様々な資料を基に話された。また、国連のポランティ

アとしてカンボジアで活動中、亡くなられた中田厚仁さんの生き方に触れられ、「今の日本人が『人命は地球よりも重い』といった言葉をただ叫ぶばかりで、さういつた言葉が一人歩きしてしまつてゐる」と、現代の人々がありにまゝの現実を見据えようとしないうことを切実に批判をされた。最後に、「大切にしなければならぬのは、ただ生きるといふことではなくて、善く生きるといふことなのだ」といふソクラテスの言葉を示され、「魂の世話をする、つまり心を鍛へるといふのが最終的な学問の目標ではないか」と言はれ、自分の知性と感性を信じて学んでいつて欲しいと述べられた。

△班別班修▽

講義の後、参加者は班室へ戻り、最初の班別研修が行はれた。班別班修は各講義の後に毎回設けられ、講師の言はんとしたことは何か、各々が最も感銘を受けたのは何かを中心に討論が進められた。初めのうちは「講義は難しく自分には分からなかつた」といふ感想が多く、沈黙になりがちであつた。または、講義の内容から離れた単なる自分の知識を話したり、独善的な感情を述べたりすることもあつた。しかし、各々の自分の思ふところを言葉にできないはがゆき、くやしきを感じ、皆で真剣に語り合ふことがいかに難しいかを感じてのではなにか。さうした中で、少しずつ心を開いて真剣に言葉を交はせるやうになつていつた。

第二日（八月八日）

合宿参加者は、毎朝六時半に各班室に流れるすがすがしい音楽により起床をする。各自洗面、清掃を終はらせた後、体育館前の広場に集合し、「朝の集ひ」が行はれる。「朝の集ひ」では、国歌斉唱、国旗掲揚、ラジオ体操、連絡事項の伝達等が行はれ、今日一日を始める心の準備がなされた。

△講義▽

午前中には、福岡県立太宰府高校教諭、占部賢志先生が「この人を見よ―若き日の体験と課題―」と題して話された。最初に先生は、社会と個人の趣味についてのアンケートを基に社会のために尽くさうとするよりも個人の趣味を大事にしたいと考へる青



年が圧倒的に多いことを指摘された。しかし、青年は苛酷な渦中に自ら打ち込まんとする意気を必ずその胸中にもつてをり、今大事なのは自分の心を見定めていくことではないかと言はれた。そして、若き日の本居宣長について、遊学時代に享樂的な生活を送つてゐた宣長をたしなめようとした母の手紙や宣長がある女性を恋焦がれたことが察せられる日記を紹介され、宣長には青年期に受けた深い悩みをのり越え、願ひをかなへようとした努力と学問とが結びついてゐることを大野晋氏の文章を基に示され、青年にとつて強い深い経験がいかに大切かを指摘された。また、若き日の吉田松陰にも触れられ、西遊日記の序や東北遊歴に際して友との約束のために藩のおきてにそむいたことなどを示され、松陰がいかに自分の課題を抱へて立ち向かつていつたかを述べられた。

△講義▽

午後からは、評論家・筑波大学名誉教授、村松剛先生が「維新群像と現代日本」と題して話された。先生は病院で療養中であられたが、御入院先から直接、会場にお越し下さつた。まづ、明治維新が日本の歴史上、画期的出来事であつたことを述べられ、昭和天皇が敗戦後の日本の出発点として『五ヶ条の御誓文』を『新日本建設ニ関スル詔書』の冒頭に掲げられたことを紹介された。そして、「この詔書の一部に『天皇の人間宣言』といふ俗称が付されて



ることに惑はされることなく、この詔書の真の意味を思ひ出して頂きたい」と訴へられた。また、ペリー来航以後の米国の対日政策について話された後、「日本国憲法は占領管理法であり、日本人が自分で考へたものではない」と言はれた。そして、今日、日本は文化的体質や伝統に則した国造りを歴史からも国際社会からも課せられてみると述べられた。

△所感発表▽

初めに、福岡県立水産高校教諭、菅原亨二氏が「短歌を通して観る生徒のころ」と題して話をされた。氏は「口語でもよいから感動を詠むやうに」といふ教へを受けた生徒が、航海実習で作った短歌を幾首か取り上げられた。短歌を通じて「生徒一人一人のころは、わづかなきつけかけで喚起されて生き生きとした姿に変はつていく、と同時にその生徒のこ

ろが真に分かるやうになつた」と語られた。続いて、日立製作所・技師、松井哲也氏が「豊かなる人生を求めて」と題して話された。氏はご自身の高校時代を振り返られ、将来自分が何をやりたいのかが判然とせず、どうしてやりたいことが決まらないのかとも考へたと話された。そして、小林秀雄先生の文章や過去の合宿教室でのお言葉を紹介され、「日々の実生活の中から自分の身の丈に合った理想がでてくる。そのために生きる力が湧いてくるやうな、心を豊かにするやうな学問をしてゆきたい」と語られた。

第三日（八月九日）

△講義▽

三日目はまづ、文芸評論家・東京大学名誉教授、佐伯彰一先生が「日本文化の深層」と題して話された。先生もまた、御病身でありながら、病院から駆け付けて下さつた。先生はまづ、「明治開国以来、欧米から様々なものを取り入れ、今や日本文化は雑種文化とも言はれる」と述べられつつ、和歌、神社、お盆などの日本の伝統を取り上げて「確かに日本は雑種文化の中にあるが、一方では意外なくらゐに、純種文化とも言ふべき古い習俗が息づいてゐるのです」と言はれた。また、文学作品に現はれる日本の伝統の実例を示され「源平戦ふ時は敵

味方として描かれてゐるが、後半になつて平家の死者が増え滅亡が近づくと、全体の調子が敵、あるいは憎しみといふものから離れ、平家の人々の魂を鎮め慰めようといふ鎮魂歌の様なものも基調になつてゐる」と述べられ、かうしたものが『暗い波濤』阿川弘之や『黒い雨』井伏鱒二などの現代作品にも通じてゐると指摘された。最後に「私達は紛れもなく雑種文化の中に生きてゐるが、心の底には古代から連綿と続いていく『共同の無意識』のやうなものが流れてゐます。私達は、魂の問題を日本人がどう考へて来たのかといふことに思ひを馳せ、深い心の層の中にある『共同の無意識』を発見し守つていく必要があるのではないでせうか」と訴へられた。

△短歌導入講義・レクリエーション▽

午後からは、短歌創作の手引きとして、日商岩井・ガス石炭本部副本部長、澤部壽孫先生が講義をされた。先生はまづ、「短歌を詠み互ひに批評し合ふことは、互ひが裸になつて付き合ふことであり、この合宿で重要な意味を持つのです」と言はれ、防人の歌などを紹介され、短歌とは飾らないありのままに思ひを表現するものであると述べられた。また、短歌の意義、短歌を作る心構へ、作り方などを実例を挙げながら説明された。そして、「短歌は私達の祖先が遺してくれた貴い文化遺産であり、まづ短歌を詠むことが大切です。難しく考へずに、皆

さんの清らかな心のこもった短歌を詠んでください」と呼びかけられた。

その後、参加者は講義室を出てウォークラリーを行つた。天候には恵まれなかつたが、各班が競つて五キロの道程をゴールをめざして出発した。コースはいくつかに分けられ、自然豊かな七沢の地を班員、班付の先輩、相共になごやかに話をし、楽しみながら歩んだ。また、道程には険しい峠道などがあり、汗をかき、息を切らしながら共に登つたが、頂上にはジュースが用意されてをり、渴いた喉を潤した。参加者はその後、班室に戻り、短歌を創作して各々提出した。

△班別・短歌相互批評▽

参加者が提出した短歌は夕食後、班別にまとめられて一枚の紙に刷られ、各参加者に配られた。その



紙を基に、班員一人一人の歌を班員全員で詠み味はひながら、相互にじつくりと批評をし、文法や表現的におかしいところを修正していった。歌の内容は講義や班別討論、七沢の自然、ウォークラリーのことなど、様々であり、短歌を初めて作る者も多かったが、互ひに短歌を作ることの難しさを感じつつも作者の心をおしはかつていった。

第四日（八月十日）

△講義▽

四日目はまづ、九州造形短期大学教授、小柳陽太郎先生が「日本の国柄―皇太子さまをめぐるお歌を中心に―」と題して話された。先生は「国柄とは、その国に本来備はつてゐる他の国にはない美しい世界であり、頭で知るのではなく心で感じとるものです。そして、日本の国柄とは天皇の御存在を抜きにしては考へられないものなのです」と語られた。また、皇室で短歌がたいへん重んじられてゐることについて、雅子妃が短歌の御勉強を熱心にされてをられることを挙げられ、「歌を詠むといふことは、自分の心をやまと言葉で正確に表現し、日本人としての心を、潔くすがすがしく洗ひ清めながら鍛へてゆくといふことであり、このことが皇室の伝統の中で脈々と受け継がれてゐるのです」と言はれ、短歌が日本の国柄に大



きな役割を占めてゐることを指摘された。そして、皇太子殿下の御歌、皇太子殿下をめぐる昭和天皇、今上天皇皇后両陛下の心温かい御製、御歌を読み上げられた。最後に、福沢諭吉がその著『帝室論』において「我帝室は日本人民の精神を収攬する中心であり」、「独り萬年の春として」存在されると説いてゐることを指摘され、天皇と日本の国柄について正しい認識を育てていつて欲しいと述べられた。

△講話▽

午後からは、東京大学名誉教授・文学博士、宇野精一先生が御講話をされた。先生は「私は伝統といふものが好きであり、また大切であると思つてゐます」と言はれ、文明といふものは普遍的であるが、文化は民族的、伝統的なものであり、その代表は言葉であると言へられた。また、短歌について「和歌

は日本の伝統文化の中心であり、二千年くらゐの伝統をもつてゐますが、これほど長い歴史を持ち、現在でも多くの人に作られてゐるといふのは世界中でもその例がない。また、日本人ならだれでも歌が作れますが、それも世界中に例のないことです」と述べられ、短歌を始め、日本の伝統を最も保持してゐるのが皇室であると言はれた。そして最後に、「皆さんは和歌を詠んで伝統を伝えていくといふ体験をなさいました。これを契機に折に触れて短歌を詠むやうになさるとよい、人間形成の上でも大変重要なのです」と呼びかけられた。

△短歌全体批評と講話▽

続いて、国民文化研究会常務理事・事務局長、長内俊平先生が講話を交へて短歌全体批評をされた。先生はまづ、「短歌はノートと鉛筆を持つて野原に出て詠む、といふものではない。美しい風景に出会ひ、それを友や家族にも見せたいと思ふ、その思ひのままに歌を詠み葉書に書き送つてほしい」と呼びかけられた。そして科学の世界と真の世界について、それぞれ全く違つたものであり、真の世界は心で知る、身にしみて感じるといふ知り方でしか促へることができないと指摘され、それは短歌の世界であると言はれた。続いて、短歌においてすばらしい歌を読むことが大切であると述べられ、参加者の作つた歌が載つた歌稿お中から良い歌を選び紹介された。歌の内容は、開会式が始まる前に、緊張した思ひを詠んだ歌、ウオ

「クラリー中、他の見知らぬ参加者と挨拶を交はした喜びの歌、病を押して御出講された先生を思ふ歌など様々であつた。また、文法、表現的におかしいところを指摘して頂き、最後に「すばらしい歌を声に出してどんどん読んで下さい」と言はれた。その後、参加者は班室に戻り、二回目の班別相互批評に入つた。

△慰霊祭▽

まづ、北九州市立八幡病院・技師、森田仁士氏より慰霊祭の説明が行はれた。氏は説明に先立つて、小林秀雄「現代思想について」の一部分や日航ジャンボ機墜落事故、国連ボランティヤとしてカンボジアで亡くなつた中田厚仁さんについて触れられ、人の死の原因を科学的に考へるのではなく、その人を偲ぶことによつて悲しみを乗り越へ、生きていく力が与へられると話され、「私達、日本人はこのやうに亡き人を偲ぶといふことによつて、先人の心を千年も二千年も途切れることなく受け継いできた」と述べられた。そして、「この慰霊祭、亡き人を偲ぶといふことは、遠い遠い神代の昔から日本人が受け継いできた儀式をそのままの形で行ふのだ、だから古事記の世界、さういふ世界に参加することなのだといふ気持ちで臨んで欲しい」と話された。その後、参加者は体育館に設けられた祭壇の前に整列した。参加者の気持ちを整へるべく、故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさね
まもるやまとしまねを

の和歌が朗詠され、慰霊祭は始められた。

お抜ひの後、警蹕の声の響く中、一同最敬礼にて戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられた総ての祖先の御霊をお迎へする、降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者を代表して、古川修氏が祭文を奏上、上村和男氏が明治天皇・昭和天皇の御製を拝誦された。

△祭文▽

平成五年八月十日われらここ緑濃き大山の麓・厚木七沢自然教室に集ひ第三十八回全国学生青年合宿教室を営みて四日目の夜を迎へぬ

朝・夕に学びこしこの七沢のさやけき草原に立つ
プレイホールを齋庭と定めきよめまつりてとこしへ



にみ国まもりますみ祖のみたまみ国のために尊き命を捧げまししはらから達のみたまのみまへにさきやかなれども海の幸山の幸をそなへまつりみたまなごめのみ祭りを仕へまつらんとすここに謹みて告げまつらくはこの美はしきやまとしまねをとことはに栄えゆかしめむと祈るわれらはたまきはるいのちをこめて汝みことたちのみ心を偲び汝みことたちの遺したまひしみのちのこもれる数々のみ言葉を学びそをわれらがここに生き生きと甦へらせつつみ国に内・外にみてるまがごとのことごとを力の限り打ちはらはむとわれらもろともに力合はせて学びつとめ萬世かけて世のまさみちをきりひらかむと誓ひまつらむ

天がれるみ祖のみたまよ願はくはわれらのゆくてをまもらせ給へと合宿教室参加者一同に代り古川修謹み敬ひ畏み畏みも白す

(明治天皇御製)

人

をちこちに別れ住みても国を思ふ人の心ぞひとつなりけり

心

国の為身のほどほどにつくきなむ心のすすむ道を学びて

孝

いとまなき世には立つともたらちねの親につかふる道な忘れそ

雲

あつまると見れば離るる大空の雲にもにたる人心かな

をりにふれて

むらぎもの心の限りつくしてむわが思ふことなりにならずも

(昭和天皇御製)

朝海

天地の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

迎年祈世

西ひがしむつみかはしてさかへゆかむ世をこそ祈れとしのはじめに

帝室博物館移管

いにしへの姿を語る品のあまた集めて文の国たてまほし

千鳥ヶ淵戦没者墓園

国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

旅

遠つ親のしろしめたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

△夜の集ひ▽

合宿最後の夜、参加者全員が体育館に集まつて夜の宴が行はれた。緊張した時間を過ごしてきた参加者はしばし疲れも忘れてなごやかな時を過ごした。班毎、大学毎、様々なグループが続々と登場し、歌や寸劇などの出し物を披露し、会場は笑ひと拍手の連続であつた。

第五日（八月十一日）

△合宿を顧みて▽

日本興業銀行勤務、小柳志乃夫合宿運営委員長が合宿を顧みて話をされた。まづ、氏は「この合宿がいろいろな人の力の上に成り立ち、そこには様々な思ひが込められてゐる」と述べられた。また、この合宿で心を開けなかつた人、講義が充分に理解できなかつた人に対して「残念さと共にくやしさを感じたと思ひますが、さういふ自分を知ることが大切である」と述べられた。さらに、体は鍛へれば、その成果は目に見えて分かるものだが、人生の学問の成果は分かりにくいと語られた。そして、「各々にとつて大きな課題を持ち帰つて、友と学ん

でいつて欲しい」と言はれた。

△参加者感想自由発表▽

四泊五日の合宿も終はりに近づき、参加者が合宿を通じての感想を自由に述べ合ふ時間となった。それぞれ参加した動機は違つても講義を開き、短歌を作り、友と語り合ふ中で何かにしつかりと刻み込まれたものがあるに違ひない。学生、社会人が次々に登壇し、感想を思ひ思ひに述べ合つた。「ふだん考へてゐないことを考へさせられた」「先人の方々の努力が偲ばれ、自分がどうやつて国を背負つていくかを学んだ」「初めて御製を拝誦してすばらしく思へた」「友だちと素直な気持ちをもつて話し合ふことがいかに難しいかを学んだ」「ありのままに物事を見つめられてゐる先生方に感銘を受けた。自分が深く物を考へてゐないことを知つた」「自分は日本人なのに日本のことは何も知らなかつた」「短歌を通じて真に心を交はせることができた」などの声が聴かれた。

△閉会式▽

参加者が力を尽くして学び合つたこの合宿教室も、いよいよ閉会式を迎へた。国歌を二度斉唱した後、参加加を代表して九州国際大学法経学部三年佐藤公治君が、短歌を通じて友と

心を通せることができたことの喜びを述べ、「この合宿教室で経験したことを今後の大学生活にも持つことができると努力していきたいと思ひます」と語つた。次に主催者を代表して国民文化研究会副理事長、宝辺正久先生が「自分が感じられたのは、この班の中で語り合つたあの友達のあの言葉だと、或ひはあの先生がこの壇上で言つたあの言葉だといふことがそれぞれおありだと思ふ。その友達、その先生をどうぞ大事にして下さい」と語られ、明治天皇の御製「もろともに助け交はして睦び合ふ友ぞ世に立つ力なるべき」を拝誦され、「この御製を忘れないで覚えて帰つて下さい」と言はれた。最後に、「進めこの道」と「神州不滅」を参加者全員で斉唱し、熊本商科大学商学部二年喜多村純君の閉会宣言が会場一杯に響き渡り、合宿教室全日程は終了した。

式の後、ロビーで、或いは班室で、互ひに別れを



惜しむ姿が見かけられた。参加者は、ここで出会ひ共に学び合つた友を心に思ひつつ、七沢の山を下りたのであつた。

合宿詠草

合
宿
詠
草



順礼峠へつづく散歩道

△学生・社会人▽

拓殖大 外三 川崎良典

七沢で何か得ようと思ひ立ち期待を持ちてこの場に集ふ

福井工大 経工四 鈴木康之

笑顔にて「よう久しぶり」となつかしき班長の言葉最初の喜び

早稲田大 教四 鈴木由充

なつかしき友と出会へば一年の我が来し方の顧みらるる

亜細亜大 法三 松田裕幸

はるばると集ひ来たりしみ友らを見ればおのづと奮ひ立ちたる

○

講義

小田村先生

日本文理大 工二 鐘築光昭

合宿を開催せし願ひ心から語られ我の気持ち締められり

村松先生

金沢経大 経四 近間常孝

鬼気せまる講義に我はひきこまれおのづと背すじ正しをるかな

東北大 経三 山森明

命かけ我の目を見し師の君の伝へむとふ思ひゆめ忘るまじ

小柳先生

九州女子短大

初等教育二

宮崎 円香

美しき大和言葉に素直なる吾の心をのせていきたし

早稲田大 教四

鈴木 由充

天皇すめらぎの深い慈愛に包まれてお健やかにぞ育たれし皇子みこはも

長内先生

出光興産

広島 秀明

眞実はまこころもちて直感でつかむほかなしと師はのたまひし

日本大学 文理二年

田代 吉弘

思ふこと思ふがままに語ります師の君のごと我も語りたし

青年体験発表

九州大 工聴講生

松岡 篤志

生徒らを思ひ浮かべて一首一首を読みます師の声心にしみ入る

生徒らの素直なる心しきしまのやまとことばにあらはれにける

小柳運営委員長

福岡教育大研究生

谷口 美絵

さまざまの人の思ひのこめられし尊き力を今感じたり

尚綱大職員

山口 祐佳里

おのが身もおのが国さへ知らずして生き来し我に今ぞ気づけり

今までは何学びしやとかへりみてこれより後は努めんと思ふ

賢新栄製作所

牧野吉成

み病をおして来ませる師のをしへ受けつぎ伝へんのちの世までも

朝の集ひ

宮崎産業経営大 経二

永石白馬

七沢の霧立ち込むる山々に心奪はれしはしたたずむ

愛知県立半田高校

徳永幸夫

雨上がり集ふ朝に若人の力強き声山にこだます

班別研修にて

早稲田大 教一

伊藤佳恵

思ふこと友に伝ふる大切さこの合宿で感じたりけり

福井工大 工三

神田儀道

班友に己が無知さを知らされて学び直さむと心に誓ふ

高知女大 文三

中川つぐみ

友どちの一つ一つの言の葉にただされてゆく私の心も

上田女子短大 国文二 花見智子

涙ため言葉をさがし口ごもる友の姿にその心みる

早稲田大 経二 福島康二

わが心友に語れど言の葉の思ふにならずもどかしきかな

亜細亜大 国際二 宮崎裕二

つたなかる私の言葉を真剣に聞き給ひたる友のありけり

九産大 工四 津田峰

諸共に語る言葉に胸躍るああ本物に会へた喜び

玉川大 文一 宮本瑞穂

心より感ずることを言ひ合へる友を見つけたこの喜びよ

キューピー製 山本茂夫

各地より集ひ来たりし人々と語り合ひつつ夜はふけゆく

○

レクレーションにて

早稲田大 法一 浜田咲智

友どちと地図を手挟み山里に小川のせせらぎ聞きつつ歩く

熊商大商二 喜多村 純

打ちとけて共に学びし友どちと歩く山道すがしかりけり

愛教大教四 藤井倫明

里芋を植うる畑の真つ黒な土のにほひに心なごみぬ

熊本大法学一 成清幸子

息切らし山道登るとふと横に見つけし百合の美しきかな

厚木市教育委員会 吉崎直幸

峠より下りてゆけばひぐらしの声のすがしく疲れ忘るも

横浜国大経営二 野崎 讓

班友とひたすら道を探しつつ歩けば心あたたまるかな

早稲田大一文三 小野恭史

いづくにか川の流るる音のして耳をすませばせみも鳴きたり

立正大仏教二 村山智子

七沢の山合ひいつばい響けよと声をあはせて友と歌へり

○

班生活

長崎 大教一 白石 由美子

班員と語らひあへばおのづから故郷の話になりけるかな

明治大 政経三 片山 明子

くもりなき笑顔とやさしき心やり我に教へし班の友らは

防衛大 国際関係二年 小澤 学

すばらしき友と出会ひて語らひてこの一瞬を永遠に忘れじ

国学院大 文三 江島 靖喜

様々な背景を持つ若人の言葉に触れて心ふるへり

東京大 理工一 公文 貴之

七沢に集ひし友と別れ惜しみ語らひつきぬ夜更けるまで

慰霊祭

大分大 教二 上野 瑞穂

頭こうべたれうす明かりに見ゆる祭壇に祈りささげて御霊鎮めむ

徳島大 総合四 倉本 聖也

師の君にならひてをろがみ柏手をそろひて打てば響きわたるも

長崎大学 教一 有川由紀

雨の中しるべとなりし燃ゆる火に人のまごころ感じてうれし

○

全体感想自由発表

関西学院大学 文二 竹岡 淳

乾きたる我が心根に壇上の乙女の涙しみ渡りにけり

桜美林大 国際一 星野 有佳子

最終日感ぜしことを壇上でのべた気持ちの何とすがすがし

薨千趣会 桐山 澄子

壇上ゆ涙ながらに話さるる友の言葉に涙こみあぐ

○

セミナーを終へて

新潟 大 医一 幸田 久男

班友と共に語らひし五日間かくにうち足りし時我知らざりき

九州造形短大 写真一 佐野 果

合宿に参加し得ざりし我が友に学びしことを語りてあげたし

無職 小馬谷 秀吉

三度目の参加なれども新たななる感動覚ゆ七沢合宿

○

別れ

長崎大 教研究生 早田 保美

ふるさとに帰りて後にさまざまの師や友どちに文をおくらむ

厚木市教育委員会 石井 博

思はずも手を握りをり知り合ひし友と別るる寂しさゆゑに

CRC総合研究所 斎藤 肇 夫

夏の陽がさす七沢にまた来むと友と誓ひて今し別るる

△大学教官有志協議会・国民文化研究会▽

国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

松村剛・佐伯彰一両講師、ともに御入院先の病院からそれぞれ御出講いただく、という幸

慶に恵まれて

お二人の講師の方々合宿を間近にされて共に病みたまふ

それぞれに入院せられ二、三ヶ月は治療の必要と医師は言ふ由
三十七年の過ぎし歳月かつてなき意想外の事態の到来に戸惑ふ

設営に当たれる友らもそを知りて共に憂ひつ過ぎし日々かも

そのさなか天の恵みか思はざる有難きお知らせそれぞれ賜ふ

医師よりの許可下りたれば病院より合宿地に伺はんとのお知らせなりき

かたじけなき両先生の御出講のみこころ尊く謝す言もなし

全国ゆ集ひ来たらん参加者もいかに喜びくるるかと思ひぬ

高橋所長のご案内で集会棟をめぐる

国民文化研究会事務局長

長内俊平

市長さん心づくしの集会棟入口のドアにさへ心こもりて

入りゆけば天井高く窓広くめぐりの山々一望に見ゆ

壇上に立ちて講義のさま思ひるならぶ友もつれて思ひぬ

初めて使ふ机を次々ならべゆく職員にならひ友ら汗かく

来賓用の和室美しベランダゆ緑の小山直にのぞみて

木々の秀のゆらぐも見えて雨にけふる林のかけゆせせらぎの声

十二億円投ぜしときくいたづくにこたへざらめや心つくして

「地区別懇談会」を終へた中田一義兄との話を聞きて

今日の日には我が最良のときなりと友は語りぬいと嬉しげに

七沢に連れ来し学生らの真剣に学びをる姿に胸うたれしと

来年も又参加せむと語りたる友の言葉に感極まれりと

学生学生の親しきまなざし身にしみて過ぎしいたづき消ゆるごとしと

四十人もの学生連れ来たるわが友の喜びいかにとただ偲びをり

阿蘇の山降りて直ちに勧誘を始めし友のそのいたづきを

語ることも多くなけれどますらをの友に連なり生きむとぞ思ふ

白濱・占部両講師に

高千穂商科大学講師 名 越 二荒之助

高校の社会科教師の本領をみごと現す二人の講義

若きらの心にかよふ素材選び訴ふ言葉に力こもれり

中田父子の心偲びて「命より貴きもの」を白濱示す

松陰の書簡をひきて「為すべきの決意は今」と占部訴ふ

内外に乱世迫れり若きらとこぞりて起たむ至らざれども

人の世は短しされど日の本のいのちはながしなにかなげかむ

航空自衛隊・航空教育隊・教官

村山 壽彦

合宿に吾が娘と共に参加する夢のかなひぬこの夏もまた

いかにしてすごしをるかど気になりて我が胸うちはおだやかならず

どの辺に座りてをるかど気になりて吾娘をさがしぬ講義室にて

心こめ語りたまひし師の君の御言葉いかに吾娘は聞きしか

わが背をポンとたたいて走りゆく吾娘の笑顔はたのしげに見ゆ

走り去る吾娘の姿にほつとして胸のつかへもうすらぎてゆく

めぐりあひし班の友らと心つくし時を忘れて語りあかせよ

七沢のこの合宿をいつまでも心にきざみて生きませ吾娘よ

宝 辺 矢太郎

白浜さんの導入講義をききて

「月光」のピアノソナタを今生の名残りと弾きたる特攻隊員のありきと

校庭を翼ふりつつ旋回し今し別れと飛び立つ機はや

いつの世もかなしきいのち捧げつる人はありきと声つまらせぬ

生命の尊重のみを言挙げするみにくき今の世をなげきます

こぶしにぎりたたみかくるがにうつたへますことばつぎつぎわが胸をさす

合宿運営委員長 齋日本興業銀行証券部調査課

小柳志乃夫

様々な人の思ひに支へられて合宿教室も無事に終へにき

力足らざる我にしあれど友どちの助けたまへる有難きかな

合宿教室最終日の今日やうやくに厚木の空は晴れわたりけり

合宿指揮班長 神奈川県立津久井高校(定)教諭

大日方 学

いくたびも足を運びて作りたるウォークラリーは今始まりぬ

不備多き下案をつぶさに調べまた直し給ひき安藤さんは

皆元気で帰り来ませうと祈りつつスタートのピストル空に鳴らしつ

本会主催の第三十八回合宿教室は昨年八月上旬の四泊五日の間、神奈川県厚木市立「七沢自然教室」を会場として営まれた。会場使用に際しては、厚木市長の足立原茂徳氏をはじめ関係各位の行き届いたご配慮をたまはり、快適な研修生活を過ごすことができ、まことに有難いことであつた。本書には、「学問と人生」のテーマのもとに壇上から語りかけられたすべての講義、講話の要旨を収録した。どうぞあらためてお読みいただき、存分に活用して下さるやう願ひする。

なほ本書の各講義録の中には合宿地「七沢」周辺の写真を掲載してゐるが、いづれも七沢自然教室の御好意によりお借りした写真から転載させていただいたものであり、ここに記して謝意を表したい。

さて今年の合宿教室は、すでに八月六日(土)から十日(水)に日程で、熊本県阿蘇国立公園、阿蘇町の「阿蘇の司・ピラパークホテル」で開催される運びである。招聘講師として東京大学教授の小堀桂一郎先生、ジャーナリストの徳岡孝夫先生をお招きすることに決定してゐる。全国の学生、青年諸氏の多数の御参加を願ひつゝ、あとがきとする。

平成六年三月一日

編集委員 山内 健生

占部 賢志

——日本への回帰——

(第29集)

平成六年三月十日発行

定価 七〇〇円

〒 二四〇円

編者

大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅一郎

発行所

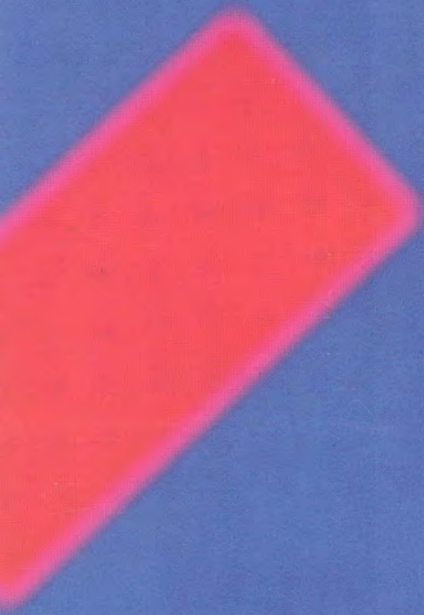
社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七―一〇―一八柳瀬ビル

振替(東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします



大学教官有志協議会編
社団法人 国民文化研究会